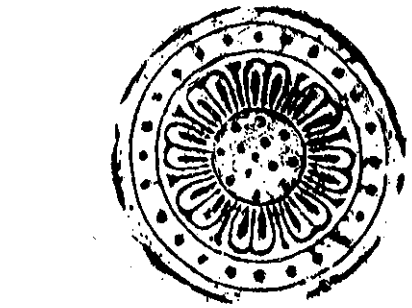
鴻臚館跡 13

—平成13年度発掘調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第745集



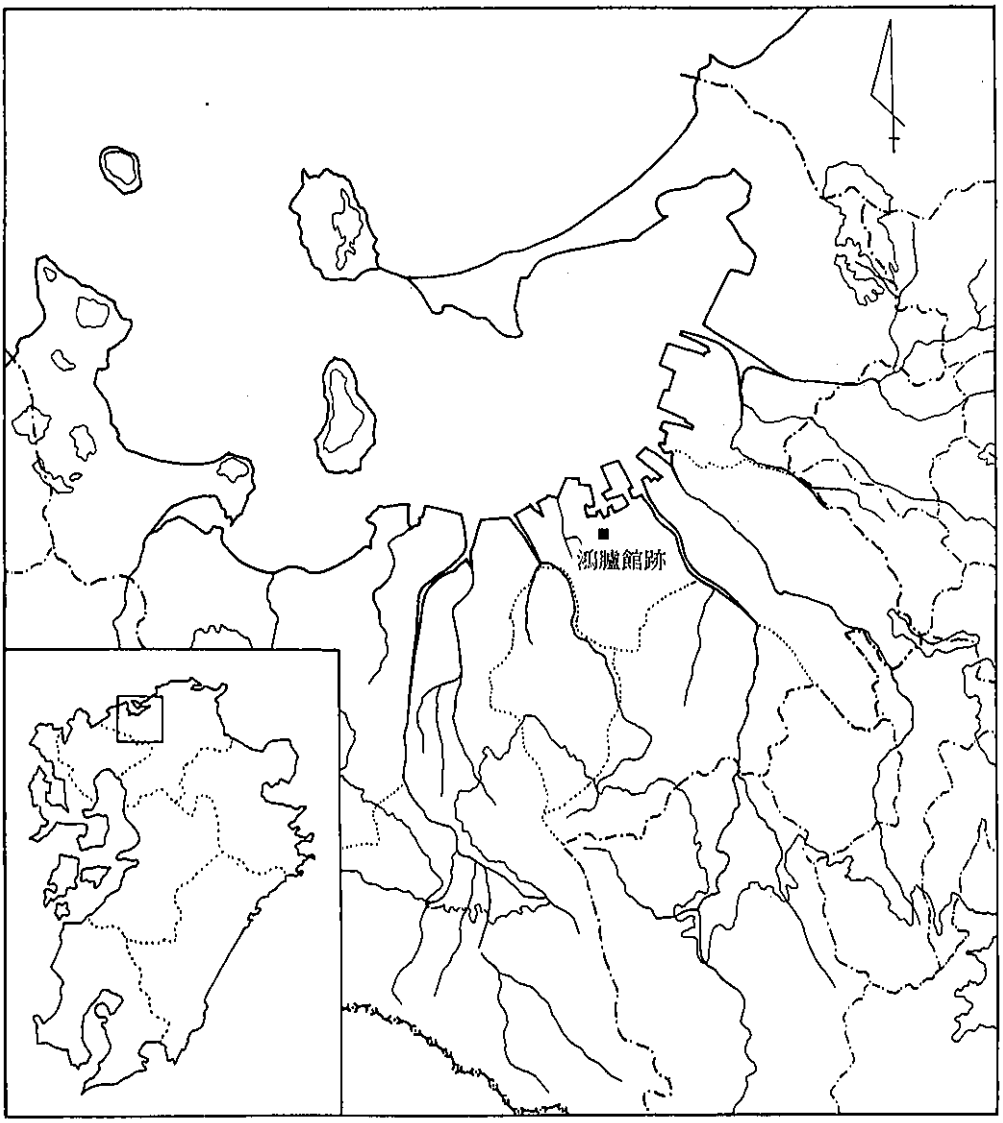
2003

福岡市教育委員会

鴻臚館跡13

平成13年度発掘調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第７４５集



２００３

福岡市教育委員会

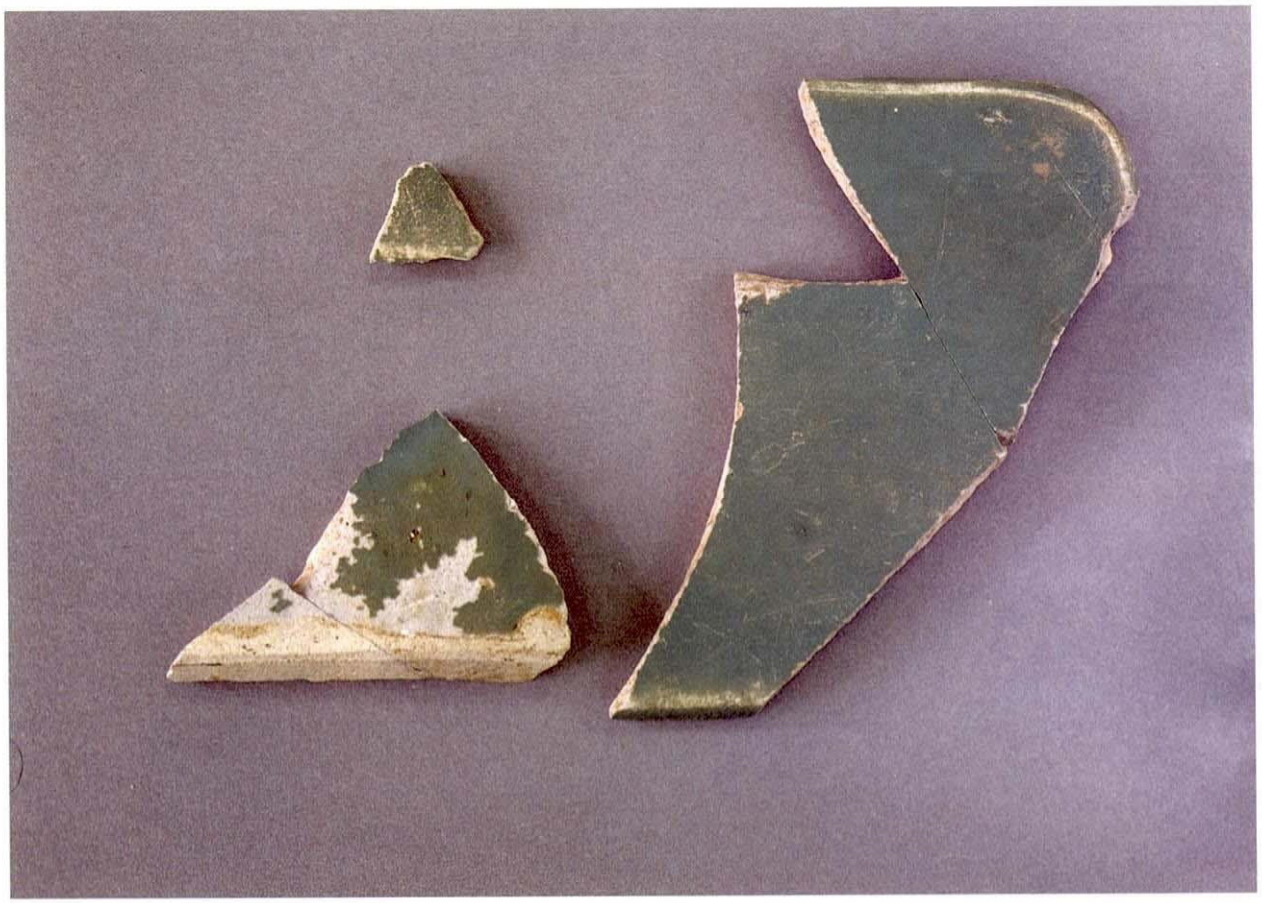
１　第Ⅳ期調査区（平成11～13年度）全景　航空写真（モザイク）

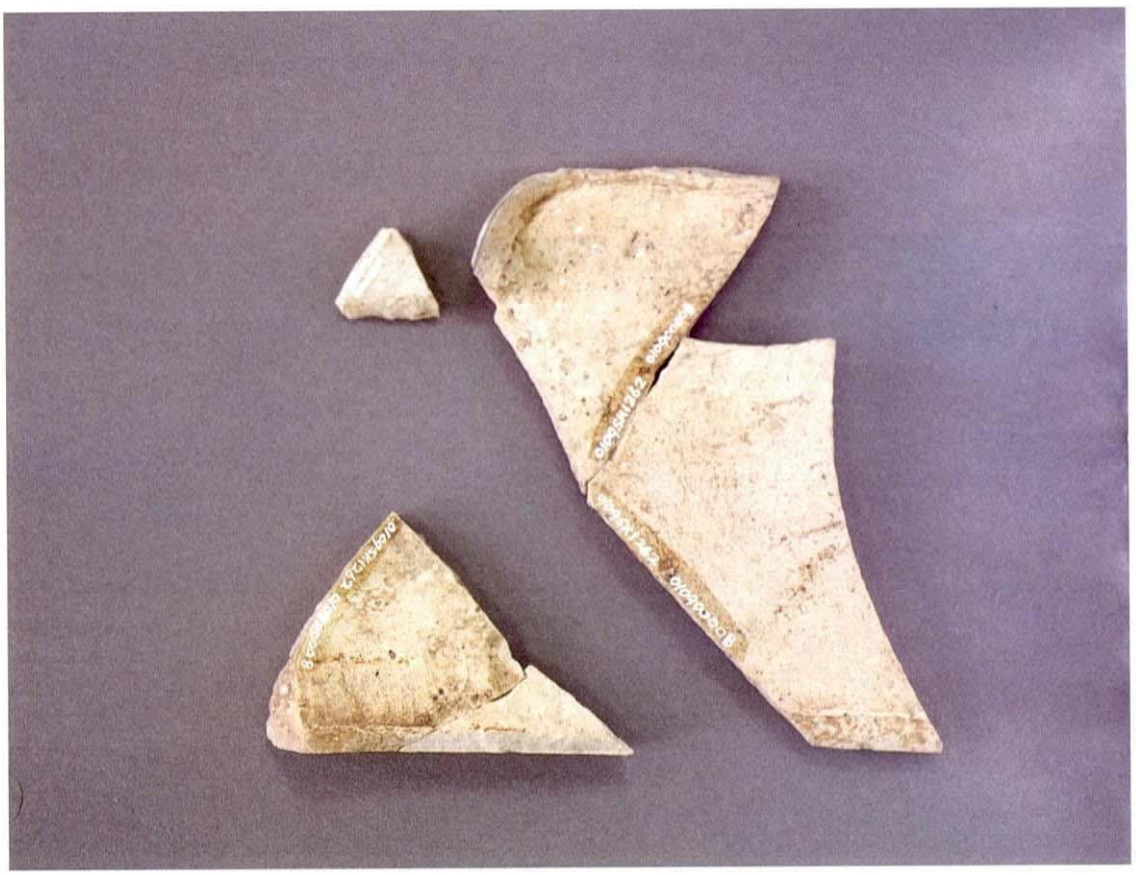
２　平成13年度調査区全景（東から）

３　平成13年度調査区全景（南から）

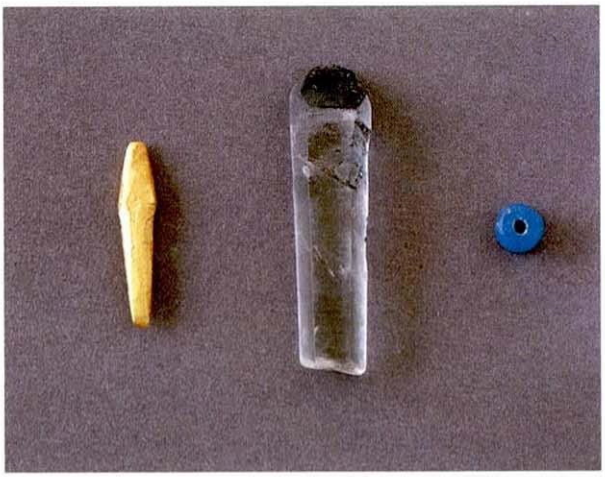
4　平成13年度調査区第Ⅲ期礎石建物（東から）

5　平成13年度調査区第Ⅱ期建物　東門と布掘掘立柱列（北から）





6　出土遺物（長沙窯青緑釉陶枕）

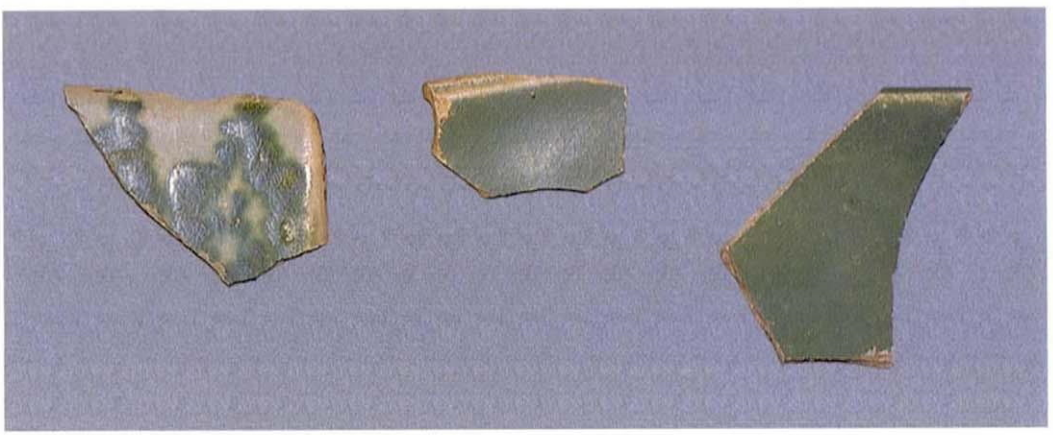


（１）鏃形金製品、水晶、ガラス玉

（２）交胎陶枕

（３）長沙窯卸目皿

７．出土遺物



８　長沙窯青緑釉陶枕参考資料（左２点 出光美術館蔵資料、右 鴻臚館出土遺物）

序

鴻臚館跡の発掘調査は、昭和62年末、福岡市中央区の国史跡福岡城跡内にある平和台野球場外野席スタンド改修工事の際の発見を契機として、翌63年から本格的に開始いたしました。

本市では、鴻臚館跡の全容解明を目的として、昭和63年度に鴻臚館跡調査研究指導委員会を設置し、その御指導の下で、発掘調査と関連資料の収集等を継続して推進しております。

これまでの調査で、鴻臚館の遺構が広がると予想されておりました平和台野球場は平成10年度に解体撤去工事が行われ、平成11年度からいよいよ平和台野球場跡地の本格的な発掘調査に着手いたしました。

平成11年度の調査では、これまで見つかっていた鴻臚館建物の北側にも、谷を埋め立てた堀状の遺構や、多量の瓦や陶磁器を検出するなどの新しい発見があり、平成12年度の調査では奈良時代の建物区画が見つかり、堀北側にさらに別区画の建物が存在していたことが明らかになりました。平成13年度の調査では、この建物が南北同一構造、規模であることが判明し、更に平安時代の文献に現れる「鴻臚北館」の一部と思われる礎石建物も新たに見つかりました。鴻臚館の全容解明に向けて、今後の調査が大いに期待されるところであります。

本書は、平成13年度に実施した平和台野球場跡地の発掘調査成果を内容とする報告書です。本報告書が、鴻臚館跡をはじめ本市の埋蔵文化財に対するご理解とご認識の一助となれば幸いであります。

発掘調査から本報告書の刊行にいたるまで、ご理解とご協力をいただいた財務省福岡財務支局、福岡市都市整備局、また、温かくご指導いただいた鴻臚館跡調査研究指導委員会の各先生方、文化庁、福岡県教育庁の皆様方には深甚なる謝意を表します。

平成15年３月31日

福岡市教育委員会
教育長 生田征生

例　言

1．本書は、平成13年度に実施した鴻臚館跡発掘調査報告書である。

2．本書で用いた地図は、Fig. 1が国土地理院発行五万分の一地形図「福岡」、Fig. 2が福岡市都市計画図№60.61.71.72である。

3．本書で用いた方位は、平面直角座標系第Ⅱ座標系に拠っており、真北方位より0° 19′ 西偏する。

4．調査区はこの座標の基づき、10ｍのグリッドに区画した。便宜上、Ｘ軸64,790を始点に北側10ｍ毎にａ，ｂ，ｃ…、Ｙ軸は西側10ｍ毎に-56,790台を790、-56,800台を800と順に呼称した。

5．遺構番号は４桁とし、平成13年度調査区をしめす12の後に通し番号をつけ、遺構性格を示すアルファベットを前に付した。

例　塀・柵列：ＳＡ１２〇〇　　建物：ＳＢ　　溝状遺構・堀：ＳＤ　　道・通路：ＳＦ
池：ＳＧ　　炉：ＳＨ　　土壙：ＳＫ　　埋立遺構：ＳＭ　　コンクリート基礎：ＳＵ
性格不明の遺構・その他：ＳＸ

6．本書の執筆は池崎譲二が担当した。編集は鴻臚館跡調査担当課長折尾学、担当主査大庭康時の協力を得て、池崎が行った。第２章４については大庭が執筆した。

7．編集に当たっては、整理調査員　宮園登美枝、井上涼子　整理作業員　堀一恵、金石邦子、冨永静子の補助を受けた。

8．遺物実測は、降矢哲男（九州大学）、陳洪（九州大学）、宮園、井上がおこなった。トレースは宮園がおこなった。

9．平成13年度の調査は以下の方々の参加で実施した。記して感謝の意を表します。

［発掘作業］

伊藤美知子、牛尾成正、大橋善平、嘉藤栄志、鐘ヶ江正良、清原ユリ子、齋藤善弘、坂本ハツ子
佐藤テル子、芝　三郎、島津明男、杉村文子、鈴木敏男、髙田甚一郎、谷　吉美、堤　篤史
土斐崎初栄、豊福浩史、永井鈴子、仲野正徳、沼田昌信、能美須賀子、原　幸子、古山　昭
脇坂レイコ、丹羽崇文（九州大学）、陳洪（九州大学）、根岸　洋（東京大学）、
石井龍太（東京大学）、姜玧錫（漢陽大学）

［整理作業］

整理調査員　宮園登美枝、井上涼子、ゴチョウ・メネス（九州大学）、
整理作業員　金石邦子、寺村チカ子、冨永静子、堀一恵、大里律子、松尾和子

本文目次

第１章　序　説 …… 1

１．調査計画 …… 1

２．既往の調査 …… 3

３．平成13年度の調査事業概要 …… 6
（１）発掘調査の組織 …… 6
（２）調査事業の概要 …… 6

第２章　平成13年度発掘調査報告 …… 8

１．発掘調査の経過 …… 8

２．時期別検出遺構と出土遺物 …… 10
（１）戦後構築物 …… 10
（２）旧陸軍24連隊関係遺構 …… 10
（３）福岡城関係遺構 …… 14
（４）中世遺構 …… 15
（５）鴻臚館・筑紫館関係遺構 …… 18

３．平成13年度調査のまとめ …… 36

４．平成14年度調査速報 …… 39

参考史料 …… 40

挿図目次

Fig. 1　鴻臚館跡の位置と周辺遺跡分布図（1／50,000）…… 2
Fig. 2　福岡城内既往発掘調査区位置図（1／5,000）…… 4
Fig. 3　鴻臚館跡調査研究指導委員会現地視察 …… 7
Fig. 4　発掘調査風景 …… 7
Fig. 5　現地説明会風景 …… 7
Fig. 6　表土剥ぎ状況 …… 8
Fig. 7　紀宮様　鴻臚館発掘調査現場見学 …… 8
Fig. 8　体験発掘風景 …… 8
Fig. 9　第Ⅳ期調査区　平成11～13年度調査区　近現代遺構平面図（1／400）……折り込み
Fig.10　平成13年度調査区上部検出遺構（1／200）……11
Fig.11　昭和５年24連隊建物配置図……12
Fig.12　24連隊建物配置模型（陸上自衛隊春日原基地資料館所蔵）……12
Fig.13　福岡城下町、博多近隣図　部分（文化９年写）……13
Fig.14　大音屋敷と城内通路……13
Fig.15　24連隊、福岡城関係遺構出土遺物……14
Fig.16　中世遺構（SM1208、SD1222、SD1239、SD1240）出土遺物 ……16
Fig.17　SK1261実測図 ……17
Fig.18　SK1261出土遺物 ……17
Fig.19　第Ⅳ期調査区　平成11～13年度調査区　古代・中世遺構平面図（1／400）……折り込み
Fig.20　土層図集成（１）SD1218土層断面　（２）SD1279土層断面部分
（３）調査区西端土層確認トレンチ土層断面……折り込み
Fig.21　平成13年度調査区下部検出遺構（1／200）……19
Fig.22　第Ⅱ期以前の遺構平面図（1／200）……20
Fig.23　SX1245実測図 ……21
Fig.24　SX1278、SA1237南列実測図 ……22
Fig.25　第Ⅱ期遺構平面図（1／200）……23
Fig.26　堀南側第Ⅱ期遺構（SB300、SA301）平面図（1／200）……24
Fig.27　第Ⅲ期遺構平面図（1／200）……25
Fig.28　堀南側第Ⅲ期遺構（SB31）平面図（1／150）……26
Fig.29　SB1228実測図（1／150）……27
Fig.30　SX1278、SA1237、SB1228出土遺物 ……28
Fig.31　SK1225実測図（1／30）……29
Fig.32　SK1255出土遺物 ……30
Fig.33　SK1264実測図 ……31
Fig.34　SK1273出土遺物 ……32
Fig.35　SK1262、SK1264、SK1270、SK1274、SK1277出土遺物 ……33
Fig.36　整地層出土遺物……34
Fig.37　鴻臚館跡検出建物遺構平面概念図 ……37

写真図版目次

巻頭図版１　第Ⅳ期調査区（平成11～13年度）全景　航空写真（モザイク）
２　平成13年度調査区全景（東から）
３　平成11年度調査区全景（南から）
４　平成13年度調査区第Ⅲ期礎石建物（東から）
５　平成13年度調査区第Ⅱ期建物　東門と布掘掘立柱列（北から）
６　出土遺物（長沙窯青緑釉陶枕、黄釉褐彩卸目皿）
７　出土遺物（１）鏃形金製品、水晶、ガラス玉
（２）交胎陶枕
（３）長沙窯黄釉褐彩卸目皿
８　長沙窯青緑釉陶枕参考資料（出光美術館蔵資料）

Pl.１　平成13年度調査区全景（南から）
Pl.２　平成13年度調査区　１．調査前の状況（東から）　２．調査前の状況、残土撤去後（東から）
３．表土剥ぎ終了後の状況（東から）
Pl.３　調査区全景　空中写真　１．上部検出遺構面　２．下部検出遺構面
Pl.４　１．上部検出遺構面全景（西から）　２．上部検出遺構面全景（東から）
Pl.５　１．SD1219　全景（東から）　２.SD1219　全景（西から）
３．SD1206　全景（東から）　４.SD1206　土層断面（西から）
Pl.６　１．平成13年度調査区下部検出遺構全景（南から）
２．平成13年度調査区下部検出遺構全景（東から）
Pl.７　１．SM1208　最上面水口遺構遺物出土状況（東から）
２．SD1222　遺物出土状況（南東から）　３．SD1230　土層断面（南から）
４．SE1243　全景（東から）
Pl.８　ＳＫ１２６１　１．遺物取り上げ後全景（南から）　２．遺物出土状況（東から）
３．須恵器甕出土状況（西から）　４．遺物出土状況部分（南から）
Pl.９　ＳＸ１２４５　１．石垣全景（南から）　２．東南隅石積み状況（南から）
３．石垣南列検出状況（西から）
Pl.10　ＳＸ１２４５　１．SK1274下面での南列石垣検出状況（北から）
２．石垣南列ライン（西から）３．SD1218での南列石垣検出状況（北から）
ＳＸ１２７８　４．石積み全景（西から）　５．石積み全景（東から）
Pl.11　ＳＡ１２３７、ＳＢ１２３８　１．全景（南から）　２．全景（北から）
Pl.12　ＳＡ１２３７南列検出状況　１．SX1278南での検出状況（東から）
２．SX1278南の土層断面（南東から）
３．SX1278南での検出状況（南西から）
４．西端土層確認トレンチでの検出状況（西から）

5．西端土層確認トレンチでの検出状況（東から）
6．SD1218土層断面での検出状況（西から）
ＳＢ１２３８　7．脇間堀方と柱抜き跡（南から）
Pl.13　ＳＢ１２２８　1．遺構全景　調査完了後（東から）
2．遺構全景　人の位置が柱位置（東から）
Pl.14　ＳＤ１２１６　1．雨落ち溝全景（東から）　2．雨落ち溝部分（東から）
ＳＢ１２２８礎石および礎石根石検出状況
3．SP02と01（南東から）　4．SP02（南東から）
5．SP01（南東から）　6．SP0（東から）
Pl.15　ＳＢ１２２８礎石根石検出状況
1．SP1（東から）　2．SP3（東から）　3．SP4（東から）
4．SP5（東から）　5．SP6（東から）　6．SP7（東から）
7．SP8（東から）
Pl.16　ＳＢ１２２８礎石根石検出状況
1．NP02（SK1281）（東から）　2．NP0（東から）　3．NP1（東から）
4．NP2（東から）　5．NP3　（東から）　6．NP4（東から）
7．NP5（東から）　8．NP7（東から）
Pl.17　ＳＢ１２２８礎石根石検出状況　1．NP8（東から）　2．NP9（東から）
3．SK1255全景（南から）　4．SK1262全景（東から）
5．SK1264全景（南から）　6．SK1265全景（南から）
7．SK1267全景（南から）　8．SK1274、SK1275（北東から）
Pl.18　1．鍬形金製品出土状況（東から）　2．水晶出土状況（北から）
3．SK1269　長沙窯青緑釉陶枕出土状況（南西から）
4．整地層　長沙窯青緑釉陶枕出土状況（東から）
5．西端土層確認トレンチ土層断面（東南から）
6．西端土層確認トレンチ土層断面（東から）
7．西端土層確認トレンチ土層断面（東南から）
Pl.19　出土遺物（１）
Pl.20　出土遺物（２）

表目次

Tab. 1　鴻臚館跡調査中期計画表 …… 1
Tab. 2　福岡城跡・鴻臚館関係調査一覧 …… 3
Tab. 3　福岡城跡・鴻臚館跡関係調査報告書一覧 …… 5
Tab. 4　平成13年度調査検出遺構一覧 …… 9

第1章　序　説

1．調査計画

鴻臚館跡の発掘調査は、昭和62年末の平和台野球場外野席における関連遺構と遺物の発見を契機とする。昭和63年度には鴻臚館跡調査研究指導委員会が組織され、全容解明のための本格的な発掘調査が開始された。発掘調査は下表の「鴻臚館跡調査中期計画」の下で実施している。

中期計画は、鴻臚館跡推定地が国史跡福岡城跡内に立地しているために、文化庁をはじめとする関係各機関と協議の上、「舞鶴城址将来構想」の下で進められている城内各施設の移転事業計画を参考にしながら策定し、平成５年度第２回指導委員会で了承を受けた。

第Ⅰ期調査は平和台野球場外周南側部分を対象に、昭和63年度～平成４年度にかけて調査を実施。この地区では、奈良時代から平安時代までの建物遺構群と中国産陶磁器をはじめとする大量の遺物が出土し、鴻臚館跡の可能性が高いことが確認された。またこの地区は、５年度から７年度にかけて、平和台野球場撤去後の本格的整備までの当面の仮整備という位置づけで第Ⅰ期整備を実施した。

第Ⅱ期調査は、５年度と６年度に福岡城三の丸西郭にある「舞鶴公園西広場」を調査対象地として、福岡城跡西辺部における鴻臚館関連遺構と遺物の有無確認、および旧地形復元を目的に調査を実施した。その結果、福岡城西北域における築城当時の地業の状況と当時の海岸線の復元が可能となった。

第Ⅲ期調査は、第Ⅱ期調査区南側の福岡城土塁部分を対象に平成７～９年度に実施し、平成10年度には平和台野球場解体工事に伴う立会調査と解体後の試掘調査を実施した。

平和台野球場跡地部分の本格的発掘調査は、面積が広大なため南半部と北半部に分けて実施することとした。南半部を第Ⅳ期調査として、当初平成11年度～14年度を予定していたが、平成11年度調査で遺構の遺存状況が予想以上に良好なことが明らかになり、16年度まで調査を延長することが平成12年度指導委員会で了承された。北半部は第Ⅴ期調査として第Ⅳ期調査終了後実施する。またこの間の調査結果を勘案しつつ、整備に向けての基本構想等の検討を行う計画である。

第Ⅵ期調査は、鴻臚館跡の全容解明にとって必要と思われる地点について調査を行うもので、第Ⅳ期調査以降の成果およびその進捗状況をみながら、調査地点等は検討して行く予定である。

（平成14年度調査研究指導委員会で中期計画は下表のとおり変更になった。）

Tab.1　鴻臚館跡調査中期計画表（平成14年12月19日現在）　※網かけ部分は本報告の対象とする事業年度

		対象地区	昭62～平4	平5～6年	7年	8年～10年	11	12	13	14	15	16	17	18	19～23年	24～28年	備　考
発掘調査	緊急調査	平和台野球場外野席	―														鴻臚館の発見
	第Ⅰ期調査	旧テニスコート	―	―													指導委員会の設置 本格的調査の開始 第Ⅰ期整備対象地
	第Ⅱ期調査	西広場		―	―												範囲確認調査 旧地形の復元
	第Ⅲ期調査	野球場外周南側土塁他 野球場跡地			―	―	―	―	―	―	―	―	―	―			範囲確認調査 野球場解体立会調査 野球場跡地試掘調査
	第Ⅳ期調査	野球場南区					―	―	―	―	―	―	―	―			平成11年から調査着手 （６カ年計画）予定
	第Ⅴ期調査	野球場北区													―	―	平成17年から調査着手 （３カ年計画）予定
	第Ⅵ期調査	舞鶴球技場等重要地点														―	
整備	第Ⅰ期整備	旧テニスコート		―	―	―											平成７年８月10日完成
	第Ⅱ期整備	球場跡地									―	―	―	―	―	―	第Ⅳ期調査の結果を検討のうえ計画

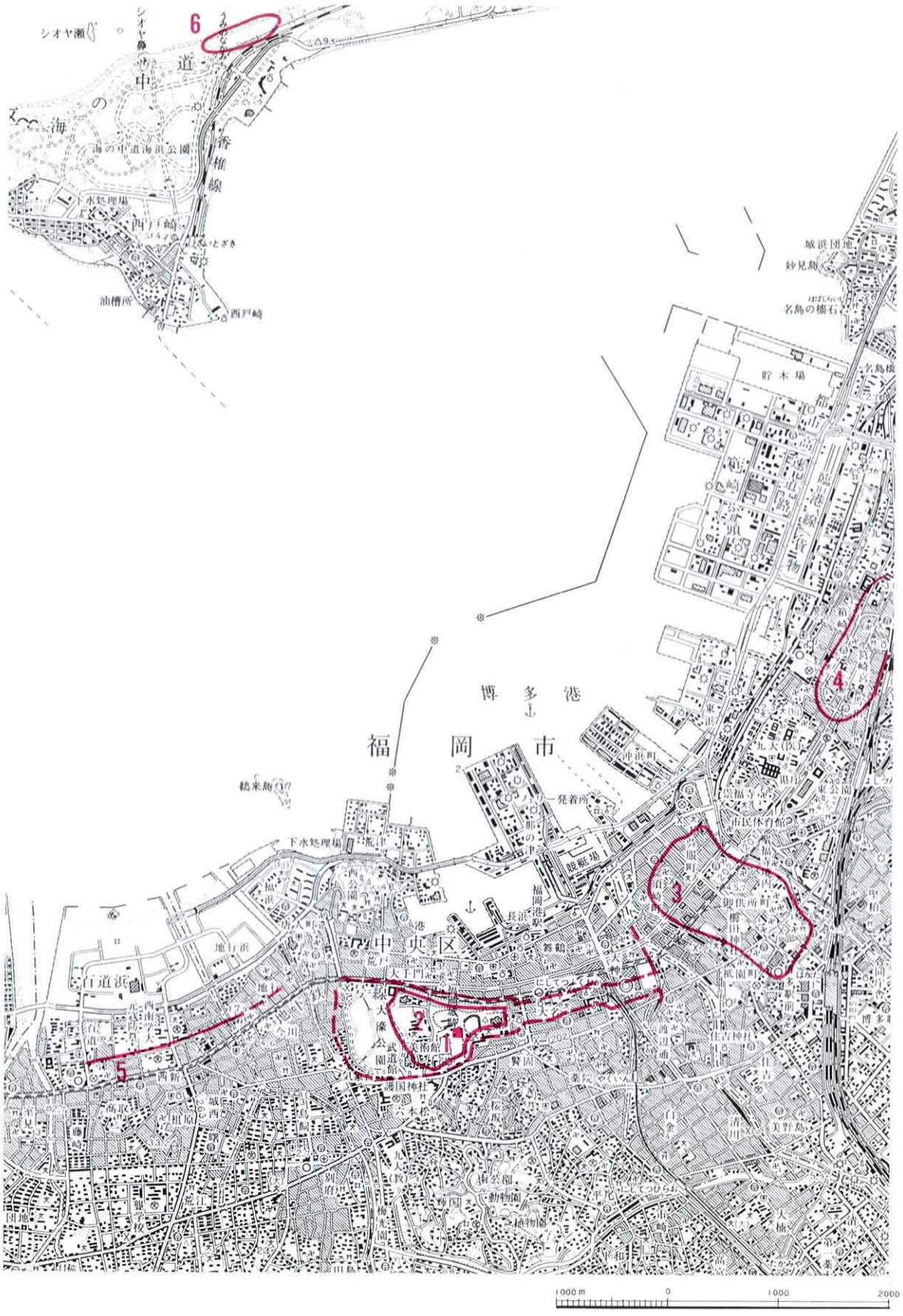


Fig. 1　鴻臚館跡と周辺遺跡分布図（1/50000）

1．鴻臚館跡
2．福岡城跡（国指定史跡）
3．博多遺跡群
4．箱崎遺跡
5．元寇防塁跡（国指定史跡）
6．海の中道遺跡

2．既往の調査

福岡城跡の調査は、史跡指定範囲の内外において、平成14年度までに48地点について調査が実施されている。そのうち鴻臚館跡発掘調査事業として実施されたのは20次22地点である。Tab. 2 にその内訳を示した。文献番号は次頁の参考文献一覧に対応する。なお、平成13年度の調査は福岡城跡関係第47次調査にあたり、鴻臚館跡関連調査では19次調査となる。

Tab. 2　福岡城跡・鴻臚館関係調査一覧（平成14年度現在）

調査番号	次数	地　区	史跡内外区分	調査原因	調査面積	調査期間	調査担当者	文　献	備　考
5102	A	三の丸中央部	史跡内	テニスコート建設		510800～３日間	九州文化総合研究所	1・7・11	鴻臚館１次
	B		史跡内			590626～590702	文部省・文化財保護委員会	1	
6301	1	三の丸東郭	史跡内	裁判所建設	596	631007～631105	福岡県教育委員会	2	鴻臚館２次
						640327～640331			
7605	2	内堀内壁	史跡外	地下鉄建設	14.900	761201～771008	折尾学・池崎譲二 浜石哲也・山崎龍雄	4	
7728	3	薬院新川	史跡外	地下鉄建設	500	780301～780630	折尾学・池崎譲二	4	
7948	4	御鷹屋敷跡	史跡内	史跡整備	2.200	790719～790811	飛高憲雄・力武卓治	3・8	
8134	5	赤坂門北側内堀	史跡外	ビル建設	70	820317～820326	田中壽夫	4	
8343	6	祈念櫓跡	史跡内	史跡整備	36	840201～840612	井沢洋一		
8449	7	肥前堀東端部	史跡外	県公園建設	580	840601～840612	福岡県教育委員会		
8533	8	肥前堀東部	史跡外	市庁舎建設	150	850700～850800	折尾学・山崎純男	9	
8747	9	三の丸中央部	史跡内	野球場改修	650	871225～880120	山崎純男・吉武学	11・14	鴻臚館３次
8829	10	三の丸中央部	史跡内	確認調査	856	880727～881210	山崎純男・吉武学	11・22	鴻臚館４次
8840	12	肥前堀東部	史跡外	ビル建設	650	881107～881126	柳沢一男	12	
8865	11	西～南縁土塁	史跡内	公園整備	500	880727～881210	山崎純男・吉武学	10	
8910	13	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1,200	890420～891207	山崎純男・吉武学	11・22	鴻臚館５次
8950	14	肥前堀東部	史跡外	市庁舎建設	700	891011～891021	菅波正人	13	
9005	15	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1.300	900409～910131	山崎純男・吉武学	11・22	鴻臚館６次
9065	16	月見櫓跡	史跡内	確認調査	190	910301～910331	山崎純男・吉武学	15	
9130	17	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1.000	910501～920331	山崎純男・瀧本正志	16・22	鴻臚館７次
9146	18	時櫓跡	史跡内	確認調査	250	920301～920331	瀧本正志		
9218	19	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1.670	920615～921030	山崎純男・瀧本正志	17	鴻臚館８次
9236	20	三の丸中央部	史跡内	確認調査	430	920910～930331	山崎純男・瀧本正志	17・22	鴻臚館９次
9262	21	花見櫓跡	史跡内	確認調査	200	930301～930331	瀧本正志		
9326	22	三の丸西部郭	史跡内	確認調査	450	930816～940228	田中壽夫・瀧本正志	19	鴻臚館10次
9345	23	追廻門南側堀	史跡外	公園整備	220.3	931213～940228	井沢洋一	18	
9353	24	本丸西縁部	史跡内	公園整備	80	931211～931221	田中壽夫・瀧本正志		
9363	25	潮見櫓跡石垣	史跡内	史跡整備	65	940301～940328	田中壽夫・瀧本正志		
9416	26	赤坂門石垣	史跡外	変電所建設	430	940525～940806	吉武学		
9420	27	三の丸中央部	史跡内	史跡整備	50	940606～940731	田中壽夫・瀧本正志	21	鴻臚館11次
9432	28	三の丸西部郭	史跡内	確認調査	850	940801～950320	田中壽夫・瀧本正志	21	鴻臚館11次
9451	29	三の丸東部郭	史跡内	施設建替	1024	941101～950130	力武卓治	25	
9463	30	三の丸南側土塁	史跡内	確認調査	60	950201～950217	田中壽夫・瀧本正志	21	鴻臚館11次
9537	31	三の丸中央部	史跡内	確認調査	300	951101～960329	田中壽夫	24	鴻臚館12次
9546	32	中堀	史跡外	共同住宅建設	154	951211～960329	瀧本正志	23	
9561	33	三の丸西北郭土塁	史跡内	公園整備	500	960301～960329	力武卓治		
9617	34	三の丸西南郭土塁	史跡内	駐車場整備	32	960621～960702	田中壽夫		
9620	35	三ノ丸中央郭	史跡内	確認調査	450	960704～961204	田中壽夫	24	鴻臚館13次
9630	36	肥前堀	史跡外	共同住宅建設	46	960823～960823	池田佑司		
9639	37	赤坂門外壁	史跡外	事務所建設	10	960912～960912	池田佑司		
9671	38	潮見櫓跡基壇	史跡内	史跡整備	300	970220～970318	田中壽夫		
9736	39	三ノ丸中央郭	史跡内	確認調査	204	970818～980131	田中壽夫	26	鴻臚館14次
9751	40	追廻門南側内堀内壁	史跡内	確認調査	135	971027～971107	田中壽夫		
9807	41	平和台球場解体	史跡内	公園整備	230	980410～980416	田中壽夫・池崎譲二	27	鴻臚館15次
9831	42	平和台球場跡地	史跡内	試掘調査	930	980922～990120	塩屋勝利・池崎譲二	27	鴻臚館16次
9910	43	平和台球場跡地	史跡内	確認調査	3,500	990422～000315	塩屋勝利・池崎譲二	28・29	鴻臚館17次
0008	44	平和台球場跡地	史跡内	確認調査	1,750	000425～010316	塩屋勝利・池崎譲二	29	鴻臚館18次
0060	45	警固中脇土塁	史跡内	公園整備	110	010105～010131	井澤洋一		
0064	46	肥前堀	史跡外	ビル建設	160	010302～010330	横山邦継		
0109	**47**	**平和台球場跡地**	**史跡内**	**確認調査**	**2,000**	**010521～020329**	**折尾　学・池崎譲二**	**30**	**鴻臚館19次**
0129	48	大手門	史跡内	確認調査	378	011002～020329	井澤洋一		
0218	49	平和台球場跡地	史跡内	確認調査	1,200	020513～030331	折尾　学・大庭康時		鴻臚館20次

凡例　・太字箇所は本報告掲載分
・確認調査：福岡城跡・鴻臚館跡の調査　　・史跡整備：教育委員会所管事業に伴う調査
・公園整備：都市整備局所管事業に伴う調査　・工事名のある調査：開発に伴う緊急調査

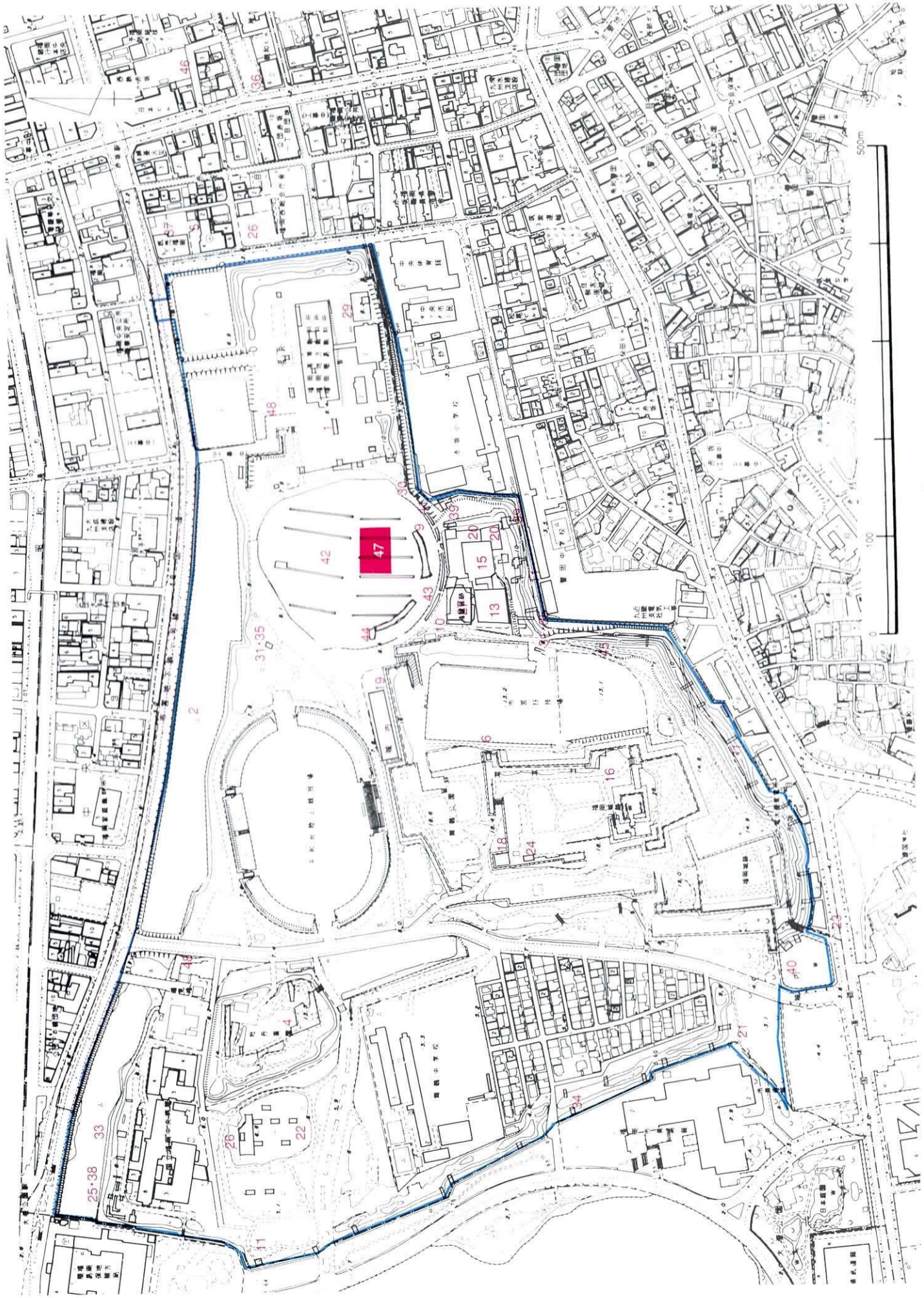


Fig. 2　福岡城内既往発掘調査区位置図（1/5000）

Tab. 3　福岡城跡・鴻臚館跡関係調査報告書一覧

1	福岡県教育委員会	「史跡福岡城発掘調査概報」	福岡県文化財調査報告書第34集	1964
2	高野孤鹿	『平和台の考古史料』	稿本	1972
3	福岡市教育委員会	「筑前国福岡城三ノ丸御鷹屋敷」	福岡市第 59集	1980
4	福岡市教育委員会	「福岡城址－内堀外壁石積の調査－」	福岡市第101集	1983
5	池崎譲二・森本朝子	「福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション」	福岡市第101集	1983
6	弓場知紀	「出光美術館の高野コレクション」	福岡市第101集	1983
7	田崎博之･矢野佳代子	「九州大学考古学研究室所蔵の平和台出土遺物」	福岡市第101集	1983
8	福岡市教育委員会	「筑前国福岡城三ノ丸御鷹屋敷図録編」	福岡市第 59集	1990
9	福岡市教育委員会	「福岡城肥前堀」	福岡市第131集	1986
10	福岡市教育委員会	「福岡城跡・Ⅳ―内堀内壁の調査―」	福岡市第237集	1991
11	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅰ　発掘調査概報」	福岡市第270集	1991
12	福岡市教育委員会	「福岡城肥前堀第３次調査報告」	福岡市第293集	1992
13	福岡市教育委員会	「福岡城肥前堀第４次調査報告」	福岡市第294集	1992
14	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅱ」	福岡市第315集	1992
15	福岡市教育委員会	「福岡城　月見櫓」	福岡市第316集	1992
16	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅲ」	福岡市第355集	1993
17	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡４　平成４年度発掘調査概要報告」	福岡市第372集	1994
18	福岡市教育委員会	「福岡城跡第23次調査報告」	福岡市第415集	1995
19	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡５　平成５年度発掘調査概報」	福岡市第416集	1995
20	福岡市教育委員会	「福岡城赤坂門跡－福岡城跡26次調査報告－」	福岡市第463集	1996
21	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡６　平成６年度発掘調査概要報告」	福岡市第486集	1996
22	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡７－鴻臚館跡第Ⅰ期整備報告－」	福岡市第487集	1996
23	福岡市教育委員会	「福岡城跡－福岡城中堀跡の調査－」	福岡市第498集	1997
24	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡８－平成７・８年度発掘調査概要報告－」	福岡市第545集	1997
25	福岡市教育委員会	「史跡福岡城跡－東の丸の調査－」	福岡市第546集	1997
26	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡９　平成９年度発掘調査概要報告」	福岡市第586集	1998
27	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡10　平成10年度発掘調査概要報告」	福岡市第620集	1999
28	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡11　平成11年度発掘調査報告」	福岡市第695集	2001
29	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡12　平成12年度発掘調査報告」	福岡市第733集	2002
30	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡13　平成13年度発掘調査報告」	福岡市第745集	2003

（福岡市第…集は、福岡市埋蔵文化財調査報告書第…集の略）

3．平成13年度の調査事業概要

（1）発掘調査の組織

1）調査および整備指導

鴻臚館跡調査研究指導委員会（第7期2年次）

委員長	九州大学名誉教授	横山　浩一	考古学
副委員長	学習院大学教授	笹山　晴生	国史学
委員	財団法人元興寺文化財研究所所長	坪井　清足	考古学
	奈良国立文化財研究所長	町田　　章	考古学
	福岡大学教授	小田富士雄	考古学
	九州大学教授	西谷　　正	考古学
	九州大学名誉教授	川添　昭二	国史学
	京都学園大学教授	八木　　充	国史学
	京都橘女子大学教授	狩野　　久	国史学
	東京大学教授	佐藤　　信	国史学
	元奈良国立文化財研究所長	鈴木　嘉吉	建築史学
	九州芸術工科大学名誉教授	澤村　　仁	建築史学
	神戸芸術工科大学教授	杉本　正美	造園学
	工学院大学教授	渡辺　定夫	都市工学
	京都大学名誉教授	中村　　一	造園学

2）発掘調査事業主体

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	生田征生
調査総括		文化財部長	柳田純孝
	（平成14年度調査	文化財部長	堺　　徹）
庶務担当		文化財整備課長	上村忠明
	（平成14年度調査	文化財整備課長	平原　豪）
		管理係長	市坪敏郎
		管理係	中岳　圭
調査担当		文化財部課長（鴻臚館跡調査担当）	折尾　学
		文化財部主査（鴻臚館跡調査担当）	池崎譲二
	（平成14年度調査	文化財部主査（鴻臚館跡調査担当）	大庭康時）

（2）調査事業の概要

1）鴻臚館跡調査研究指導委員会

鴻臚館跡調査研究指導委員会委員をはじめ、文化庁調査官、福岡県教育庁・福岡市関連部局担当者の出席のもとに、平成13年12月6日と7日に開催した。6日は発掘調査現場の視察を行い、平成13年度調査で新たに検出された、堀北側の第Ⅱ期布掘り東側柱穴列、これに取り付く東門、さらに堀北側で初めて確認された第Ⅲ期礎石建物などの遺構及び出土遺物の検討を行った。翌7日に会議を行った。主な議事は、平成12年度発掘調査と平成13年度調査の中間報告と調査内容の検討、今後の発掘調査の

進め方、及び14年度以降の長期調査計画の検討である。その結果、①第Ⅲ期礎石建物については、史料上に見える「鴻臚北館」の一部であるという公式見解を得た。②平成14年度は、第Ⅲ期建物の西側延長の確認を主たる目標に、12・13年度調査区間を対象とすること。③前年、史跡指定に向け平和台球場跡周辺の範囲確認調査を実施することとしたが、当面球場跡地内の調査を優先することに変更した。

会議終了後、委員長、狩野委員から、平成13年度の調査成果と検討内容の記者発表が行われた。

2）発掘調査

平和台野球場跡地の発掘調査は、南半を第Ⅳ期、北半を第Ⅴ期として実施する計画である。第Ⅰ期調査で確認していた筑紫館・鴻臚館建物の北側の広がりを探る目的である。これまでの調査結果では、第Ⅰ期調査で確認されていた筑紫館・鴻臚館建物の北側に東西方向にのびる堀が見つかり、さらに堀北側にも筑紫館・鴻臚館時代の建物の存在する事が明らかになった。これまでの第Ⅳ期調査の詳細についてはTab. 3 に示した調査報告書27～29で報告した。平成13年度調査では、堀を挟んだ南北の第Ⅱ期建物区画が同一規模、構造であることが明らかになり、第Ⅱ期以前の土地造成による石垣、第Ⅲ期礎石建物が新たに発見され、鴻臚館の全容解明に向けて大きな一歩となった。詳細は本編第２章で報告する。

3）公開事業

鴻臚館跡調査に対する市民の期待と関心が高いことから、調査区北側芝生広場から、発掘調査の状況を常時公開し、発掘調査の解説パネルを掲示した。また、現地説明会を平成13年12月９日に開催し、412名の見学者が訪れた。平成13年度調査のビデオ記録の撮影とともに、平成12年度調査の成果をＤＶＤに編集し、平成11年度調査記録、福岡市博物館作製のビデオ「鴻臚館跡の調査」、とともに鴻臚館跡展示館に設置しているビデオコーナーで公開した。

Fig. 3　鴻臚館跡調査研究指導委員会現地視察

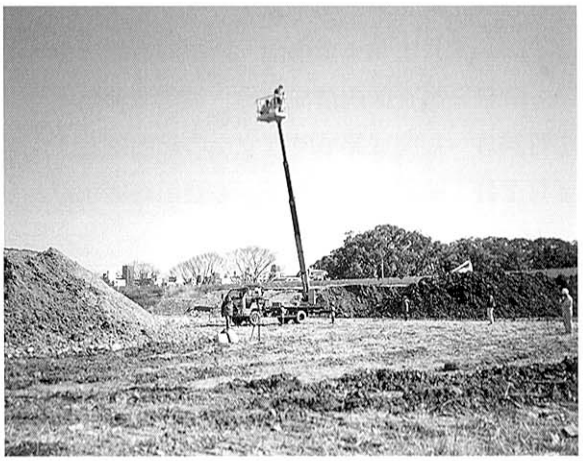


Fig. 4　高所作業車による写真撮影風景

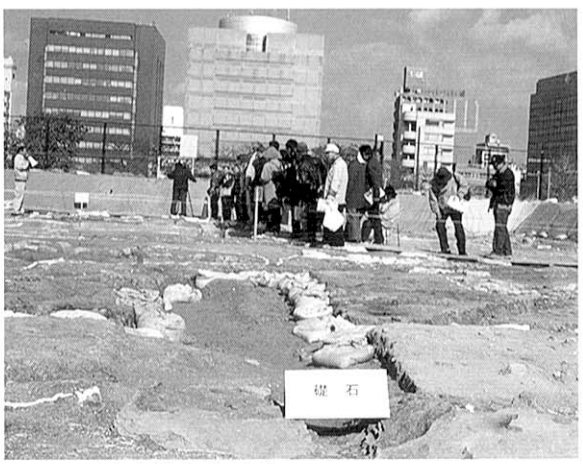


Fig. 5　現地説明会風景

第２章　平成13年度発掘調査報告

１．発掘調査の経過

平成13年度は平和台野球場跡地の南半部分（第Ⅳ期調査）の３年次にあたる。前年度確認された第Ⅱ期建物区画西南隅に対応する東南隅を確認し、建物区画の東西規模の把握を最重点目標とした。そのため、前年度調査区から約40ｍ隔てた東側に13年度調査区を設定した。約2,000㎡を対象とした。なお、鴻臚館関係遺物を含む外野スタンド盛り土を、調査区埋め戻しに使用したため、余剰になった球場解体時のグランド埋立土を外部に搬出する作業を先行して実施した。

主な調査の経過は次の通りである。

５月21日　調査準備開始
　28日　盛り土搬出開始（６月13日終了）
　31日　永井路子氏見学
６月18日　表土剥ぎ開始（７月５日まで）
　　７月上旬まで梅雨、断続的な雨で作業難航
　27日　調査区内清掃開始、福岡城通路面確認
７月24日　福岡城築城時埋立土の範囲確認
８月１日　紀宮清子内親王、鴻臚館跡展示館と発掘現場ご見学
８月24日　上面遺構の平板測量
９月３日　上面遺構掘り下げ開始
　20日　高所作業車にて全景写真撮影、平安時代礎石建物の存在を確認
　26日　1/20全体図作成開始
10月24日　ラジヘリによる空中撮影
　25日　広聴課の体験発掘、26人参加
11月16日　奈良時代布掘塀と東門の一部を確認
12月６日　指導委員会　現地視察
　７日　指導委員会　会議　記者発表
　９日　現地説明会　参加者412人
　11日　東門部分拡張
１月21日　整地層から鏃形金製品が出土
２月19日　奈良時代布掘塀南列確認
３月１日　石列が西側に屈折し、Ⅱ期以前の遺構であることを確認
　８日　下面遺構、ラジヘリ・高所作業車撮影
　11日　下面遺構の追加調査
　16日　調査の後かたづけ、調査完了

Fig. 6　表土剥ぎ状況

Fig. 7　紀宮様　鴻臚館発掘調査現場見学

Fig. 8　体験発掘風景

Tab. 4　平成13年度調査検出遺構一覧

遺構番号	種　類	時　期	遺構番号	種　類	時　期
SK1201	ゴミ処理土坑	連隊関係	SD1242	溝	中世
SK1202	ゴミ処理土坑	連隊関係	SE1243	井戸	中世
SD1203	側溝	福岡城	SD1244	溝	中世
SX1204	側溝北側石積み	福岡城	SX1245	石積み	奈良
SX1205	側溝南側石積み	福岡城	SK1246	土坑	平安
SD1206	通路中央部溝	福岡城	SK1247	土坑	平安
SM1207	福岡城埋立	福岡城	SK1248	土坑	中世
SM1208	中世自然堆積	中世	SK1249	土坑	中世
SM1209	奈良・平安時代埋立	奈良・平安	SK1250	土坑	中世
SD1210	埋設管堀方	連隊関係	SK1251	土坑	中世
SX1211	建物基礎	連隊関係	SK1252	土坑	中世
SK1212	ゴミ処理土坑	連隊関係	SD1253	排水土管堀方	平和台球場関係
SK1213	ゴミ処理土坑	連隊関係	SE1254	井戸	連隊関係
SK1214	ゴミ処理土坑	連隊関係	SK1255	土坑	平安
SK1215	ゴミ処理土坑	連隊関係	SK1256	土坑	近代
SD1216	雨落ち溝	平安	SK1257	土坑（整地か）	平安
SK1217	ゴミ処理土坑	連隊関係	SK1258	土坑（整地か）	平安
SD1218	排水土管堀方	平和台球場関係	SK1259	土坑（整地か）	平安
SD1219	側溝	福岡城	SK1260	土坑（整地か）	平安
SX1220	SM1208に同じ	中世	SK1261	池状土坑	中世
SX1221	建物基礎	連隊関係	SK1262	土坑（中世か）	平安
SD1222	溝	中世	SH1263	地床炉	中世か
SK1223	瓦組土坑	近代	SK1264	土坑	平安
SK1224	土坑	近代	SK1265	土坑（整地か）	平安
SK1225	ゴミ処理土坑	近代	SH1266	地床炉	中世か
SK1226	土坑	近代	SK1267	土坑（整地か）	平安
SA1227	掘立柱列（塀）	福岡城	SD1268	溝	中世か
SB1228	礎石建物	平安	SK1269	土坑（整地か）	平安
SU1229	コンクリート基礎	連隊関係	SK1270	土坑（整地か）	平安
SD1230	溝	中世	SK1271	土坑	平安
SK1231	土坑	平安	SD1272	溝	中世か
SK1232	土坑	連隊関係	SK1273	土坑	平安
SK1233	土坑	連隊関係	SK1274	土坑	平安
SD1234	溝	福岡城	SK1275	土坑	平安
SK1235	石組み水溜	中世	SK1276	土坑	平安
SD1236	溝	連隊関係	SK1277	土坑	平安
SA1237	布堀掘立柱列（塀）	奈良	SX1278	石積み	奈良
SB1238	布堀掘立柱建物(門)	奈良	SD1279	排水土管堀方	平和台球場関係
SD1239	溝	中世	SK1280	土坑	平安
SD1240	溝	中世	SK1281	礎石抜き穴	平安
SD1241	溝	中世			

２．平成13年度調査区の遺構と遺物

平成13年度の調査は、第Ⅳ期調査の３年次であった。初年次の平成11年度調査では、第Ⅰ期調査で確認されていた鴻臚館遺構の北側を区画する、東西に走る深さ3.5ｍ以上、幅20ｍにも及ぶ大きな堀の存在が明らかになり、さらに12年度調査では堀の北側に造成された平坦面があり、堀南側で確認されていた奈良時代建物区画と軸線を同じくする建物区画の存在が明らかになった。このことから、鴻臚館は堀を挟んで南北の建物群から構成されていることが明らかになった。平成13年度調査区は12年度検出区画に対応する東側を検出し、その規模を確認すること最重点目標に実施した。

国指定史跡福岡城の区域は、古墳時代から現代まで、数段階の土地利用の変遷をたどってきた。鴻臚館遺構の調査を行うには、それ以降の遺構も記録保存する必要がある。ここでは直接鴻臚館に関係のない遺構も含めて、平成13年度調査で確認された遺構について、５期に分けて報告する。

１）戦後構築物

昭和20年６月19日の福岡大空襲によって消失した旧陸軍歩兵24連隊跡地には、昭和23年10月福岡平和台総合運動場が建設され、第３回国体会場として利用された。この際のサッカー競技場跡は、昭和24年から25年にかけ大規模な工事を行い平和台野球場として生まれ変った。外野スタンドの盛り土に使用するため、グランド面が掘り下げられ、鴻臚館遺構は壊滅状態になったと考えられていたが、実際はグランド縁辺部分が掘り下げられ、中心部は削平を受けておらず戦災焦土層が良好に残っている。今回の調査区域はグランド中心部に近く、遺構の遺存状況は良好である。今回検出した戦後構築物はほとんどが平和台野球場に関係する排水土管、水道管で、調査区を縦横に走っている。撹乱とでもいうべきものであるが、大型の排水土管の掘方からは鴻臚館関連遺物も多く含まれており、遺物取り上げ上、SD1218、1253、1279の遺構番号を付した。掘方断面は土層観察に活用した。

２）旧陸軍歩兵24連隊関係遺構

明治維新後、福岡城跡はしばらくの間福岡県庁として使用された。明治19年には陸軍歩兵24連隊が正式に福岡城跡に設置され、昭和20年の終戦まで約60年間兵営として使用された。前述の通り福岡大空襲によって大半は焼失したが、野球場建設時に削平された部分を除き、戦災焦土層直下に建物基礎やゴミ処理土坑は比較的良好に残っていた。平成11・12年度調査では、外野スタンド盛り土直下に武器庫、被服庫、物干場の基礎が検出されている。

平成13年度調査では、球場建設時の削平を逃れた調査区東北部を中心に、連隊建物基礎（SX1211、SD1221、SX1229）、ゴミ処理土坑（SK1201、1202、1212、1213、1214、1215、1217、1232、1233）、埋設管掘方（SD1210）、建物側溝（SD1236）、ポンプ井戸（SE1254）などが検出されている。連隊建物は前年度までに検出された建物に比較して遺存状況は悪く、南北に長い建物基礎の掘方の一部が溝状に確認できるだけであり、建物形状は明確にしがたい。Fig.11の昭和５年の地図や、Fig.12の24連隊の建物配置模型（陸上自衛隊春日原基地資料館所蔵）によると、建物数に違いがあり、建物が増築されているが、今回検出した建物はその位置関係から、矢印の２棟、もしくは３棟に当たる部分であろう。医務所、被服倉庫、火工場等にあたる。ゴミ処理土坑からは焼いた炭や灰の中から、24連隊の什器を示す「二四」の文字のある丼（Fig.15－1）、薬瓶、注射針、鉋・鑿・金槌などの大工用具、蹄鉄、銃弾、薬莢などが出土している。白磁（Fig.15－2）なども混在する。

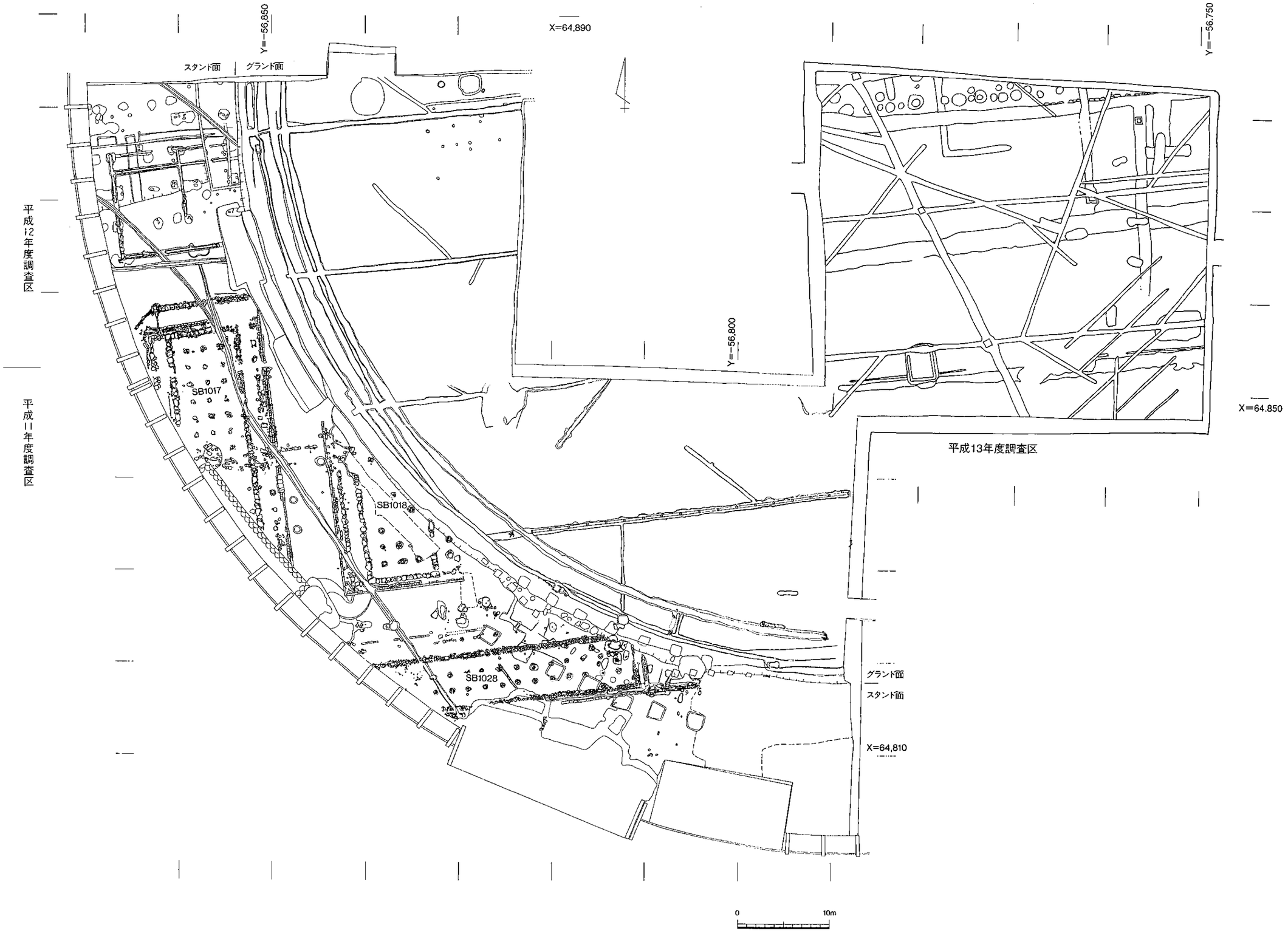


Fig. 9　第Ⅳ期調査区　平成11～13年度調査区　近現代遺構平面図（1／400）

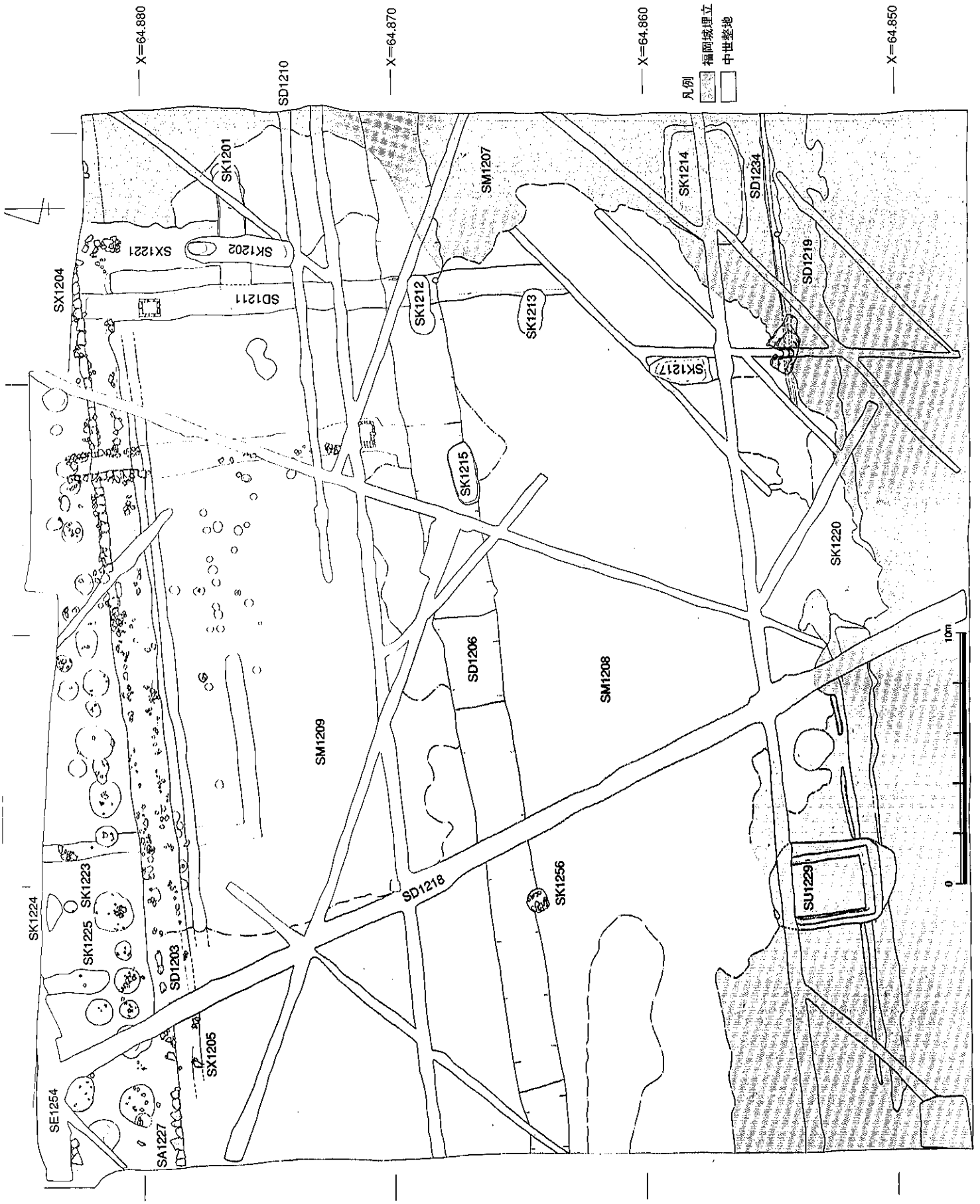


Fig. 10　平成13年度調査区上部検出遺構（1/200）

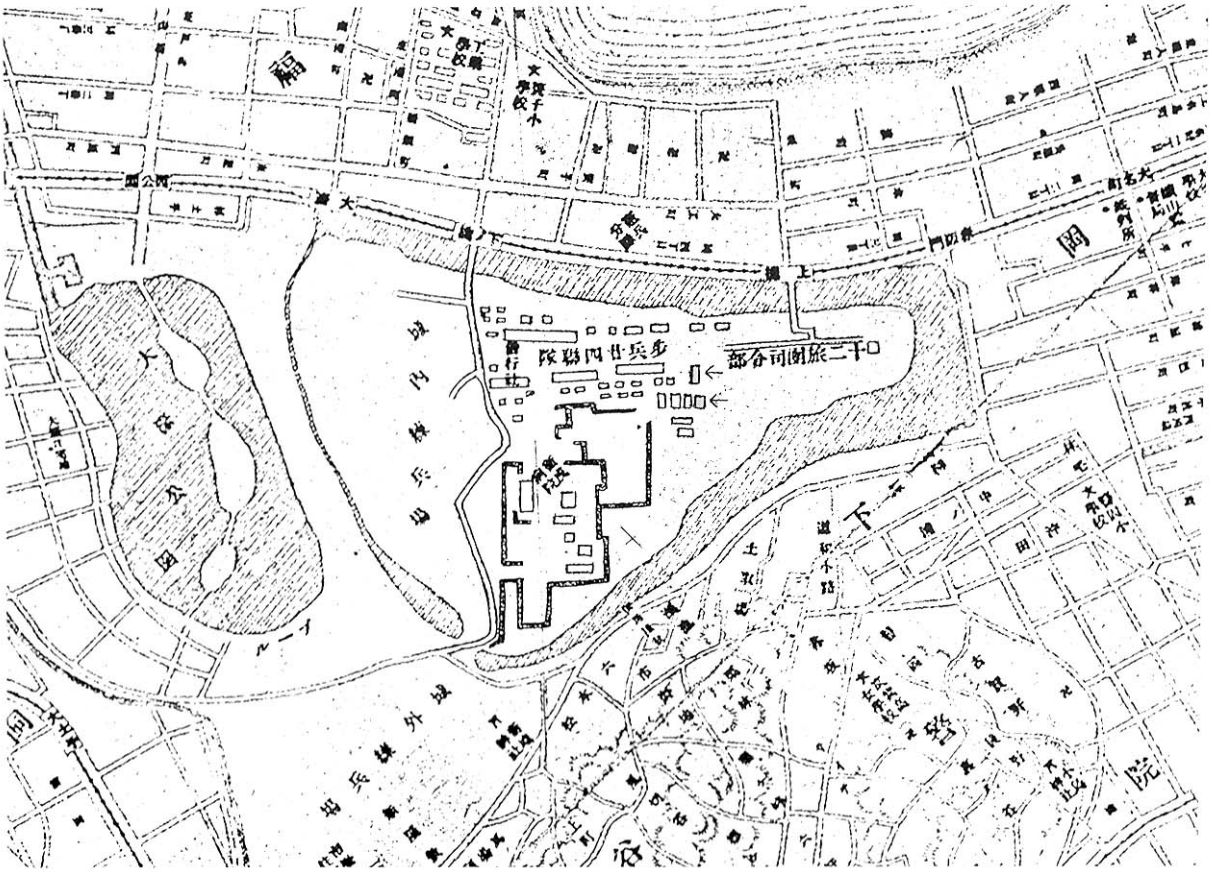


Fig. 11　昭和５年 24連隊建物配置図

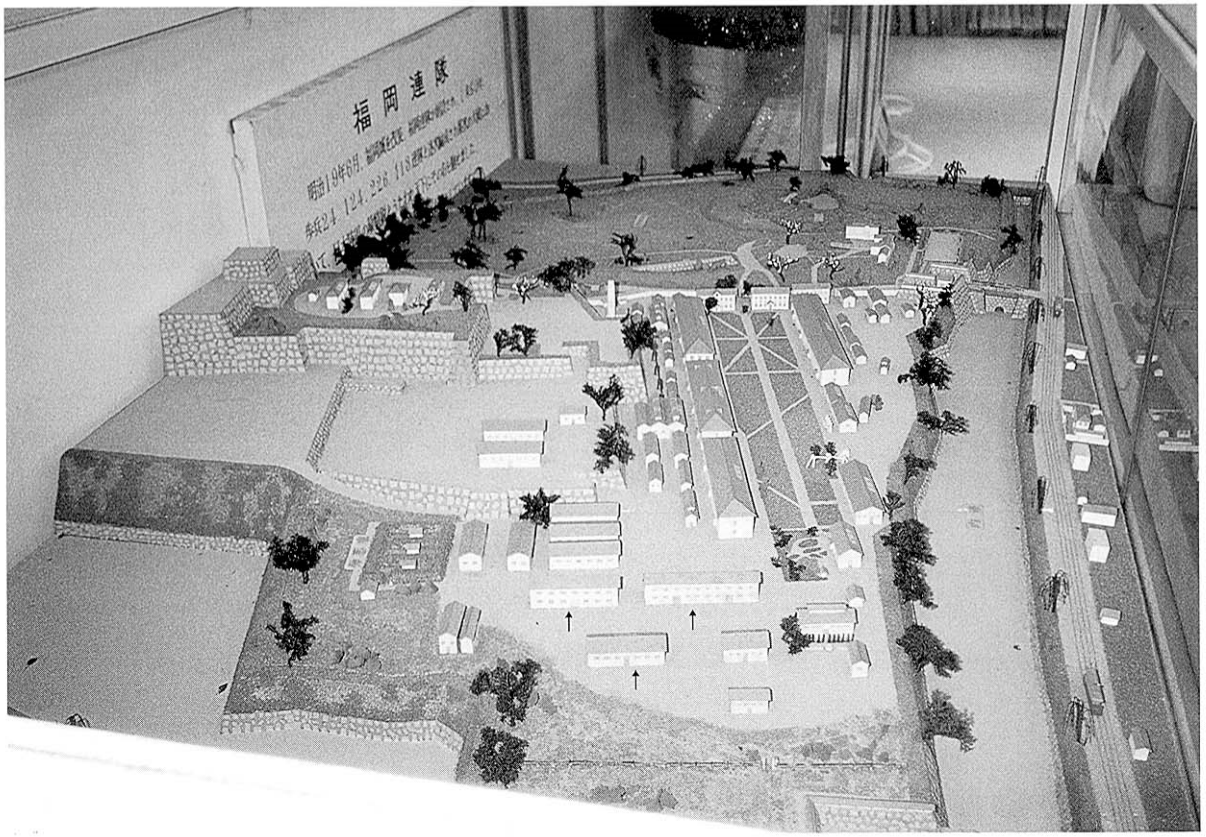


Fig. 12　24連隊建物配置模型（陸上自衛隊春日原基地資料館所蔵）

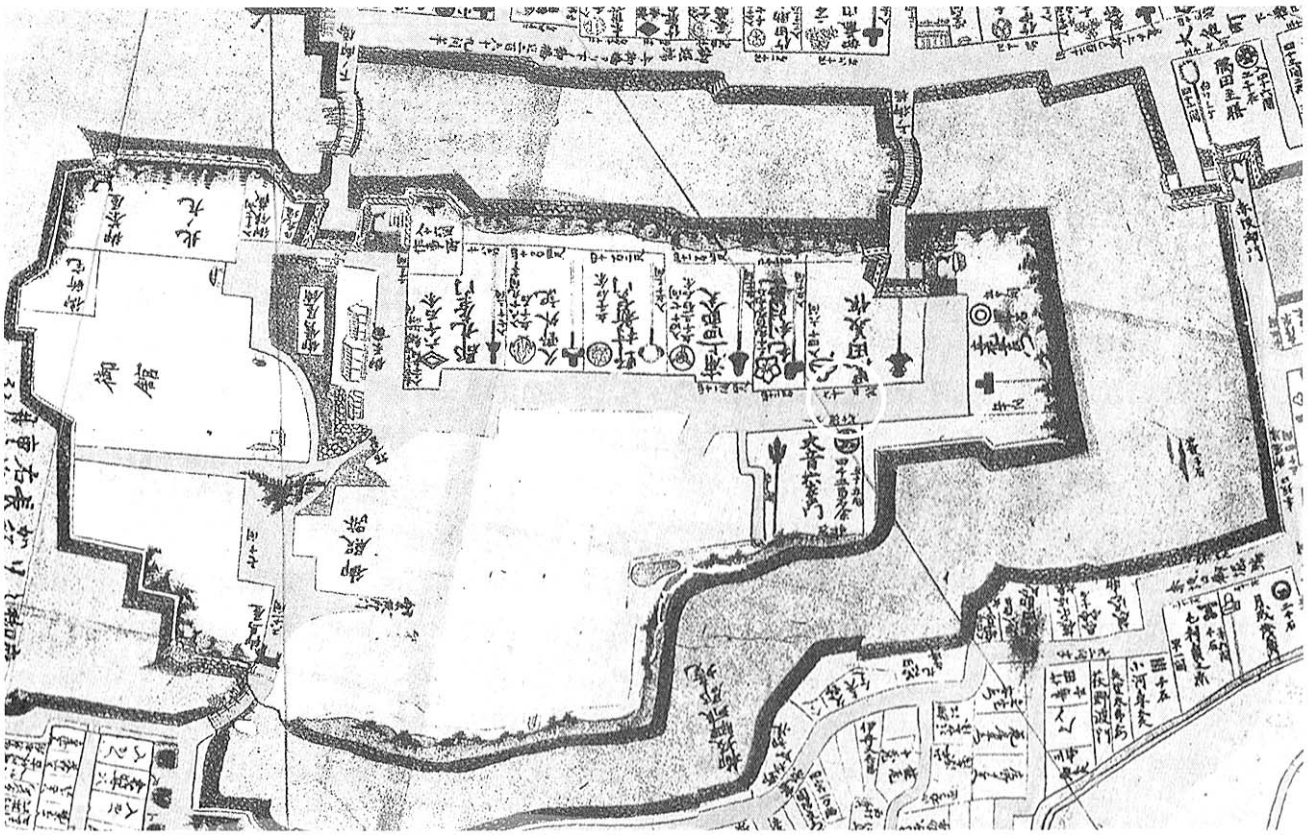


Fig. 13　平成13年度調査区と福岡城の位置関係　福岡城下町、博多近隣図　部分（文化９年写）

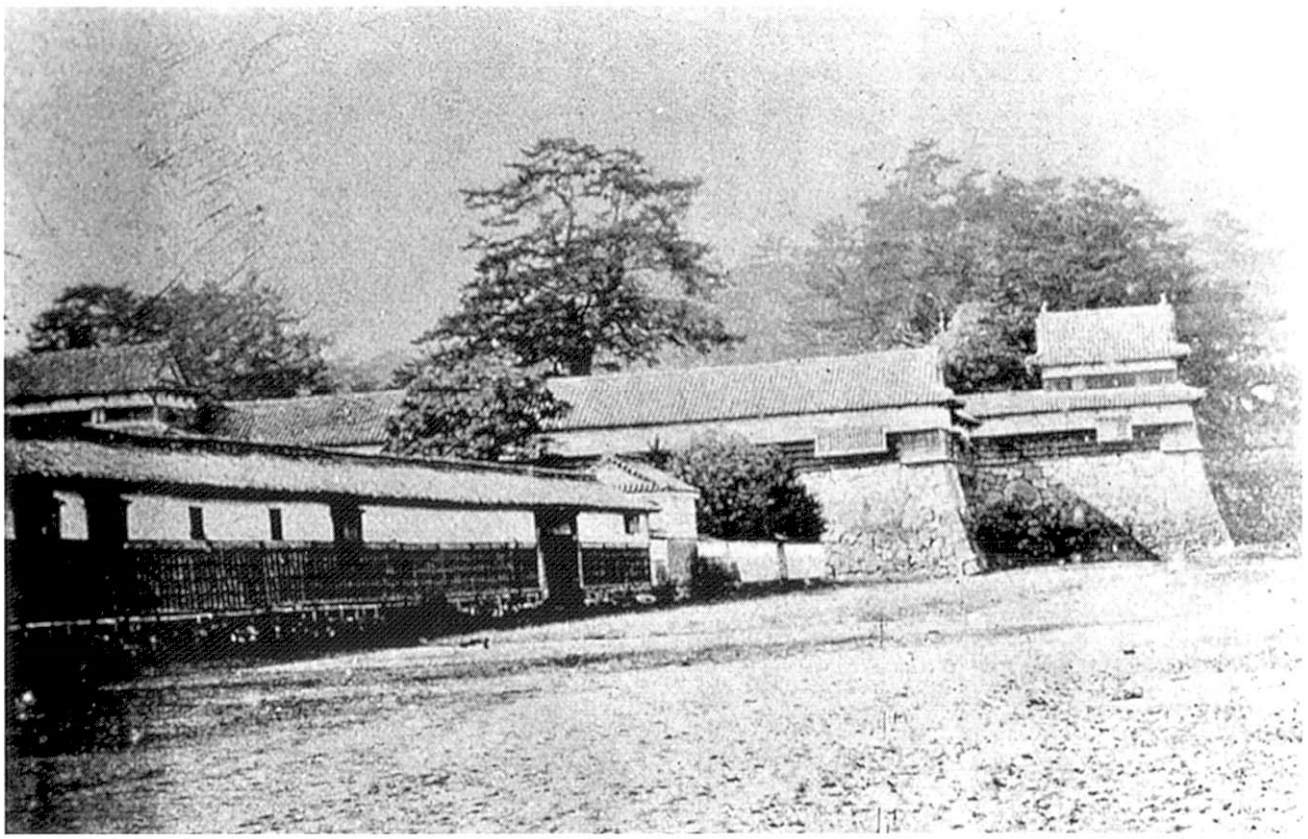


Fig. 14　大音屋敷（左）と城内通路（明治初年、東から）

３）福岡城関係遺構

福岡城は国指定史跡であり、遺構検出の場合には慎重な取り扱いが求められる。平成13年度調査区は、城内を東西に横断する道路一部に該当する（Fig.13－1)。今回の調査区南側では、福岡城築城時の埋立整地遺構（SM1207）が検出され、また、連隊遺構の下面に砂敷き硬化面があり、これが福岡城内の道路面として確認されるが、南側では球場建設による削平で道路硬化面は確認できなかった。しかし、この道路に付設された排水溝（SD1203、1206、1219)とそれにともなう石積み（SX1204、1205）が検出され、北側にあった大身屋敷の内には塀状の掘立柱列（SA1227）がみられた。遺構は、削平によって、建物基礎等は検出されていない。それに面する北側大身屋敷地のわずかに、屋敷内の井戸（SE1102）１基と整地遺構(SX1119、SM1131)がみられるだけである。

福岡城築城時遺構

平成11年度の調査で、鴻臚館を南北に区分する堀の存在が明らかになり、その名残である中世の池を、福岡城築城時に埋立整地した面が検出された。今回に調査でも調査区南側で、その東側の延長が検出（SM1207）され、東側では北側に大きく湾入することが新たにわかった。この埋立ラインは鴻臚館時代の地形に影響されているものであり、鴻臚館の東の輪郭を知る手がかりとなる。

城内通路関係遺構

SD1203は城内通路の北端を区切る側溝である。Ｎ－83.5°－Eの軸を取る。幅約１ｍで、本来両側を数段の石積み（SX1204、SX1205）で養生していたものである。SX1204の東半分に１段分が残るが、他は石が抜き取られ、根石の小礫と基礎掘方が見られるのみである。SD1219はSD1203に対応する通路南側側溝の痕跡であるが、すでに削平され石積みは見られない。浅い掘方に黄味の強い礫混じり土がしかれており、土層境界には水の流れた痕跡を示す酸化鉄が凝結している。この北側には、側溝石

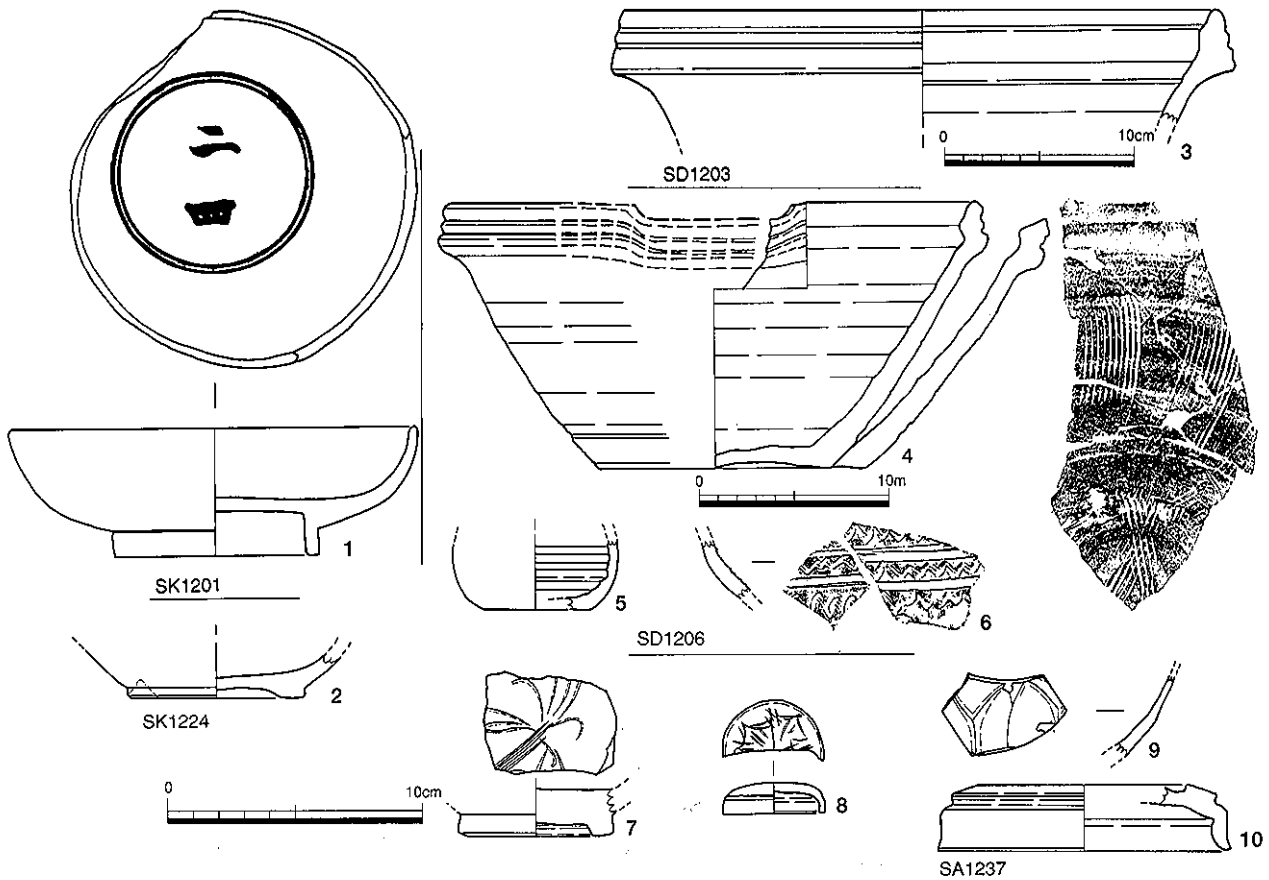


Fig. 15　24連隊、福岡城関係遺構出土遺物（1/3、3・4は1/4）

垣の基礎掘方である平行する幅10～15cmの浅い溝がある。文化９（1812）年写の福岡城下町、博多近隣図（Fig.13）によれば、SD1219の南側は家老大音六左衛門屋敷地（Fig.14）となる。SD1203とSD1219との距離は、芯々で28ｍを測るが、この中央には石垣を持たない素掘の溝SD1206が並行して走る。幅4.5ｍ、深さ現状で約35cmの、浅い断面逆カマボコ形を呈す。底面は硬化し、水流による砂の堆積がある。この溝は当初、通路を南北に分け、排水溝としての機能を十分に果たしていたが、ある段階に黄色の風化岩・粘土を一気に埋められ、一面の幅の広い通路に改修されている。

家老屋敷関係遺構

城内通路の北側も黒田藩の家老屋敷となっており、前述の文化９（1812）年写の福岡城下町、博多近隣図（Fig.13）によれば、調査区北側はほぼ黒田美作の屋敷跡で、道路側溝SD1203の北側で検出された柱穴群SA1227がこれに当たる。柱穴は基盤風化頁岩に掘り込まれ、石垣に接する柱列は直線に並ぶ。屋敷の塀であろう。柱穴には切り合いがあり、何回かの立て替えが合ったことを示す。

Fig.15に示した遺物は、３が肥前系陶器すり鉢、４が備前焼陶器すり鉢、５が中国製の薄胎褐釉陶器茶入れ、６が新羅焼き壺の頸部破片である。７～10は家老屋敷内整地層で出土したもので、７が龍泉窯青磁碗、８が越州窯青磁合子の蓋、９が外面に上下二段の鎬蓮弁を作り出す白磁碗、10が褐釉陶器破片で円面硯とおもわれる。

４）中世遺構

鴻臚館が11世紀半ばに廃絶した後、しばらくの間積極的な跡地利用は見られないが、14・15世紀を通じて小規模な寺院の存在したことが、これまでの調査から推定されている。鴻臚館の堀跡は自然堆積により徐々に埋没し、中世の段階では池状の水溜まりとなっている。中世のある段階で、鴻臚館跡地の整地が行われ、この池には多量の鴻臚館関係の瓦が投棄されている。整地面には多くの溝が縦横に掘り込まれ、これらからの水は最終的に南側の池に流入している。

SM1208　中世整地で、鴻臚館関係遺物に、中世の遺物が混在する。Fig.16に示した遺物は、１が瓦器湯釜、２が龍泉窯系青磁合子蓋、３が交趾三彩壺、４が龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗、５が内底に櫛描き文を持つ白磁碗、６・７がⅣ類白磁碗、８が口禿白磁皿、９・10が中国製陶器である。

SD1222　北から南下し、東側にL字形に屈曲する浅い溝である。東側でSK1235に合流し、南側の池状水溜まりに流下する。建物周辺をめぐる雨落ち溝と思われる。Fig.16に示した遺物は、11が土師質土鍋、12が土師器小皿、13が口縁部直下に印文を持つ土師質火舎、14が朝鮮の刷毛目粉青沙器碗、15がⅣ類の白磁碗である。

SD1230　調査区北東隅で検出された。北から南に流下しSK1235に流れ込む。

SK1235　周辺の溝SD1222、1230からの水を集める水溜遺構で一部に石積みが残るが、遺存状況は不良である。南側池に直接、またSD1240を経由して水が流れ込む。

SD1239　鴻臚館第Ⅲ期の整地層を切って、西から東へ流れ込み、SD1240と合流する。埋め土の最上面には鴻臚館関係瓦の細片が密にある。これに混じって中世の遺物が散見される。Fig.16に示した遺物は、16が瓦質陶器湯釜の耳、17が粗製の越州窯青磁碗、18が朝鮮の刷毛目粉青沙器碗で見込みに目跡が残る。この他明染付なども見られる。

SD1240　鴻臚館第Ⅲ期建物SB1228を斜断する形で南西に流れ、南側池に流れ込む。このため礎石抜き跡NP.01、SP.1が消滅し、NP.0の一部が壊されている。この埋土からは珍貴な遺物が出土している。Fig.16－19は交胎陶枕の破片で、釉薬がほとんど剥落しているものの、表面に一部に黄褐釉が辛うじて遺存している。断面は二層になっており、切り取った交胎部分を厚めの単層の胎部に貼り付け

たものである。20は周防産の緑釉陶器碗である。

SD1241　SD1222に取り付き、南に流下する溝である。

SD1242　調査区西南部で検出された溝で、SD1268、SD1244と一連のものであろう。鴻臚館第Ⅲ期の整地層を切って、第Ⅲ期建物SB1228の礎石抜き穴NP.６、SP.９を消滅させている。

SE1243　調査区南西隅で検出した。径70cm程の円形の深い穴で井戸と思われるが、井側等の構造物は未確認である。

SK1248、SK1249、SK1250、SK1251、SK1252　中世末の地形変換線の縁辺部に見られる径50cmほどの円形の土坑である。いづれも福岡城築城時の埋立土である風化頁岩礫が充填されており、福岡城築城直前の遺構であるが、性格は不明である。

SK1261（Fig.17）　周辺溝から水が流れ込む南北４ｍ程の池状水溜まりである。最下層に多量の土師器皿が廃棄されているが、上面は頁岩風化粘土による一括埋立で、福岡城築城時に整地されたものであろう。Fig.18に出土遺物を示している。１～23は土師器皿・坏で、24・25は口禿白磁皿、26はⅥ類白磁碗である。これらは池の年代を示しているが、27・28の土師器碗・高坏などの古代遺物や、29の須恵器甕などの古墳時代遺物も混在する。29は周辺に古墳が存在したことを示すものである。

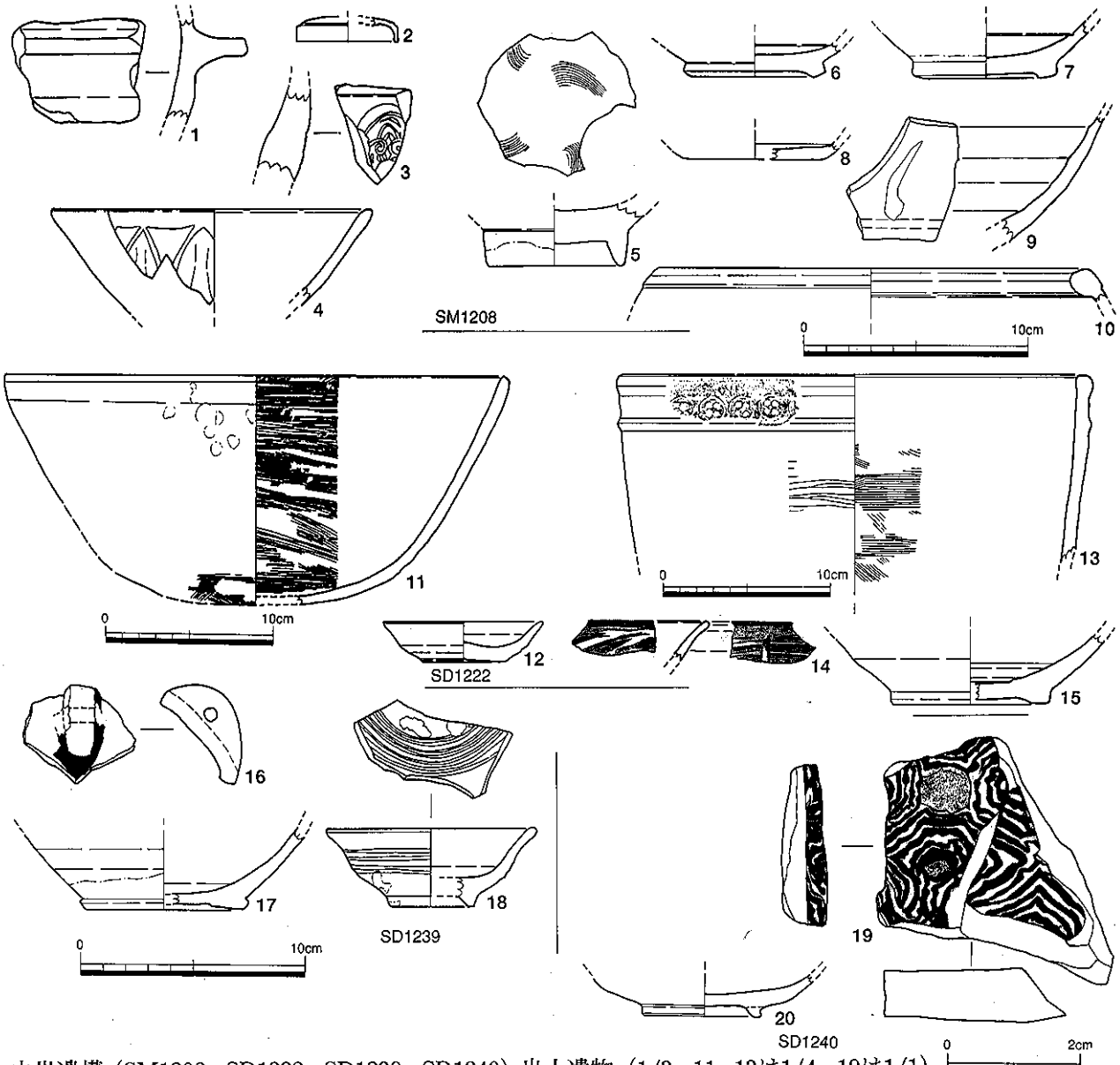


Fig. 16　中世遺構（SM1208、SD1222、SD1239、SD1240）出土遺物（1/3、11・13は1/4、19は1/1）

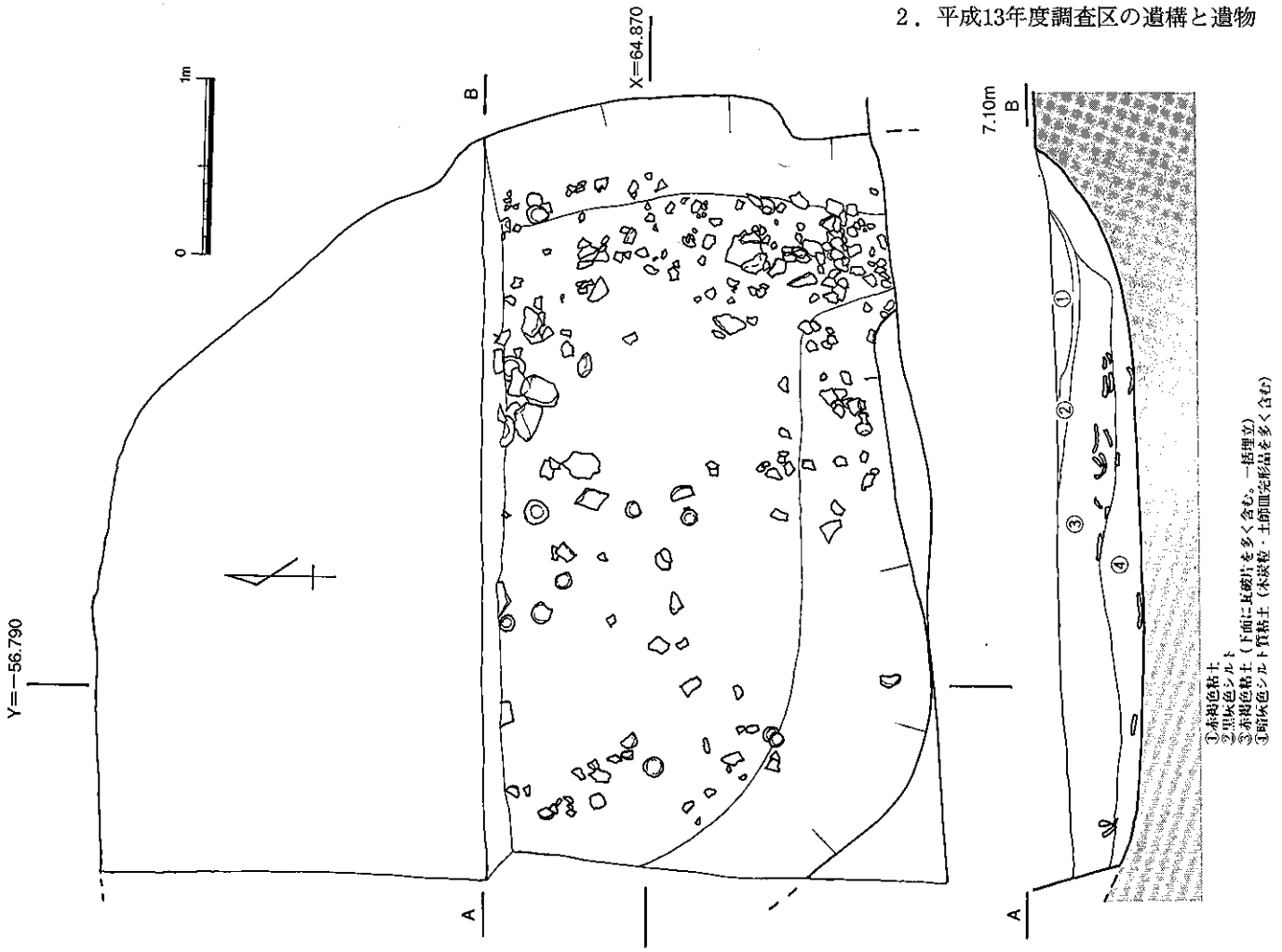


Fig. 17　SK1261実測図（1/40）

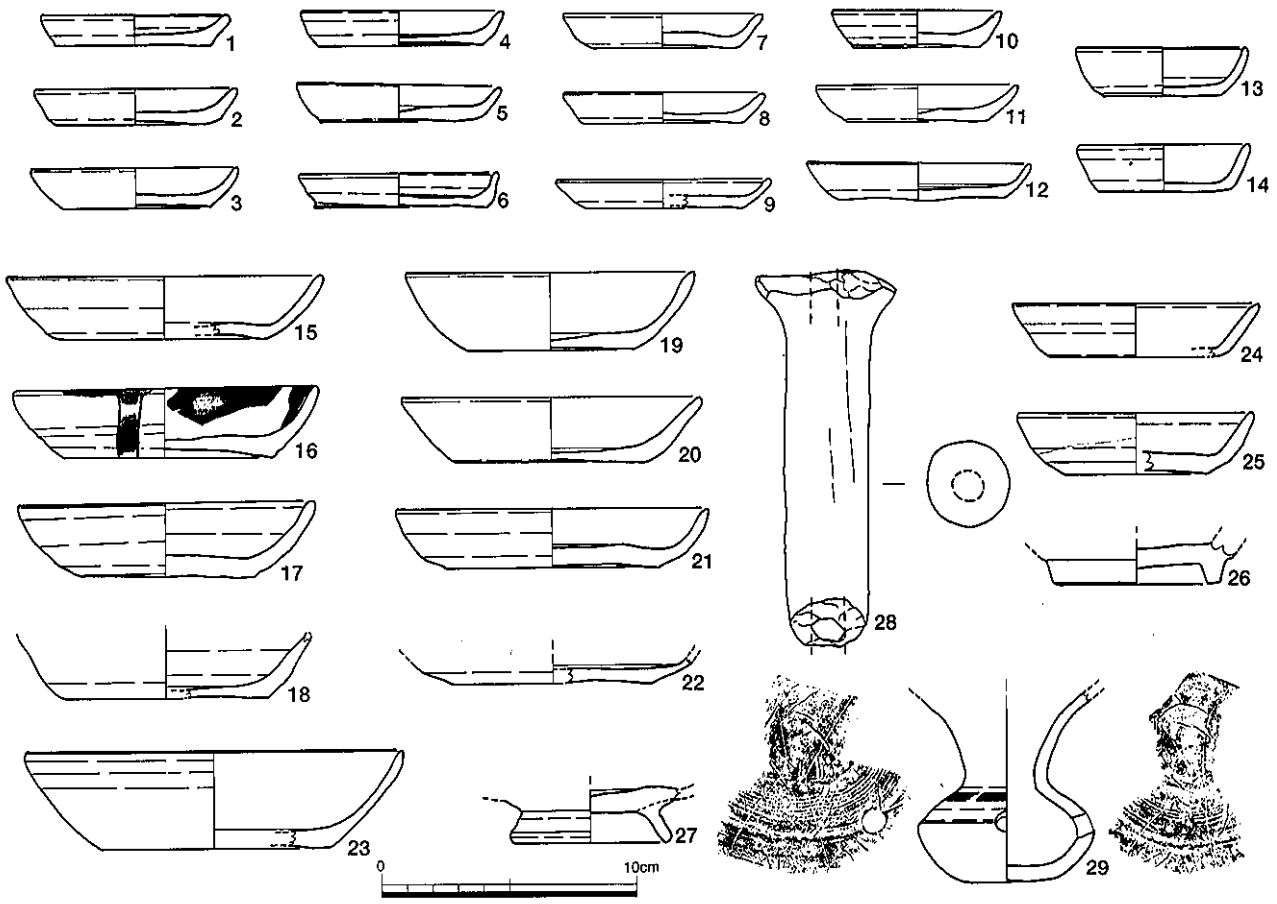


Fig. 18　SK1261出土遺物（1/3）

５）鴻臚館・筑紫館関係遺構

平成13年度の調査は、平成12年度の調査で確認された第Ⅱ期布掘掘立柱列による塀区画に対応する、東側塀を確認し、その規模の把握を最大目標として実施した。概ね遺存状態は良好で、当初の目的を達成できたが、堀北側で初めて第Ⅲ期礎石建物を検出し、さらに第Ⅱ期以前の石垣遺構を検出するなど予想以上の成果を得た。以下時期別に検出遺構について述べる。

第Ⅱ期以前の遺構

鴻臚館・筑紫館関係遺構についてはⅠ～Ⅴ期に区分されているが、第Ⅰ期についてはさらに細分される可能性が高く、ここでは第Ⅱ期以前とする。

これまでの調査で、古墳副葬品と考えられる遺物が出土している事から、古墳の存在したことがうかがえるが、現在までのところ福岡城天守台跡で石棺が確認されているだけで、具体的な古墳の痕跡は明確になっていない。今後の調査で確認される可能性は高い。

ＳＭ１２０９

野球場跡地内での調査で特筆すべき事の一つは大規模な造成工事が行われていたことである。平成12年度の調査でも堀北側の埋立造成が確認された。風化頁岩からなる基盤岩盤を削り、その残土を自然地形の谷の一部を埋め立て造成し平坦面を造ったものである。SM1209はこの埋立造成事業である。後述するが、埋立は一時に実施されたものでなく数次にわたって実施され、その都度敷地面が南側に拡幅されたことを物語っている。

ＳＸ１２４５（Fig.23、Pl.９－１～３、10－１～３）

谷の埋立造成にともなう土留めの石垣である。当初１～２段の上面石列が南北列約８ｍほど確認されていた。第Ⅱ期布掘掘立柱塀(SA1237)の東に約4.5ｍの間隔を持って平行に並び、また石列と布掘間にのみ瓦破片が見られたことから、第Ⅱ期塀にともなう基壇状の地覆石かとおもわれた。しかし、調査終盤になって石列の延長の確認を行った結果、南側に２ｍ程伸び、さらに西側に直角に近い角度で折れ曲がり、SA1237によって切られていることがわかった。このことから第Ⅱ期以前の遺構であることは明らかである。屈折部では少なくとも高さ1.3ｍ、６段の石積みがあり、谷斜面の傾斜に従って深くなっている。北側岩盤露出部では見られない。南側石垣の傾斜角度は約67°を計る。使用されている石材は、礫岩・玄武岩・花崗岩礫を中心とし、大きさは不揃いで加工を施した様子は見られない。博多湾沿岸部で採集した石材を使用したものであろう。石積みには裏ごめ石はなく、埋立土前面に直接貼り付けるような形で積み上げている。前面の石面の目地が縦に通り、背面に控えがとられておらず、隅部分も丸みを持ち、算木積みの形を取っていない。また、一部横長の礫を複数の石材に渡してはいるものの、だいたいにおいて上面の重量を分散させるという石垣通例の積み方が見られないため、不安定な印象を受ける。さらに西側延長の確認のため、SK1274の底面下を掘り下げ（Fig.23、Pl.10－１・２）、また排水土管堀方SD1218の土層断面（Fig.22、Pl.10－３）中に石垣を確認した。この結果石垣はさらに西に延長しているものと想定される。この石垣については、平成14年度も継続調査することにしており、詳細については次回報告する。

ＳＸ１２７８（Fig.24、Pl.10－４・５）

第Ⅱ期布掘掘立柱塀(SA1237)南列の、北に接して東西にのびる石積み列である。８ｍほどが検出できた。西側は途中で収束する。東側の延長は未確認である。東側では２～３段の石垣状の積み石が観察できるが、西側では礫が散在した状態となる。使用されている石材は、SX1245と同様に礫岩・玄

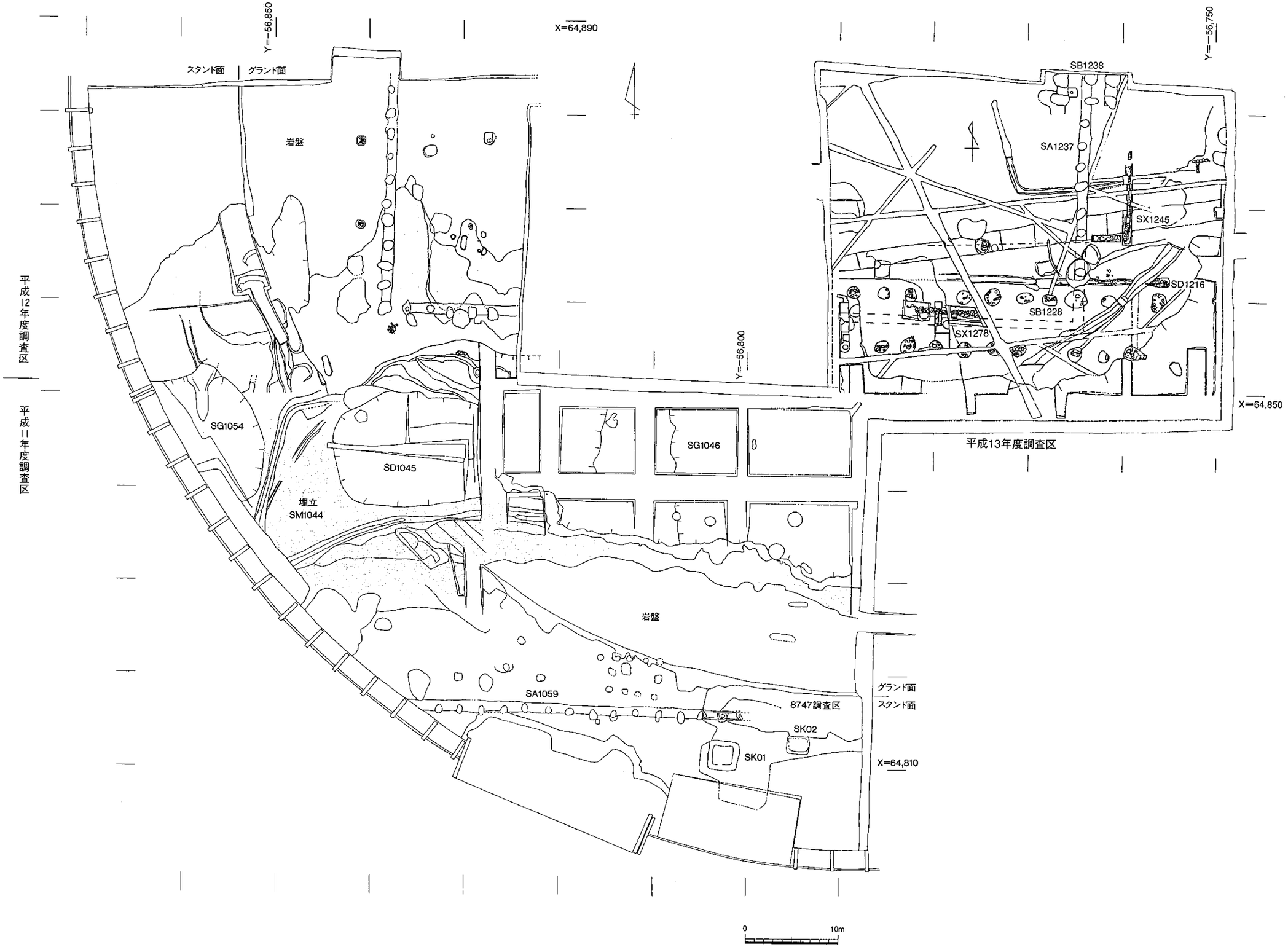


Fig.19　第Ⅳ期調査区　平成11～13年度調査区　古代・中世遺構平面図（1／400）

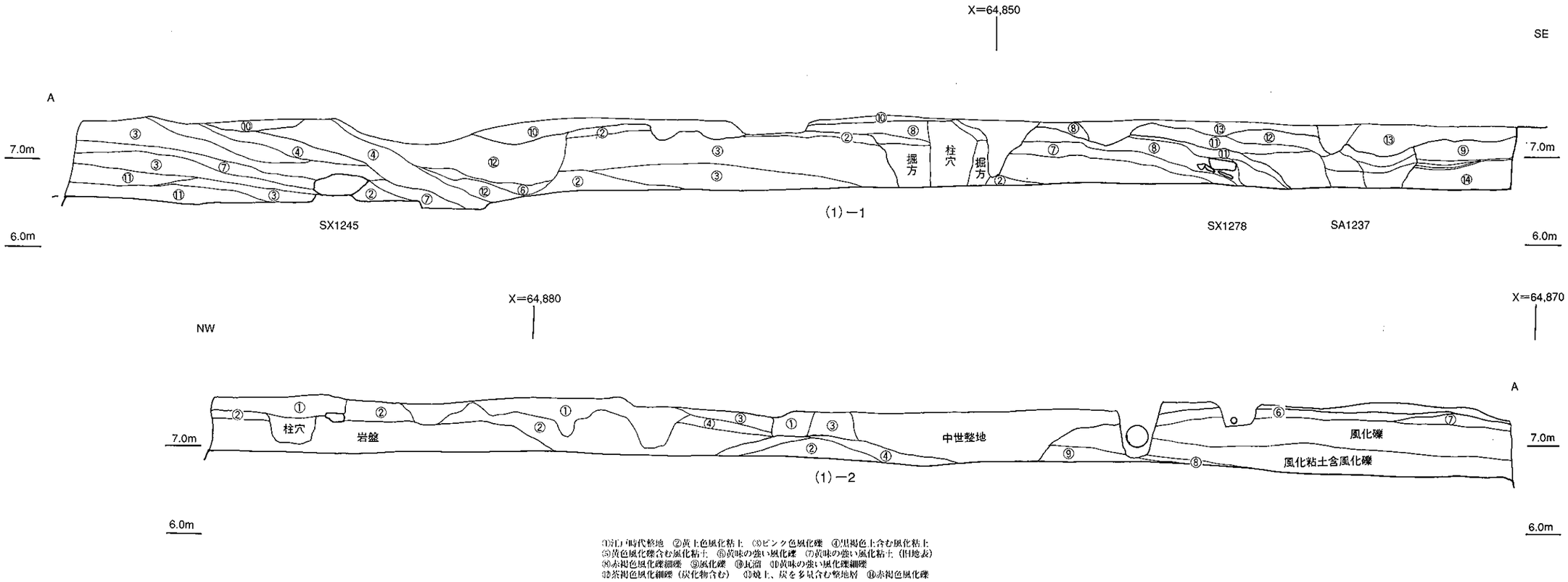


Fig.20　土層図集成（1/50）（1）SD１２１８土層断面　（2）SD1279土層断面（部分）
（3）調査区西端土層確認トレンチ土層断面

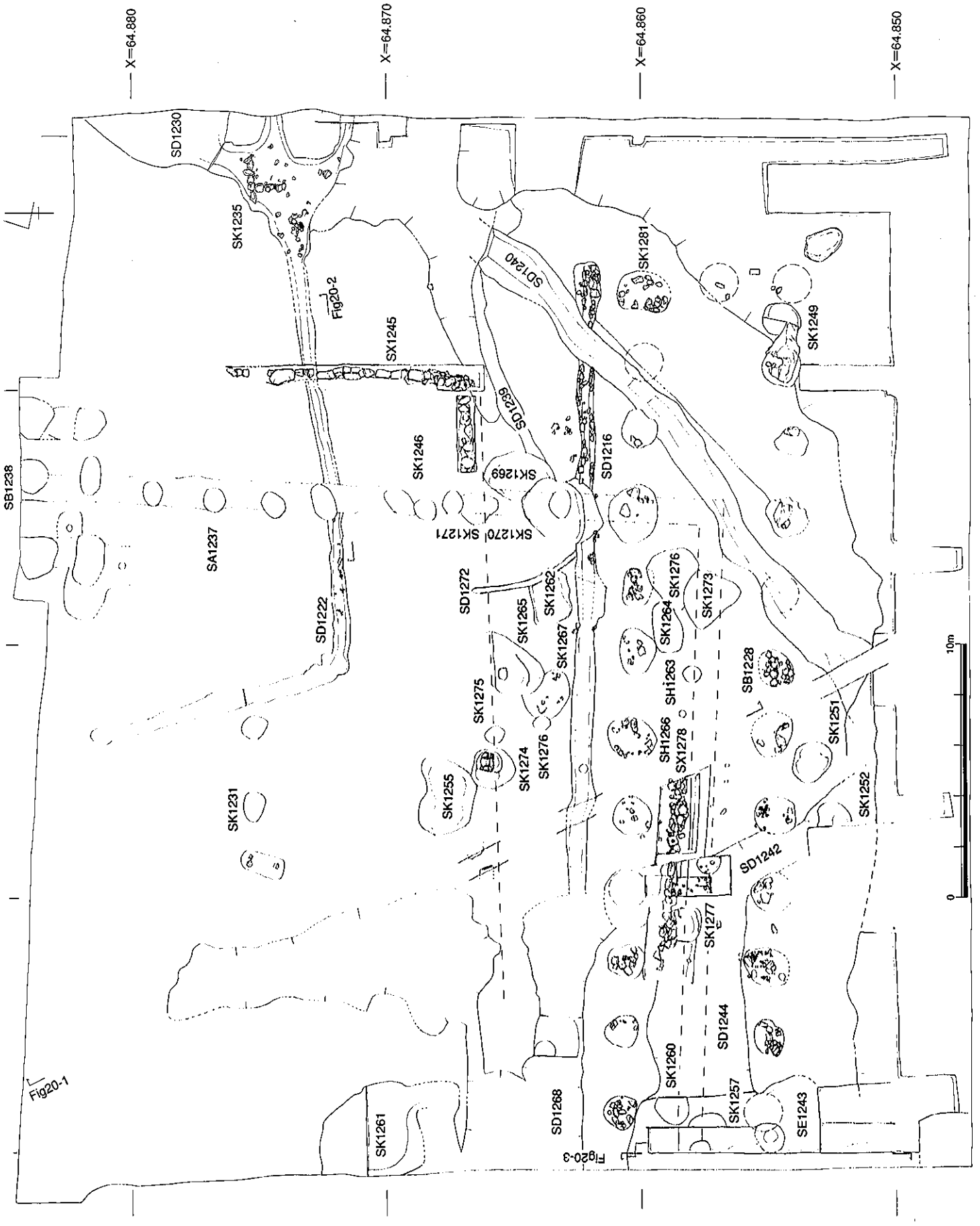


Fig. 21　平成13年度調査区下部検出遺構（1/200）

武岩・花崗岩礫を中心とし、加工はみられない。Fig.20－１、24の土層観察によると、この石積み列は、SX1245築造後に拡幅された造成土傾斜面上に設置されており、さらに南側の埋め立て土を第Ⅱ期布掘掘立柱塀(SA1237)が掘り込まれていることから、SX1245の石垣より新しく、SA1237布掘より古い。拡幅造成のある段階での土留め、あるいは区画を示すものであろう。

その他の遺構（Fig.22、Pl.11－２）

第Ⅱ期門遺構（SB1238)周辺で岩盤に掘り込まれた柱穴、土坑が確認できた。SB1238掘方に切られていることから第Ⅱ期以前の遺構であることは明らかである。平面プランのみ確認しており、詳細は将来の門遺構全体の調査に委ねることとした。

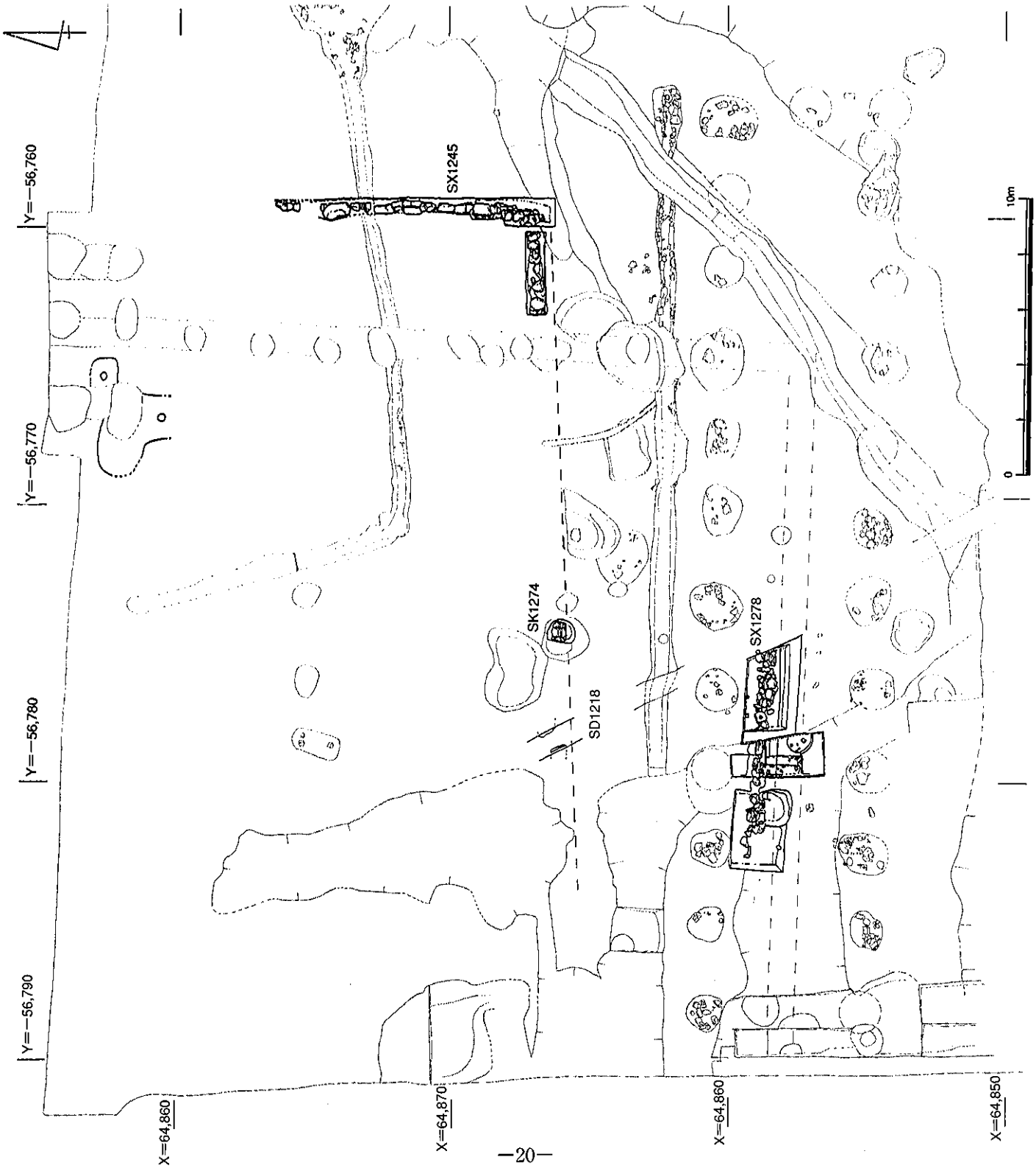


Fig. 22　第Ⅱ期以前の遺構平面図（1/200）

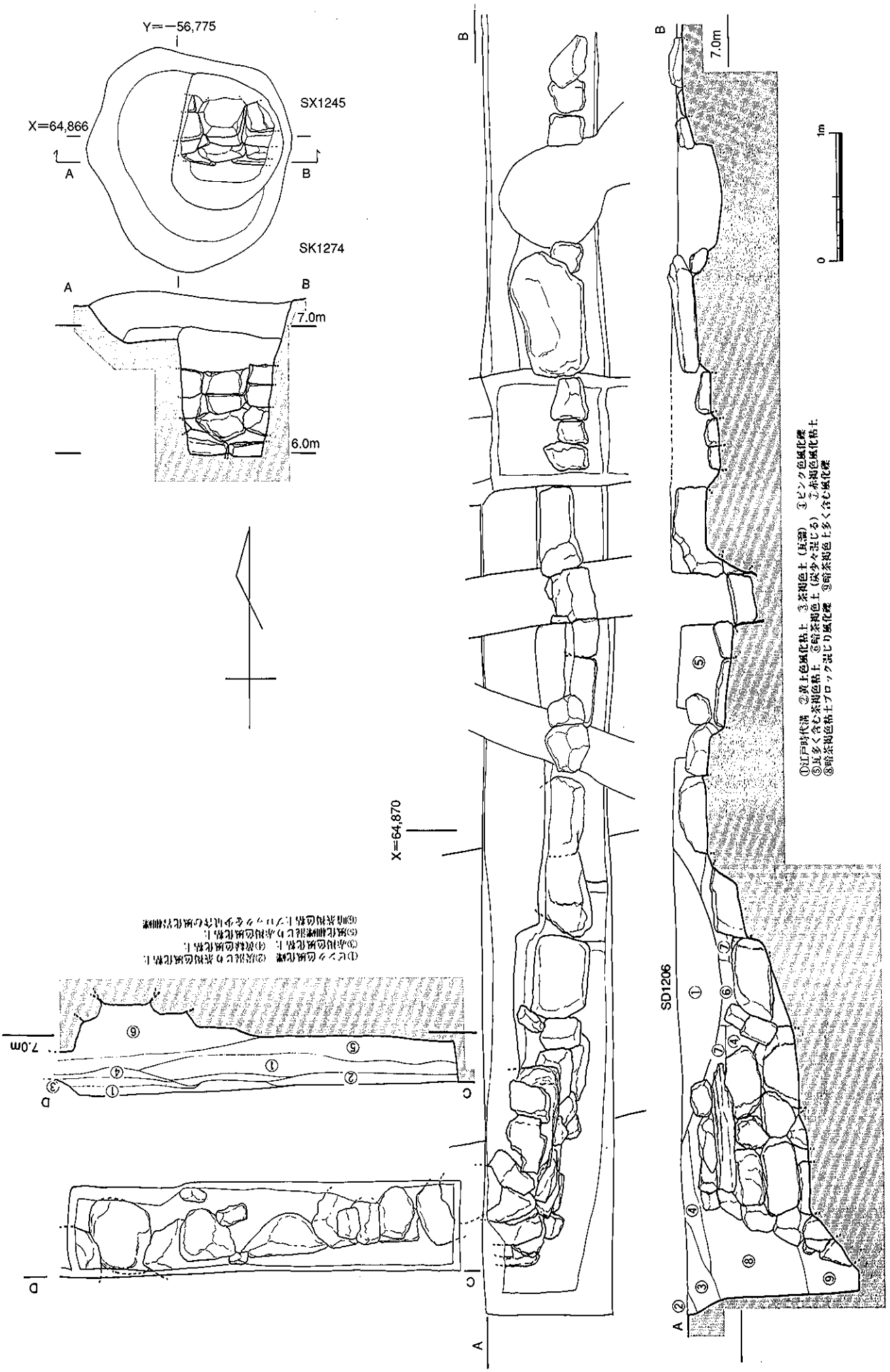


Fig. 23　SX1245実測図（1/40）

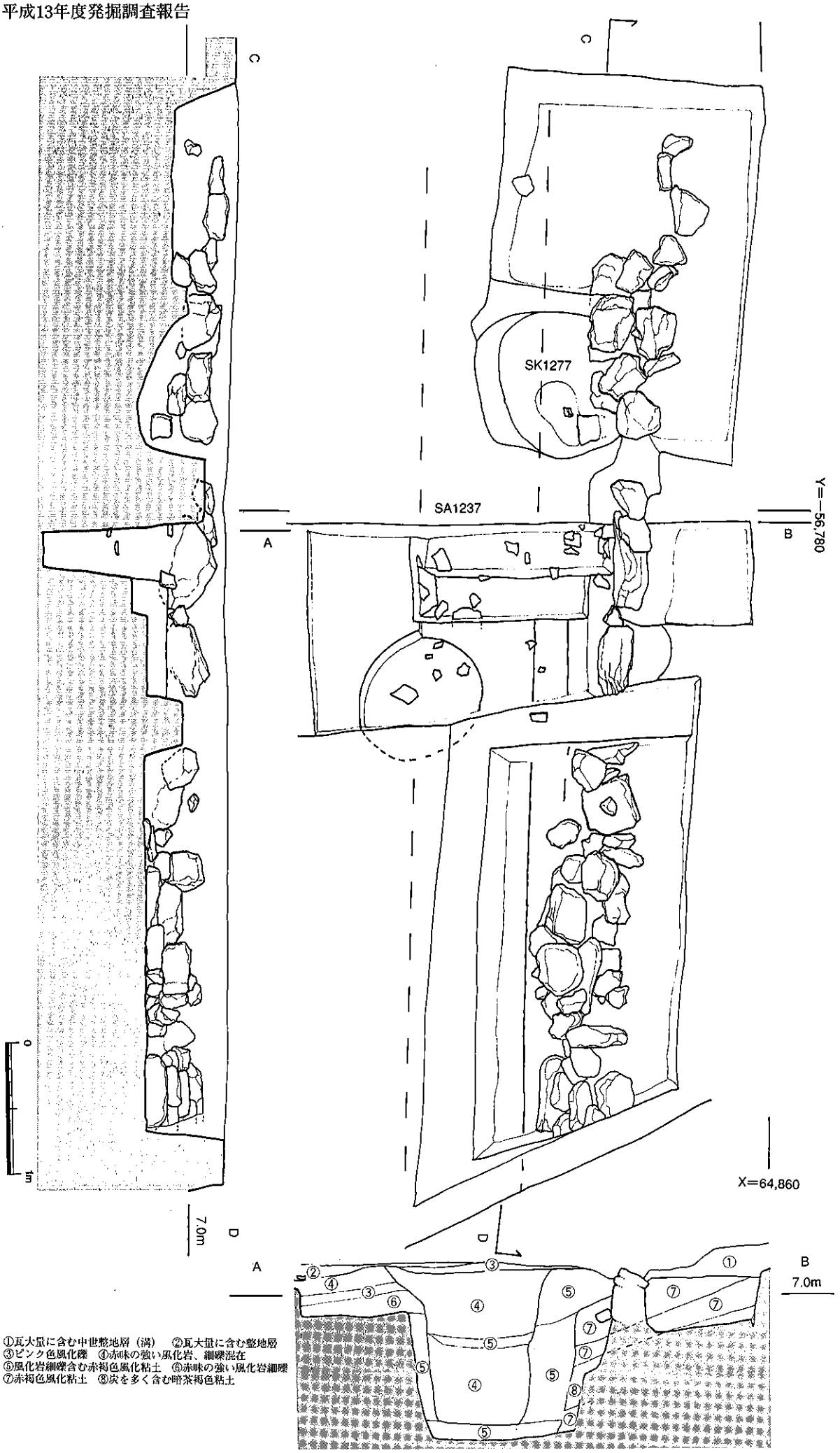


Fig. 24　SX1278、SA1237南列実測図（1/40）

第Ⅱ期の遺構

平成13年度は、鴻臚館跡調査研究指導委員会の指導により、平成12年度に検出された堀北側第Ⅱ期建物区画（SA1104）の東南隅部分の検出を主要目標とした。その結果、第Ⅱ期建物区画（SA1237）が検出され、さらに調査区北端ではこれに取り付く門の一部（SB1238）が確認できるなど、当初予想された以上の成果が得られた。

ＳＡ１２３７（Fig.25、Pl.11－1・2）

平成12年度調査SA1104に対応する布掘り掘立柱列が検出できた。東南隅については中世溝で切ら

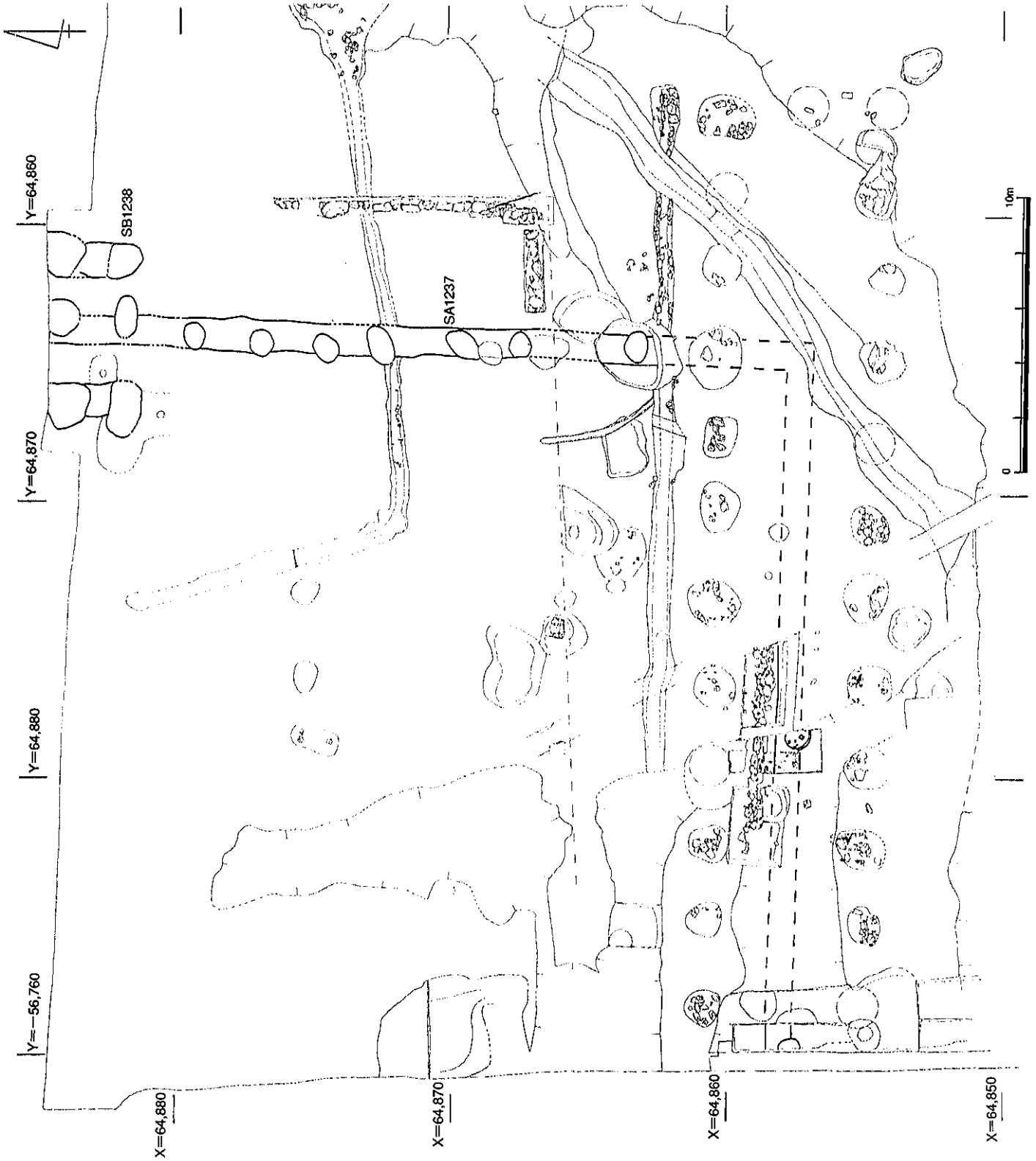


Fig. 25　第Ⅱ期遺構平面図（1/200）

れ未確認である。南列は第Ⅲ期礎石建物の整地と重なるため、トレンチ、土層断面等で部分的に確認している。この布掘り掘立柱列は建物区画（塀）の東南部にあたり、Ｌ字状に検出された。東列北側は風化岩の岩盤を掘り込んでいるが、東列南側と南列は、先に述べたとおり、埋立造成土SM1209を掘り込んでおり、埋め立て後に造られたものであることは明かである。また石垣遺構SX1245、石積み遺構SX1278より新しい。掘方の上面は幅１ｍ強である。平面プランのみの確認で断ち割り調査は行っていない。東列で７個、南列では土層確認トレンチで２個の柱抜き跡が確認できた。柱の抜き取り方向は、東列が西側、南列が南側である。柱間は平均2.4ｍを測る。布掘り東列の主軸は、堀南側第Ⅱ期遺構の布掘り掘立柱列（SA301、Fig.26）の東列軸線の延長線上に重なり、また方位もＮ－2°－Ｅで同一で、柱間も等しく、また南列軸線も堀南側第Ⅱ期遺構の東西軸線と平行で、東西幅も約74ｍで等しい。両建物の間隔は堀を挟んで約42ｍを測る。

ＳＢ１２３８（Fig.25、Pl.11－２）

調査区北側で検出できた掘立柱の門遺構である。布掘掘立柱列SA1237東列の北に取り付く。調査区北端で検出したもので、一部調査区を拡幅したものの、半分以上が北側芝生広場に伸び全容は見えないが、堀南側第Ⅱ期建物区画の東門（SB300、Fig.26）と同様の梁行２間、桁行３間の八脚門の南半部分である。福岡城の通路側溝（SD1203）、石垣（SX1204,1205）、家老屋敷柱穴（SA1227）によって部分的に掘り込まれているものの、全体型は把握できる。北側部分の調査時に門全体の調査を行うことが重要と思われたため、平面プランの確認のみを実施し、断ち割り調査は行っていない。柱抜き取り跡が確認でき、柱はすべて抜き取られているものと思われる。側柱の柱掘方は脇間の２本の柱を１組とし、幅1.2ｍ、長さ3.6ｍ程の布掘り状の穴を岩盤風化岩に穿ち、これに柱を据える。桁行筋の柱掘方は、門にとりつく塀(SA1237）の布掘りと一体化して掘りこれに柱を据える。軸線はSA1237と等しくＮ－2°－Ｅを測る。

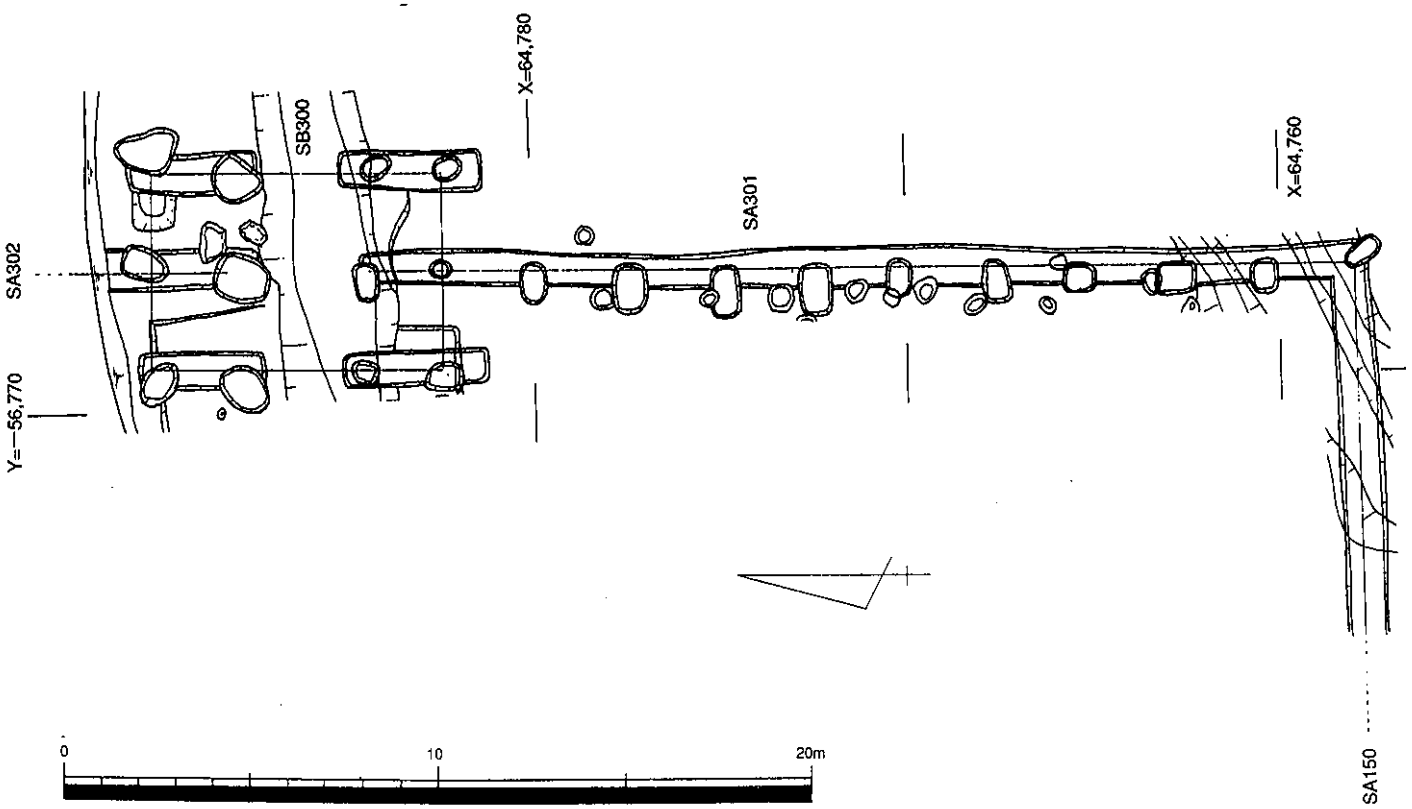


Fig. 26　堀南側第Ⅱ期遺構（SB300、SA301）平面図（1/200）

平成12年度の調査結果も含め、これらの遺構の存在から北側第Ⅱ期建物区画は、東側に門を持つという構造、軸線、規模ともに南側第Ⅱ期建物区画と同じであることから、Fig.37のように堀を挟んで南北に同時期に、相似形の建物区画が併存していたといえる。これらの遺構は８世紀初頭から半ば以降まで継続していたと考えられるが、これまでのところ区画内部の建物については未確認である。なお、北側布掘掘方底のレベルは6.2ｍであり、堀南側第Ⅱ期遺構の布掘掘方底のレベルは7.4ｍであって、両者間には１ｍ以上の標高差が認められる。南北建物は堀を挟んで北側が一段低い、いわば雛壇的平坦面に営まれたことを示すものであろう。南北の建物区画の役割分担等については今後の調査の進展に期待したい。

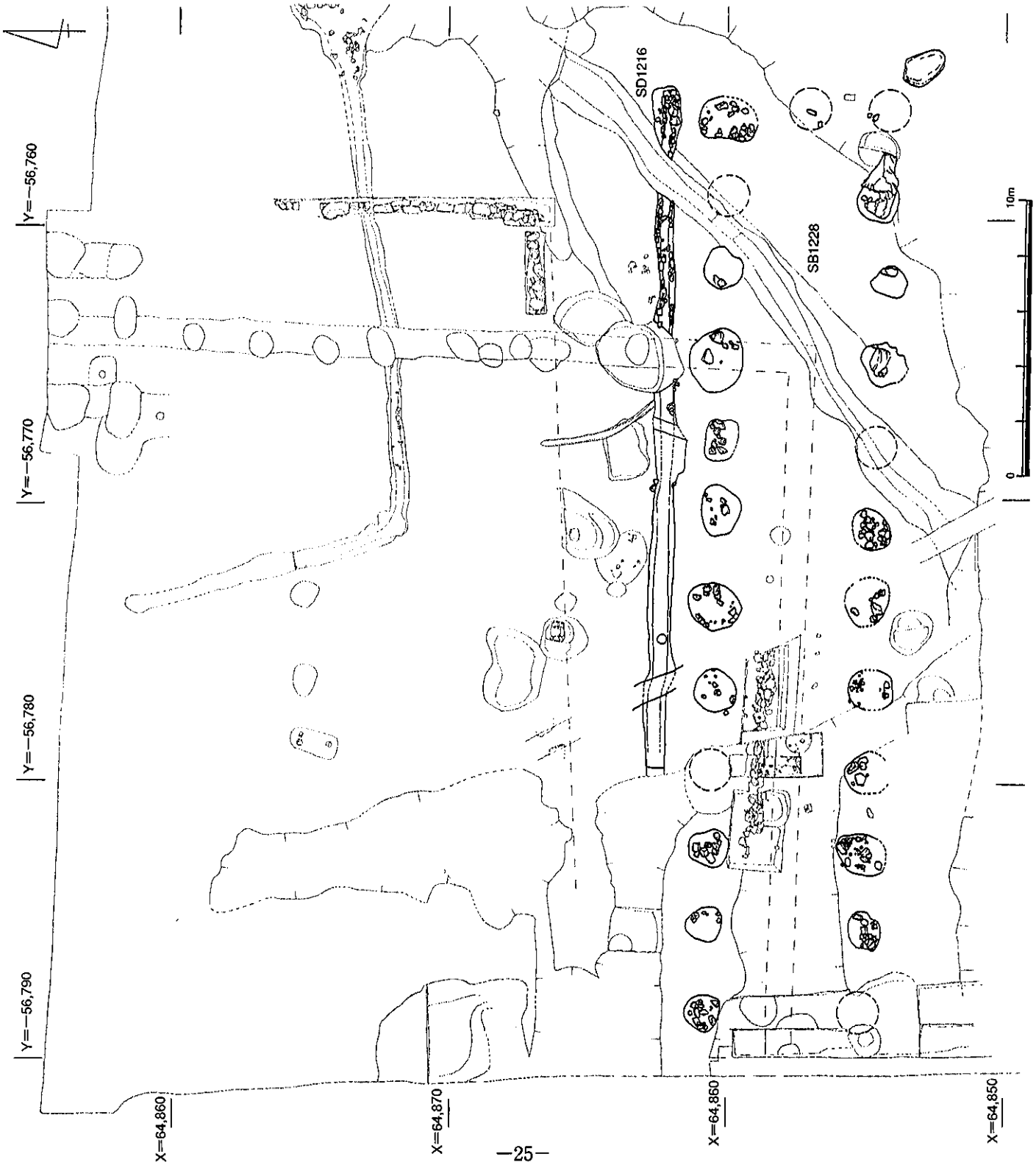


Fig. 27　第Ⅲ期遺構平面図（1/200）

第Ⅲ期遺構

平成11年度調査では東西に走る堀の存在が確認され、遺物の出土状況から堀北側にも鴻臚館遺構の広がりがあると考えられた。12年度調査では堀北側で第Ⅱ期の布掘掘立柱列（塀）による建物区画が確認され、堀北側における鴻臚館遺構の存在が実証された。しかしながら、野球場グランドのスタンド側は球場建築時の削平を受けており、確実な建物礎石の痕跡は検出できなかった。平成13年度調査区では球場建設時の影響が少なかったため、堀北側で初めて第Ⅲ期の礎石建物を検出することができた。検出した遺構は礎石建物（SB1228）とこれに付随する雨落ち溝（SD1216）である。

ＳＢ１２２８（Fig.29、Pl.13－１・２）

堀の北側に接して建てられた東西に長い礎石建物である。東南隅部分は、鴻臚館廃絶後に浸食されている。主軸はN-88°-W（南北軸はN-2°-E）にとる。この軸線は第Ⅱ期布掘掘立柱（塀）と同じで、また、南北礎石列の中間軸線に重なり、北側礎石抜き穴NP1も布掘掘立柱列東列に重なる。このことからこの建物の建築基準線は、第Ⅱ期建物基準を踏襲したものといえる。北側に雨落ち溝SD1216が敷設されており、南側にも敷設されていた可能性は高いが、検出されておらず不明である。建物は本来基壇の上に建てられていたものであるが、後世の整地により上面は削られ、すでに礎石の大部分は欠失している。根固めの石材と堀方から礎石位置が確認できる。礎石抜き穴の一部も中世溝によって消滅している。辛うじて遺存する礎石は次の２基である。南東隅の礎石SP02(Pl.14-3.4)は、浸食により南東斜面にずり落ちているが、1.8×1.15ｍの巨大な玄武岩円礫を使用したものである。西隣のSP01（Pl.14-3.5）はほぼ原位置を留めてはいるものの南側に傾斜している。さらに大きい2.3×1.3ｍ玄武岩の偏平礫を用いている。連隊の排水土管はこの礫の一部を打ち欠いて敷設されていた。礎石列は東西桁行11間分が確認できた。柱間は３ｍ(10尺)の等間であり、さらに西側に延びるものと思われる。地形的な制約と雨落ち溝との関係から、東側は収束している。南北梁間は、束柱が明確ではないものの２間と思われ６ｍ(20尺）を測る。南北柱列の中間部は中世溝が流れているため束柱の存在が明かでなく、間仕切りの有無は確認できない。

整地層及び礎石抜き穴から大量の瓦とともに

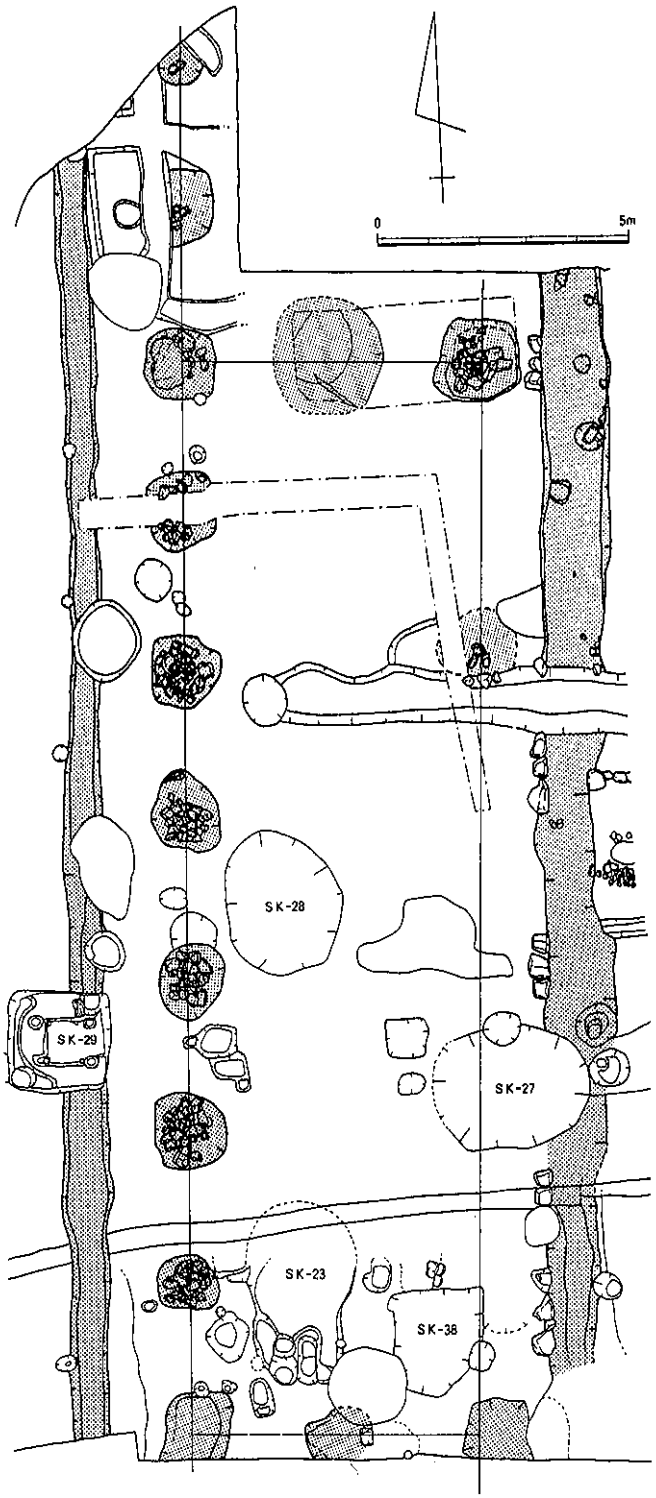


Fig. 28　堀南側第Ⅲ期遺構（SB31）平面図（1/150）

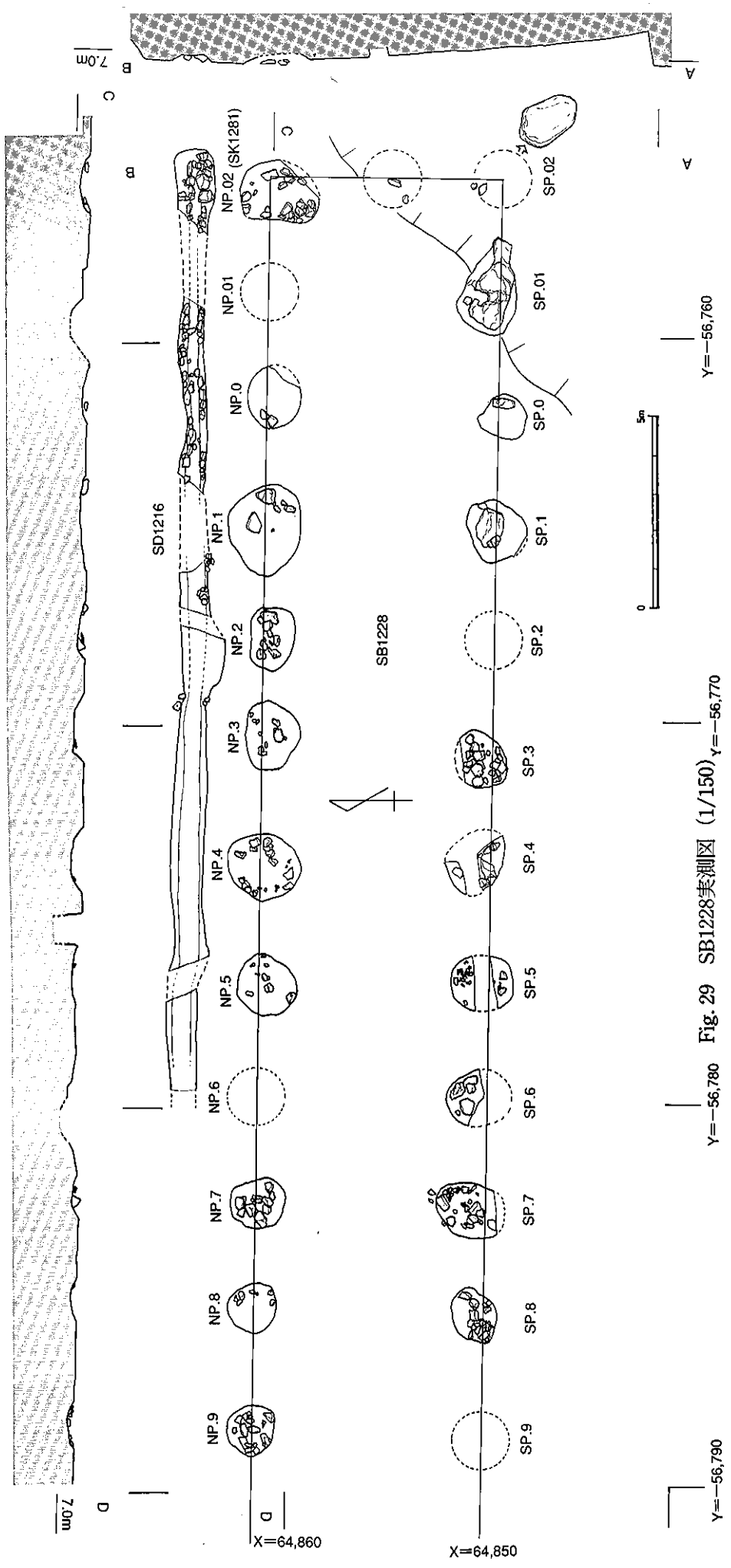


Fig. 29　SB1228実測図（1/150）

陶磁器等が出土しておりFig.30に図示している。５～20は整地層から出土したものである。第Ⅲ期整地の上面にもⅣ・Ⅴ期遺構、中世整地があり出土層位の峻別は難しい。５～８は土師器Ⅲ、９・10は高台付の土師器碗である。11・12は須恵器坏蓋、13は坏身である。14は越州窯青磁Ⅰ類碗、15は同じくⅡ類碗である。16は白磁XI類Ⅲである。17は高台付白磁碗である。類例の少ない器形であるが生地、釉薬とも精良で北方白磁であろう。18は通例の白磁Ⅰ類碗である。19は緑褐釉を施した中国製陶器鉢である。20は高麗の無釉陶質甕で体部に細かい格子の叩き目が残る。21～24は礎石抜き穴からの出土であるが、出土層位の峻別は困難である。21はNP1出土の越州窯青磁Ⅲ類碗である。22・23はNP3の出土で、22が内面に花文をもつ越州窯青磁Ⅲ類碗で、23が同じくⅠ類碗である。24はNP５出土の須恵器坏身である。

ＳＤ１２１６（Pl.14-1･2）

SB1228の北側に付設

された雨落ち溝である。東側は礫岩小礫を中心とした縁石が残っているが、西側は礫は残らず掘方だけが確認されている。西端部は中世溝SD1268によって切られているが、SD1216と軸線は一致しており、雨落ち溝軸線を踏襲したものであろう。この雨落ち溝からは興味深い遺物が出土している。Fig.36に示している。16は金製品で、細長い棒状に整形した金塊を、ヤスリ状の工具で面取整形し、形状は鏃形を呈すが、鏃としての実用品とは思われない。表面にはほぼ全面加工による擦痕が残っている。18はライトブルーを呈するガラス製小玉で、同じく雨落ち溝から出土したものである。17は水

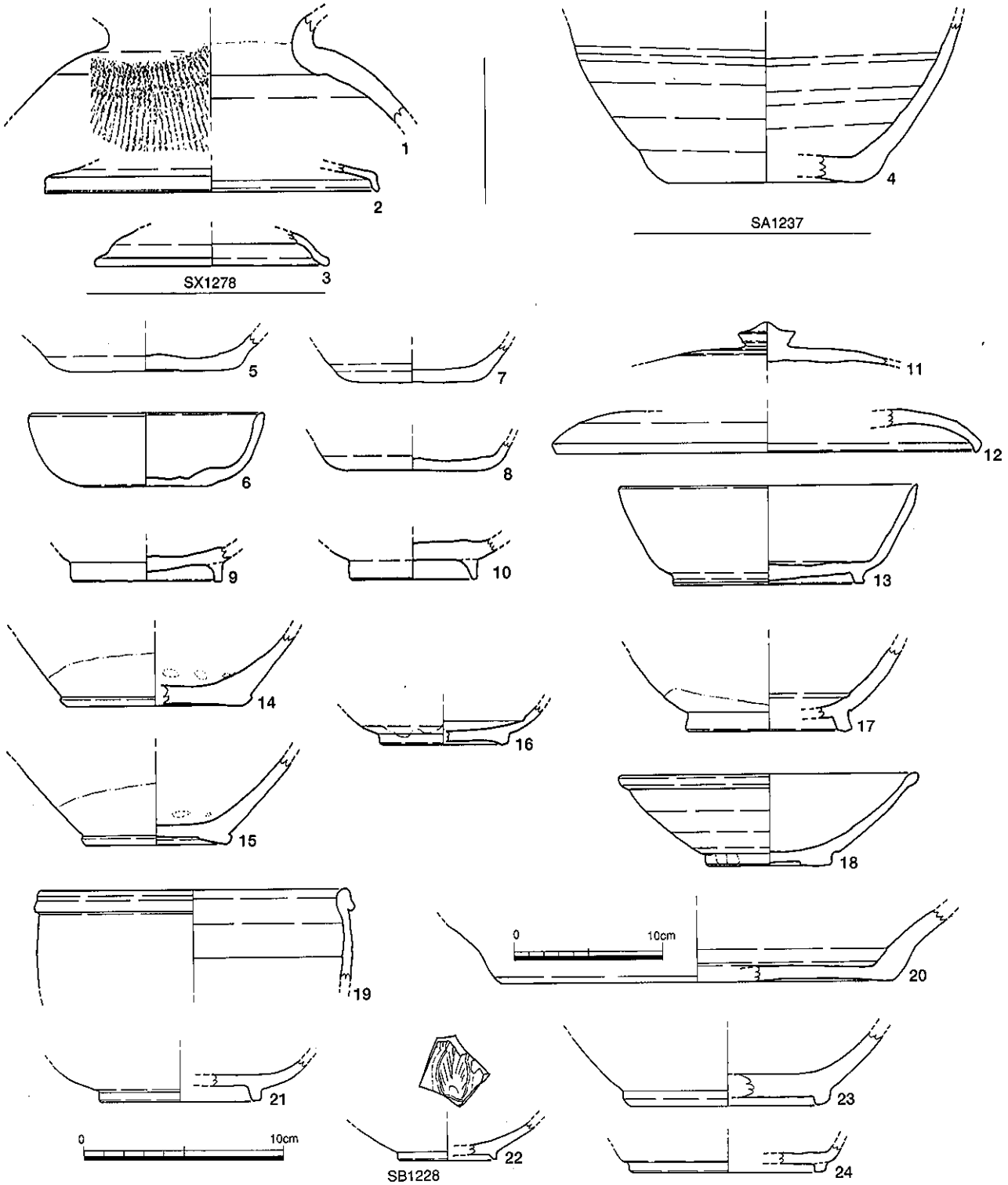


Fig. 30　SX1278、SA1237、SB1228出土遺物（1/3、20は1/4）

晶で加工は見られないが、被熱による剥離があり、先端部は黒色に変化している。雨落ち溝とSB1228礎石北側列の間から出土した。これらの遺物はそれぞれ単独で出土したものであるが、出土地点が雨落ち溝または近辺であること、それぞれ祭祀的な性格を持っていることから、たとえばSB1228建築時の鎮壇祭祀に使用されたものが遊離したものと考えたい。

この堀北側で初めて確認された礎石建物は、堀南側で見つかっている第Ⅲ期礎石建物のうち、小子房的建物と考えられているSB31（Fig.28）と、南北棟、東西棟の違いがあるものの、軸線、間取り寸法が同一であり、同一時期の建物であるといえる。このことから、第Ⅲ期の段階においても、堀南北に建物が存在していた事が明かである。しかし現在のところ、１棟だけの検出で、建物群全体の配置は不明であり、堀南北建物群の比較は容易ではないが、将来的にさらに北側で検出できる可能性も高く、今後に期待したい。

また、史料中に具体的な鴻臚館建物名称がいくつか見える（巻末参考史料）。そのうち「園城寺文書」には858(天安２)年６月22日、入唐僧圓珍が鴻臚館に入り、このとき唐商人高奉が「鴻臚北館門楼」に遊行した圓珍に漢詩を奉じた事が記されている。また、「入唐五家傳」には861（貞観３）年８月９日、入道高岳親王が鴻臚館に到着し、この時大唐商人李延孝が「鴻臚北館」にいた事が記されて

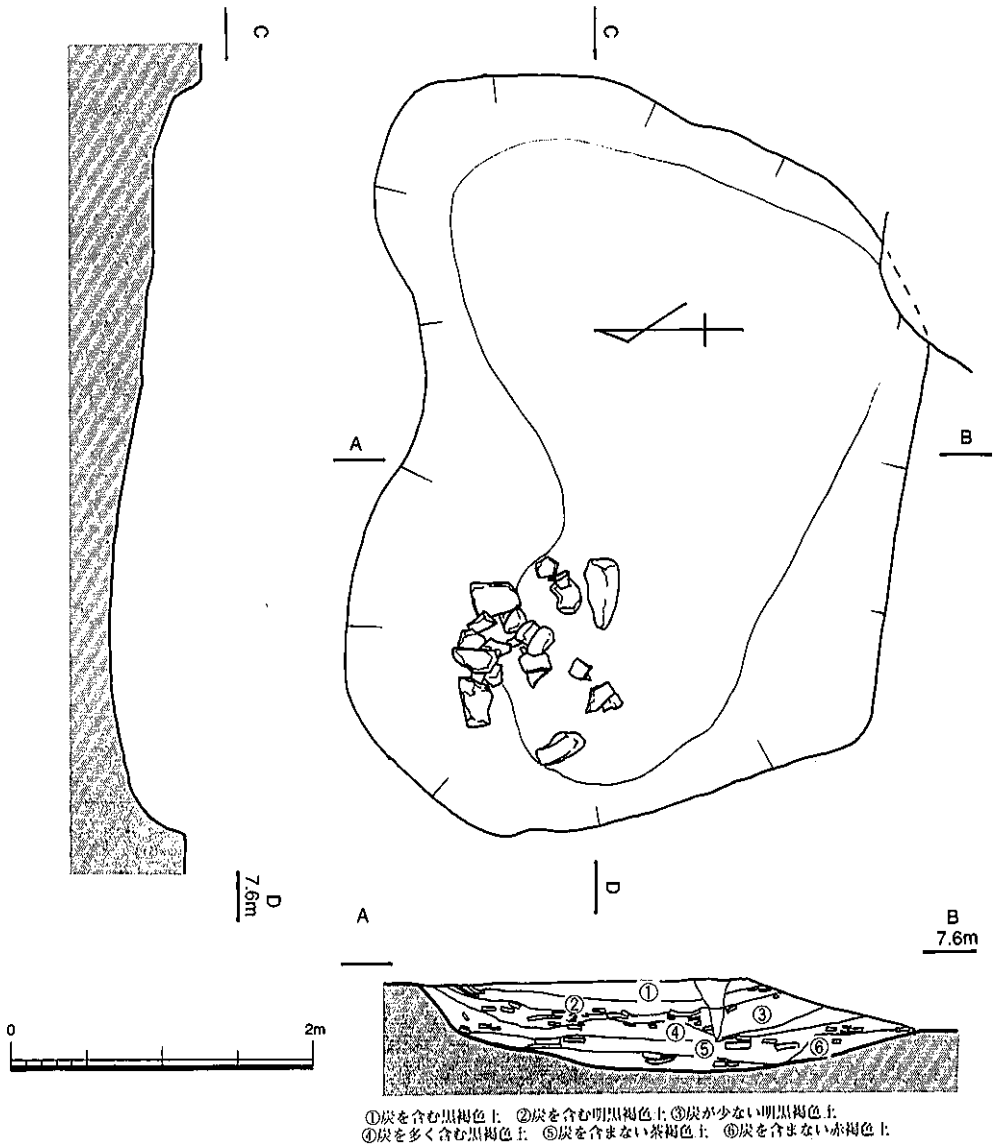


Fig. 31　SK1225実測図（1/30）

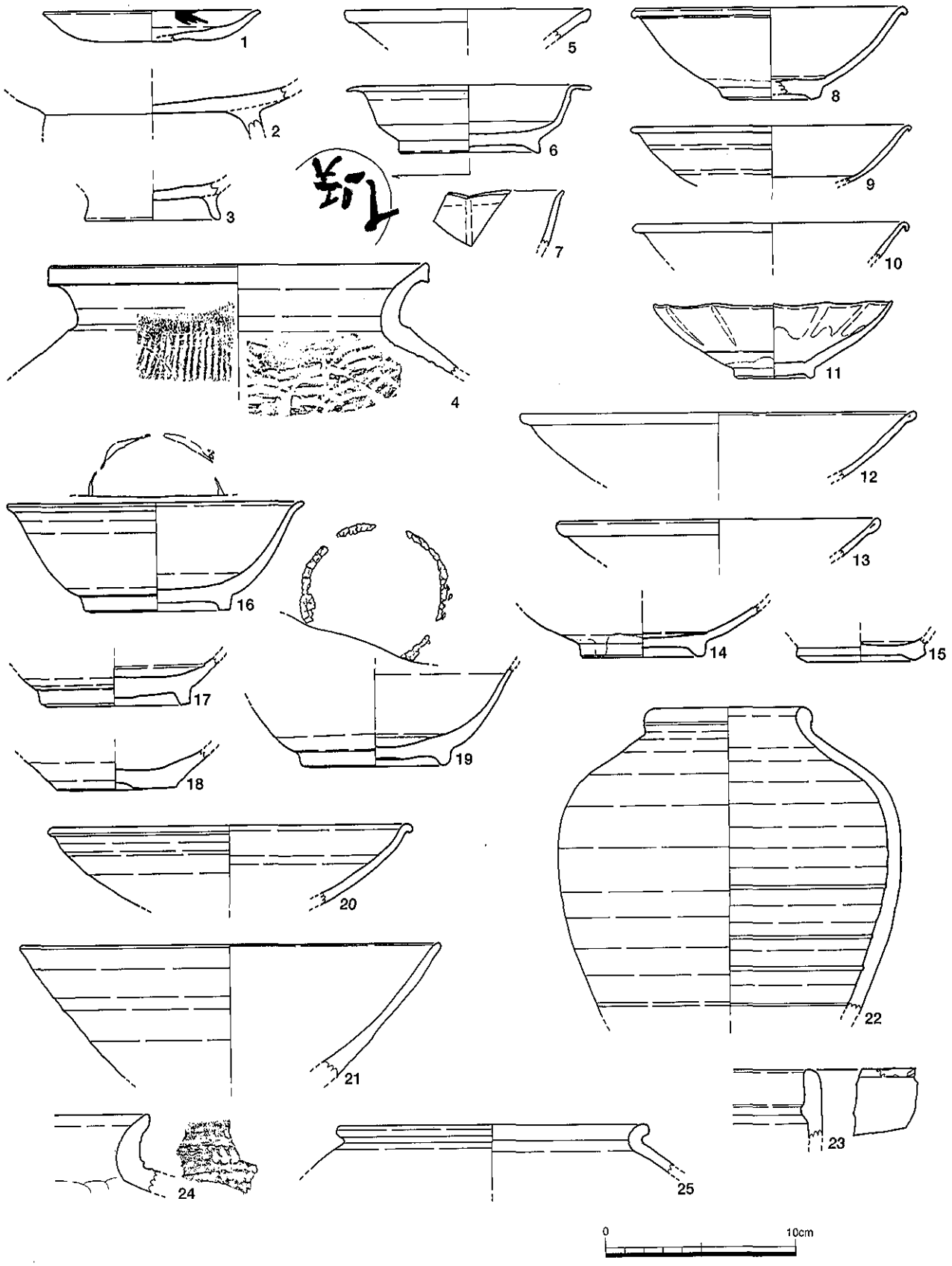


Fig. 32　SK1255出土遺物（1/3）

いる。今回確認できた堀北側礎石建物は、この鴻臚北館の一部に相当するものであろう。

その他の遺構

鴻臚館のこれまでの調査ではⅠ～Ⅲ期にわたる建物跡が確認されているが、Ⅲ期以降は建物遺構こそ確認されていないものの、陶磁器等を多く含む廃棄物処理土坑などが確認できている。おおむね10世紀代を第Ⅳ期、11世紀代を第Ⅴ期としている。このⅣ・Ⅴ期は鴻臚館の機能が実質的に外国商人の交易所となっている時期で、商品としてもたらされた陶磁器が多量出土する。ここで報告する遺構はこの第Ⅳ・Ⅴ期の遺構が中心となる。一部整理不十分な遺構もあり、これらについては次回ふれることとして、主要な遺構について述べる。

ＳＫ１２５５（Fig.31、32、Pl.17－5）

調査区ほぼ中央で検出した廃棄物処理土坑である。南側を江戸時代溝SD1206によって削られている。長軸3.0ｍ、短軸2.0ｍ程の不整楕円形の形状を持ち、深さ現状で40㎝、断面形は皿状を呈す。土坑内ではゴミの廃棄と焼却繰り返し行われており、灰と木炭が整然と堆積している。出土遺物には大量の鴻臚館関係瓦の小破片が多いが、これらに混じって陶磁器が出土する。Fig.32に示している。１～３は土師器で、１がヘラ切り離しの皿で、２が高台付の大型の碗、３が高台付碗である。４は須恵器甕である。５～15は白磁である。５はⅠ類碗破片で、他の白磁より古く、混入である。６～15は白磁XI類に分類される一群で、器形にバリエイションがある。６は体部上半が直に立ち上がり、口縁を水平に外反させる坏で、外底を除き高台脇まで施釉される。高台内露胎部には墨書が見られる。「鄭」かとも思われるが明確ではない。７は体部を瓜破にし、口縁部を削り込んだ輪花碗で、釉は青みを帯び青白磁の印象を与える。８・９・10は同形の碗で口縁端部を下方に小さく折り曲げる。釉は白色、わずかに青味を帯びる。８の外底には墨書があるが、部分のため判読できない。11は体部を瓜破にした碗で高台径、内面茶だまり径は小さく、青白磁に通じる器形である。12・13口縁端部を折り返し、幅広の玉縁を作るものである。14・15は基本的にXI類に共通の底部破片である。16～19・21は越州窯青磁碗である。16～19は輪高台を持つⅠ類碗で胎土はやや粗い。畳付を除いて全面施釉されているが、17

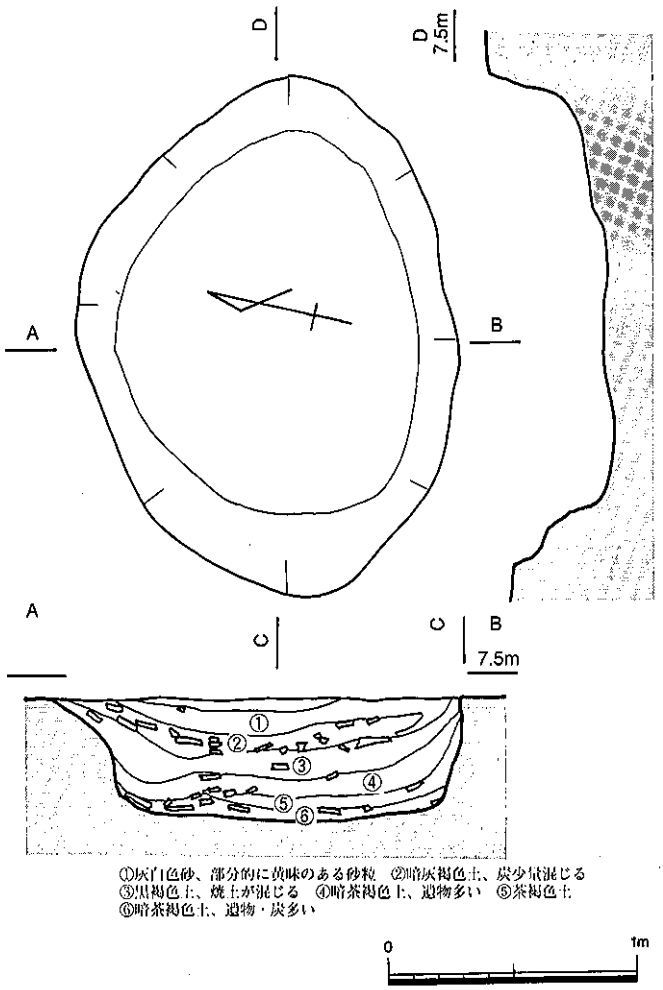


Fig. 33　SK1264実測図（1/30）

は強く被熱しており、焼け割れ、釉が全面剥げている。20は二次被熱により釉が沸騰しほとんどが剥落しているが、胎土は白磁のものでありXI類に属する碗であろう。21は越州窯青磁Ⅰ類大碗である。22は中国製緑褐釉陶器広口壺で口縁部は丸みを持つ。23は中国製陶器捏ね鉢で無釉、粗い胎土を持つ。24は新羅焼き甕で、頸部に櫛状施文具による刺突文様を施す。25は陶器甕であるが、二次被熱により釉が剥落したものであろう。生産地不明。

これらの遺物は白磁XI類を特徴とし、鴻臚館の終末期である第Ⅴ期（11世紀前半代）に位置づけられるものである

ＳＫ１２６２（Fig.35、Pl.17－4、18－3・4）

SB1238の北側に位置する不整形の遺構で、瓦小破片が多く廃棄される。浅く、炭は含むものの内部で火を焚いた痕跡もなく、第Ⅲ期建物築造に伴うブロック状の整地痕跡であろう。ここからは注目すべき遺物として、Fig.35の１・２に示した長沙窯の深い青緑釉を施した陶枕が出土した。枕上面の平坦面破片（１）が２点、側面から畳付までの破片（２）が２点でそれぞれに接合する。ともに同一個体である。１には上面の隅部分、短軸両端部が含まれ、短軸幅は10.0㎝である。上面隅と端部は丸みを帯び、釉の薄い部分は白みを帯びた発色をする。上面中央部はわずかにくぼむ。２は体部の下端部で、底部から３～５㎜の高さまで施釉され、以下と底部は露胎である。二次被熱により一部釉が剥げ落ちる。下端角は面取されている。接合面の観察から天井部、体部、底部は別個に作られ接合したものである。胎土は二次被熱により赤みを帯びているものの淡い灰色で硬質、厚さは天井部で６～７㎜、側面上部で4.5㎜、下端で８㎜、底部で４㎜である。これらと同一個体の小破片１点も近接する整地層から出土しているが接合しない。従来国内では長沙窯製品としては、褐釉を施した水注、碗などは見られたが、青緑釉を使用したものは希少であった。長沙窯青緑釉陶枕の日本での発掘による出土例は初めてと思われるが、類例として、佐藤雅彦「中国陶磁史」1978　平凡社　カラー図版42に掲載された完形品（東京国立博物館今井敦氏教示）、出光美術館所蔵の故宮博物院寄贈中国窯跡出土陶磁コレクションに破片数点がある（巻頭図版５－８　出光美術館金沢陽氏教示）。

ＳＨ１２６３、ＳＨ１２６６

SB1238の南北礎石列間にある小規模な地床炉である。第Ⅲ期建物廃絶後の遺構であるが、中世の可能性もある。

ＳＫ１２６４（Pl.17－5、Fig.33・35－3～18）

SB1238の南北礎石列間にある廃棄物処理土坑である。内面で数回焼却作業を行っている。所々で瓦が多量出土する。Fig.35に出土遺物を示している。３～14は土師器である。3・4は皿、５～13は高台付の碗、14は甕で頸部付近には煤が付着し、底部は製塩土器のように赤化している。15～17は越州窯青磁Ⅰ類の輪高台を持つ碗である。18は中国製陶器四耳壺である。二次被熱による釉の剥落変色が目立つが、外面と頸部内面に黄釉が掛けられている。中世博多でも多

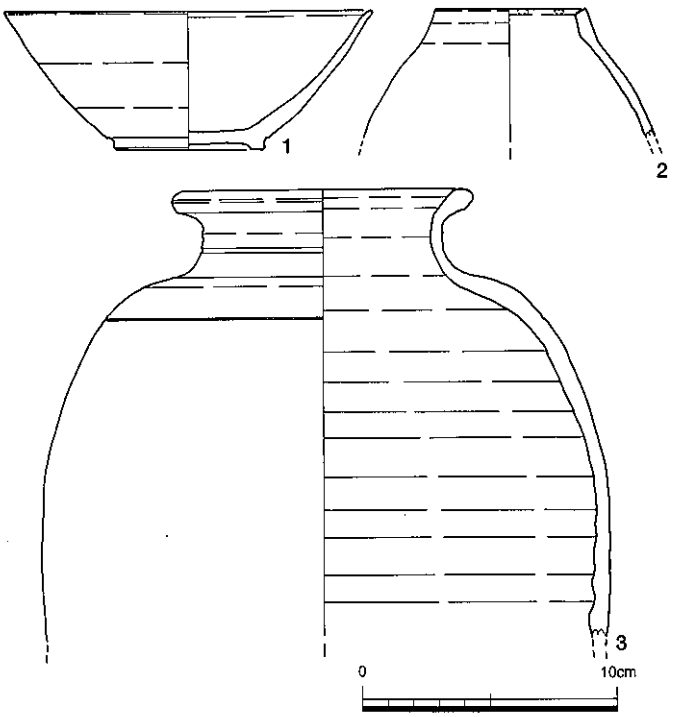


Fig.34　SK1273出土遺物（1/3）

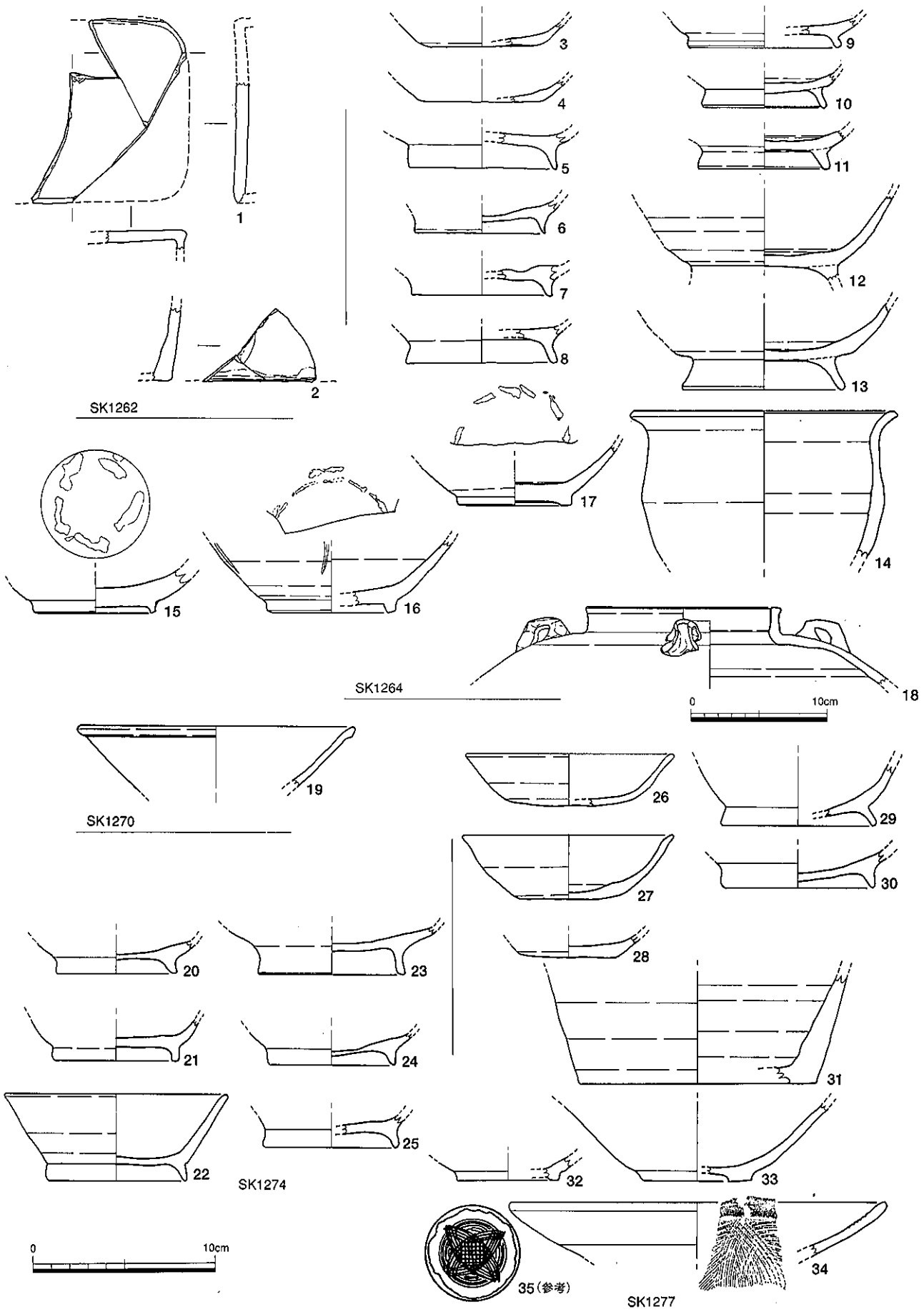


Fig. 35　SK1262、SK1264、SK1270、SK1274、SK1277出土遺物（1/3、18は1/4）

く見られる器形であり、その先駆けといえる。遺構はほぼ第Ⅳ期（10世紀頃）に位置づけられる。

ＳＫ１２６５、ＳＫ１２６７、ＳＫ１２６９、ＳＫ１２７０、ＳＫ１２７１

いづれもSB1238の北側にある浅い土坑状のもので、ブロック状の整地痕跡である。大量の瓦が含まれている。 SB1238建設に伴うものと、以降の整地と両者見られるものとおもわれるが、整理不十分で明確でない。Fig.35－19はSK1270出土で、白磁Ⅰ類碗である。

ＳＫ１２７３（Fig.34）

SB1238の南北礎石列間整地面に掘り込まれた廃棄物処理土坑である。内面で数回の焼却作業が行われている。瓦片とともにFig.34に示した遺物が出土している。１は越州窯青磁Ⅰ類の輪高台を持つ碗である。２は越州窯青磁の優品で無頸の壺である。精良な薄胎で、外面と内面上半にオリーブ色の釉が均質に掛けられ、表面はつややかである。口縁直下に耳の痕跡がある。口縁端に目跡が残る。３は新羅焼きの壺である。頸部下半から肩部にかけ３本の圏線がめぐる。外面はネズミ色であるが胎土中心部は小豆色を呈す。第Ⅳ期の遺構であろう。

ＳＫ１２７４（Pl.17－8、Fig.34）

SB1238の北側に掘り込まれた廃棄物処理土坑である。内面で数回の焼却作業が行われている。瓦片とともにFig.35に示した遺物が出土している。21～25はいづれも高台付の碗である。全体に二次被

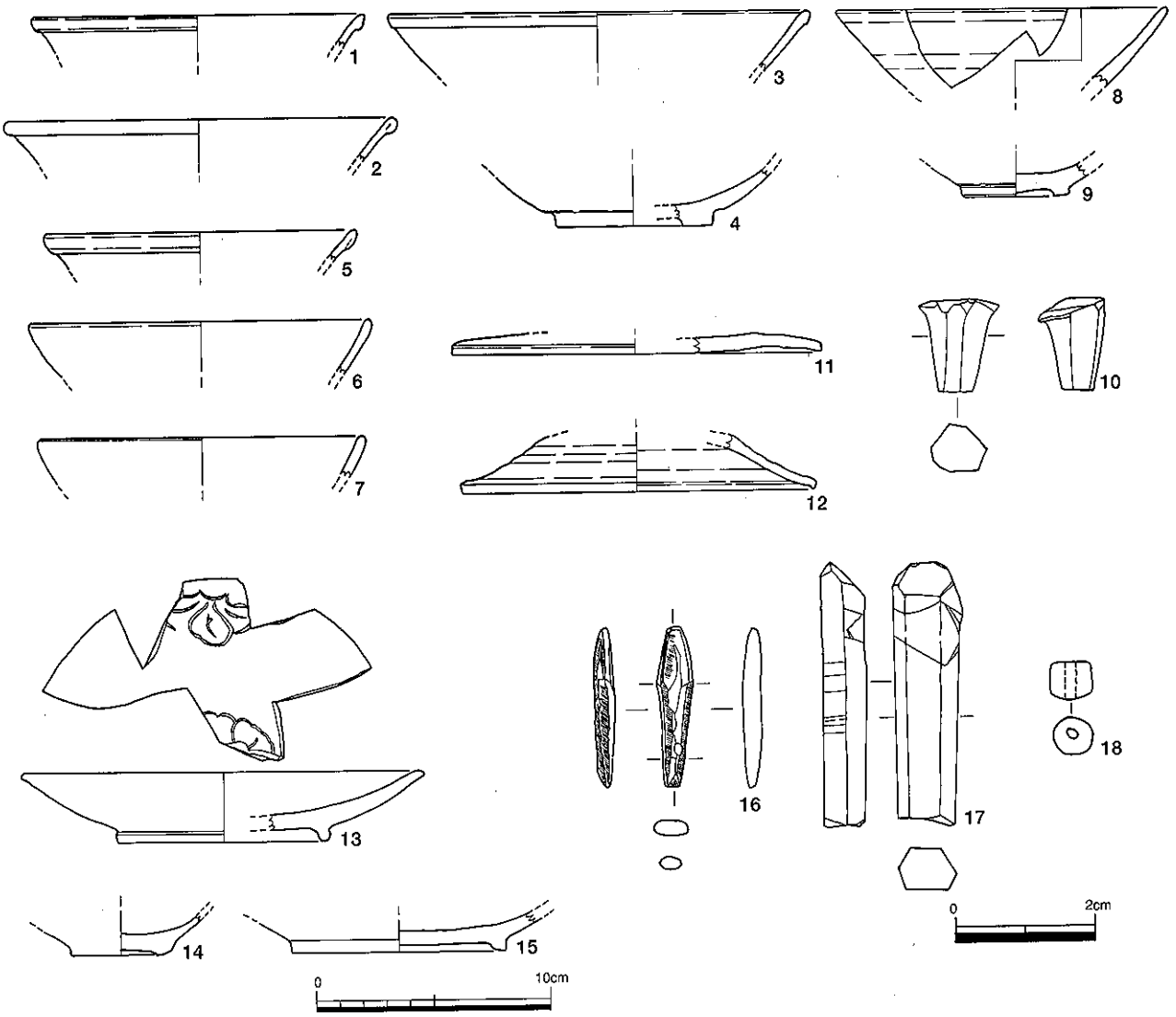


Fig. 36　整地層出土遺物（1/3、16～18は1/1）

熱により器壁が荒れているものの、22は研磨痕跡が観察され他より古い。他はほぼ同様で10世紀後半から11世紀初めに位置づけられるものであろう。なおこの遺構床面から石垣列SX1245の延長線確認のため掘り下げている（Fig.23－1）。

ＳＫ１２７５（Pl.17－8）

SK1274に隣接する径60cmほどの小規模な廃棄物処理土坑である。瓦破片等が多く含まれる。第Ⅳ期に位置づけられる。

ＳＫ１２７６

SK1264、SK1273に切られた廃棄物処理土坑である。内面で焼却作業を行っており灰が層になって堆積する。この中に瓦等の破片がある。SB1238の礎石抜き穴NP2の一部を切っており、SB1238廃絶後に掘り込まれた第Ⅳ期のものである。

ＳＫ１２７７（Fig.35－26～34）

石積み遺構SX1278の南に接して掘り込まれた廃棄物処理土坑である。第Ⅱ期布掘SA1237を切る。灰、炭が混じり内面で焼却作業を行っている。瓦破片にまじって遺物が出土する。26～28は土師器皿、29・30は土師器高台付き碗である。31は東海系の陶器壺で、胎土は灰色であるが白粒を含み、焼成は良好で堅緻、肌はなめらかである。32は白磁Ⅰ類の幅の狭い輪高台をもつ碗。33は同じく白磁Ⅰ類の蛇の目高台の碗である。34は珍貴な器種である。内面に特徴的な卸目を櫛描きした卸目皿である。外面には黄釉を施し、口唇部を褐釉で彩る。内面は無釉である。この製品の類例は、35のように長沙窯出土品に見られ（周世荣：石渚長沙窯出土的瓷器及其有関問題的研究　1984　「中国古代窯址調査発掘報告書」文物出版社）、この資料も長沙窯の製品であると思われる。

整地層出土遺物（Fig.36）

鴻臚館の所在した丘陵は造成整地を繰り返し、平坦面を拡幅している。Fig.36－1～12はこのうちほぼ第Ⅲ期建物にともなうと考えられる造成土（SM1209）から出土したものである。１～７は白磁碗Ⅰ類に属するもので、１～３は小さな玉縁をもち、４は蛇の目高台、５は少し大きめの玉縁口縁をもつ。６・７は口縁端部を丸く収めるものである。８・９は越州窯青磁Ⅰ類の碗である。９は小碗である。10は磁質の脚部破片で、大きく面取している。施釉はされていないが、微細な粒状の透明釉が付着する。胎はベージュ色で精良、全体の器形は不明である。

13～15は中世整地層（SM1208）等から出土したものである。13は猿投の緑釉陶器高台付き皿で内面にヘラ描きの花文がほどこされている。14は朝鮮時代の粉青沙器である。15は周防産と思われるの緑釉陶器高台付き皿であるが、釉は剥落している。

16～18についてはSD1216の項で述べたとおりである。

３．平成13年度発掘調査のまとめ

平和台野球場跡地の調査は、球場南側で確認されていた遺構が、北側にどのような形で広がっているのか期待されていた。一方、野球場グランド造成時に削平を受けたことで、遺構の遺存を危ぶむ悲観的な見方があったのも事実である。しかし、平成11年度の調査では、区域を南北に区分する東西に伸びる堀の存在が明らかになり、その北側にも鴻臚館関係建物の存在が推定された。平成12年度の調査区は、平成11年度調査区北側を拡幅したもので、堀北側に具体的にどのような建物が展開していたのか期待された。その結果、堀南側第Ⅱ期建物区画に対応する建物区画の布掘掘立柱列がＬ字状に検出された。北側第Ⅱ期建物区画の南西隅に当たるものである。堀北側で初めて建物遺構が検出されたことにより、鴻臚館（筑紫館）は、堀を挟んだ南北建物群から成る複合施設であることが明らかになった。南北の建物区画は、西側列の軸線、方位を同じくしていることから、同一基準によるものであり、ほぼ同時期に併存していたと考えられた。

平成13年度は、鴻臚館跡調査研究指導委員会の指導により、平成12年度に検出された堀北側第Ⅱ期建物区画（布掘り掘立柱列）の東南隅部分の検出を主要目標として調査区を設定した。その結果、次のような成果が得られた。

第Ⅱ期以前の遺構

鴻臚館・筑紫館関係遺構についてはⅠ～Ⅴ期に区分されているが、第Ⅰ期についてはさらに細分される可能性が高まったことから、第Ⅱ期以前と仮称しておきたい。

今回の調査で特筆すべき成果の一つは、谷の埋立造成にともなう土留めの石垣（SX1245）が検出されたことである。第Ⅱ期布掘掘立柱塀(SA1237)の東に約4.5ｍの間隔を持って平行に並び、さらに西側に直角に近い角度で折れ曲がり、SA1237によって切られていることがわかった。このことから第Ⅱ期以前の遺構であることは明らかである。屈折部では少なくとも高さ1.3ｍ、６段の石積みがあり、谷斜面の傾斜に従って深くなっている。北側岩盤露出部では見られない。南側石垣傾斜角度は約67°を測る。使用されている石材は、礫岩・玄武岩・花崗岩礫を中心とし、大きさは不揃いで加工を施した様子は見られない。石積みには裏ごめ石はなく、埋立土前面に直接貼り付けるような形で積み上げている。前面の石面の目地が縦に通り、背面に控えがとられておらず、隅部分も丸みを持ち、算木積みの形を取っていない。また、一部横長の礫を複数の石材に渡してはいるものの、だいたいにおいて上面の重量を分散させるという石垣通例の積み方が見られないため、不安定な印象を受ける。この石垣はさらに西側でも部分的に確認されており、石垣ラインは西に延長していることは明らかである。この石垣については、平成14年度も継続調査することにしており、詳細については次回報告する。

この他第Ⅱ期以前の遺構としては、第Ⅱ期布掘掘立柱塀(SA1237)南列の、北に接して東西にのびる石積み列（SX1278）がある。7.5ｍほどが検出できた。西側は途中で収束する。東側の延長は未確認である。東側では２～３段の石垣状の積み石が観察できるが、西側では礫が散在した状態となる。使用されている石材は、SX1245と同様に礫岩・玄武岩・花崗岩礫を中心とし、加工はみられない。Fig. 24の土層観察によると、この石積み列は、SX1245築造後に拡幅された造成土傾斜面上に設置されており、さらに南側の埋め立て土を第Ⅱ期布掘掘立柱塀(SA1237)が掘り込まれていることから、SX1245の石垣より新しく、SA1237布掘より古い。拡幅造成のある段階での土留め、あるいは区画を示すものであろう。

その他、第Ⅱ期門遺構（SB1238)周辺で岩盤に掘り込まれた柱穴、土坑が確認できた。SB1238掘方

に切られていることから第Ⅱ期以前の遺構であることは明らかである。平面プランのみ確認しており、詳細は将来の門遺構全体の調査に委ねることとした。

これらの遺構は従前知られていなかったものであり、鴻臚館（筑紫館）成立期の建物区画の変遷を知る上で重要な遺構である。

第Ⅱ期建物区画

平成12年度調査検出の第Ⅱ期建物区画西列に対応する東列（SA1237）が検出され、さらに調査区北端ではこれに取り付く門（SB1238）のほぼ南側半分が確認された。建物区画の南列は鴻臚館第Ⅲ期礎石建物の整地層に覆われ、全体の平面プランは確認できていないが、２本の土層確認トレンチと土管堀方（SD1218）の土層断面で確認できていることから、ラインは推定でき、平成12年度調査第Ⅱ期建物区画南列南列に繋がるものであることは明らかである。東列の軸線は、南側建物の東列軸線北側延長線上にある。東列、西列間の距離は約74ｍで、南側区画と等しい。門の構造も南と同じく八脚門で、東側に門を持つという構造、東南隅（想定）から門までの距離も南と等しい。このことから北側第Ⅱ期建物区画は、構造、軸線、規模ともに南側第Ⅱ期建物区画と同じであることから、Fig.37－(1)のように堀を挟んで南北にほぼ同時期に、相似形の建物区画が並列していたことになる。南北建物の役割の異同については、今後の調査により徐々に明らかになるものと思われるが、少なくとも今回の調査で、従来の鴻臚館建物群のイメージから、より具体的な構造が明らかになってきた。

第Ⅲ期礎石建物

さらに平成13年度調査区では、第Ⅲ期礎石建物１棟が堀北側で初めて確認された。平成12年度調査区では球場建設時の削平の影響で、この時期の建物は検出されなかったが、グランド中央部に近い平成13年度調査区は影響が甚大ではなく、辛うじて検出することができた。礎石の大半は既に除去されており根石及び掘方での検出であるが、南側礎石列東端の２個は原位置から若干ずれてはいるものの遺存し、長軸２ｍ前後の自然礫を用いた大きなものである。建物は東西に長く、南北柱間が3.0ｍで梁行き２間の６ｍ、東西柱間が3.0ｍで桁行き11間分33ｍが検出されている。さらに西側に伸びているものと思われる。北側に雨落ち溝が付設されている。東側は地形的に制約があり、また、雨落ち溝が収束していることからこれ以上は延びない。主軸はN-88°-W（南北軸はN-2°-E）にとる。この軸線は第Ⅱ期布掘掘立柱（塀）と同じで、また、南北礎石列の中間軸線に重なり、北側礎石抜き穴NP１も布掘掘立柱列東列に重なる。このことからこの建物の建築基準線は、第Ⅱ期建物基準を踏襲したものといえる。

この堀北側で初めて確認された礎石建物は、堀南側で見つかっている第Ⅲ期礎石建物のうち、小子房的建物と考えられているSB31（Fig.28）と、南北棟、東西棟の違いがあるものの、軸線、間取り寸法が同一であり、同一時期の建物であるといえる。このことから、第Ⅲ期の段階においても、堀南北に建物が存在していた事が明かである。しかし現在のところ、１棟だけの検出で、建物群全体の配置は不明であり、堀南北建物群の比較は容易ではないが、将来的にさらに北側で検出できる可能性も高く、今後に期待したい。

また、鴻臚館に関する史料中に具体的な建物名称がいくつか見える（巻末参考史料）。そのうち「園城寺文書」には858（天安２）年６月22日、入唐僧圓珍が鴻臚館に入り、このとき唐商人高奉が「鴻臚北館門楼」に遊行した圓珍に漢詩を奉じた事が記されている。また、「入唐五家傳」には861（貞観３）年8月9日、入道高岳親王が鴻臚館に到着し、この時大唐商人李延孝が「鴻臚北館」にいた事が記されている。今回確認できた堀北側礎石建物は、この鴻臚北館の一部に相当するものであろう。

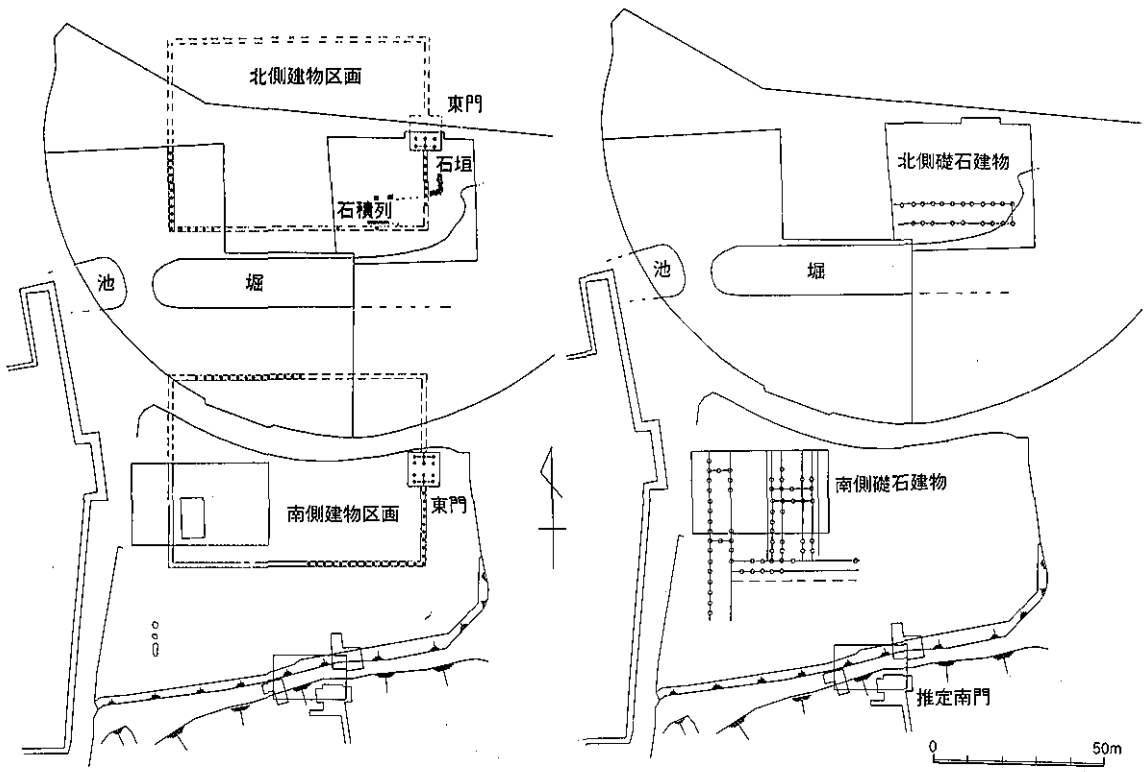
第Ⅳ～Ⅴ期の遺構

この時期、鴻臚館は公設迎賓館から、商人の宿泊所兼交易所に変容しており、大量の輸入陶磁器が出土しているが、これまでの調査で第Ⅳ～Ⅴ期の明確な建物遺構は確認されておらず、廃棄物処理土坑が中心であった。今回の調査でも同期の建物遺構は確認されておらず、土坑のみの検出である。しかし、堀堆積の北側に新しい瓦が多いことや、前述の史料のように「鴻臚北館」に唐商人がいたこと、等から、この時期の建物は堀北側に収斂していったのではないかと想定される。現在のところ未確認ではあるが、さらに北側に当該期建物が広がっている可能性が高い。

造成事業の変遷

これまでの調査で、鴻臚館（筑紫館）の建設に当たっては、自然地形の丘陵を削平し、谷を埋立整地を行い、平坦面を造成していたことが明らかになっている。平成13年度調査区でも、一部削平を受けているものの埋立造成の面的広がりが確認できた。微妙な自然地形や造成前後の状況は土層変換線と土層断面図にみることができる。これによると埋立整地は一度に行われたものではなく、次のような段階に分けられる。

①自然丘陵上に古墳の存在したことがうかがえる。（古墳未確認）
②石垣SX1245を築造し、北側を埋立造成。一部掘立柱建物が造られる。
③石垣SX1245の南側を埋立拡幅し、その途中に石積みSX1278を築く。
④SX1278の南側埋立斜面を一旦掘り下げ、版築状に埋立。
⑤④に第Ⅱ期布掘を掘り込み、塀を造る。
⑥第Ⅱ期建物廃絶後跡地を整地し、南側を埋立拡幅造成、第Ⅲ期建物礎石を据える。
⑦第Ⅲ期建物廃絶後、建物跡に焦土、瓦等を埋め整地。これに廃棄物処理土坑、小規模な地床炉が営まれる。



（1）第Ⅱ期・第Ⅱ期以前遺構　　（2）第Ⅲ期遺構

Fig. 37　鴻臚館検出建物遺構平面概念図

⑧鴻臚館廃絶後、中世に整地。小規模な寺院が営まれたものと思われる。
⑨福岡城築城によって大規模な整地が行われる。

4．平成14年度調査速報

平成14年度発掘調査は、北側第Ⅱ期布掘り柱列および第Ⅲ期礎石建物の延長を確認する事を目標として、調査区を設定した。面積は約1200㎡

(1) 検出した主な鴻臚館関係遺構

第Ⅲ期

礎石建物　平成13年度調査で検出された東西棟SB1228の、南側柱筋の延長部分から、礎石抜き跡と思われる根石が出土した。遺存状態は不良。

第Ⅱ期

布掘り柱列　平成12年度、平成13年度で確認された布掘り柱列を結ぶ東西列が検出された。

石垣遺構　布掘り柱列の南側から、これとほぼ平行して石垣が出土した。谷を埋め立てた斜堆積の盛り土層を石垣で受け、その内側に布掘り柱列を掘り込んでいた。第Ⅲ期礎石建物に先行する。これらの点から、布掘り柱列と一連の造成として営まれた第Ⅱ期の石垣と考えられる。

第Ⅰ期

石垣遺構　昨年度調査区の石垣南東角付近を大きく掘削し再調査、これに加えて、石垣遺構の西側延長部を今年度調査区内において検出した。その結果、石垣は南東角を最深とし、北と西に深さを減じながら続き、西については50mにわたって延びている事を確認した。西端は、唐突に途切れる。屈折して延びる形跡は見られない。

掘立柱建物・柱列　石垣遺構西端から北に折れるように、掘立柱の柱列が検出された。この東に平行して、梁間２間、桁行４間の側柱建物（南北棟）が検出された。これらは調査途中であるが、現時点では、掘立柱であること、石垣と方位を同じくする事をもって、第Ⅰ期に属するものと想定したい。

鴻臚館以前の遺構

石室敷石　調査区の北側から、古墳の石室残欠とみられる敷石遺構が検出された。敷石間からはガラス小玉、細根式鉄鏃、耳環が出土している。鴻臚館（第Ⅰ期）の造営にともなって、破壊されたと考えられる。鴻臚館の調査で初めて確認された古墳で、鴻臚館以前の状況を知るための好資料である。

Fig. 38　平成14年度調査区と石垣（南西から）

参考史料

【園城寺文書】

天安二（八五八）年六月二十二日辛亥、入唐僧円珍、唐より帰来して、大宰府鴻臚館に入る。

（外題）「弘伝真言止観両宗官牒」

太政官

十禅師延暦寺伝燈大法師位円珍　年五十四　臈三十四

（略）（大中）十二年正月、刺史朝散大夫勅賜緋金魚袋厳脩睦、新下台州円珍二月初頭、至州相看、篤蒙存問、便修拾求法来由、及経論目録、准貞元例、請押判印、国恩所致、遂于所懐、六月八日辞州、上商人李延孝船過海、十七日申頭、南海望見高山、十八日丑夜、至止山島、下碇停住待天明、十九日平明、傍山行至本国西界肥前国松浦県管旻美楽埼、天安二年六月二十二日、廻至**大宰府鴻臚館**、八月十四日、幸蒙先朝勅、追十二月二十七日、的遣帝都、

（略）

貞観八年五月二十九日　　正六位上行左小史刑部造「真鯨」

参議正四位下行左大弁兼勘解由長官南淵朝臣「年名」

【園城寺文書】昨日**鴻臚北館門楼**遊行一絶七言奉上上人（円珍）

高奉

鴻臚門楼掩海生　四隣官望散人情　遇然聖梨遊上嬉　一盃仙薬奉雲青

懐秋思故郷詩一首七言奉上上人

日落西郊偏憶郷　秋深名月破人腸　亭前満露蟬声乱　窮鴈天辺一帯長

盡夜吟詩還四望　一輪桂葉落西方　一年未有鴻臚館　詩興千般入文章

今月十二日得上人憶天台詩韻、和前奉上点韻五十六字

飛錫東流憩四龍　却贈天台五嶺松　難忘衆仙行道処　望思羅漢念真容

六年洗骨金剛汁　八戒蕪心遨身通　謂縦法界無障碍　志縁常在五台中

小生高奉

大唐客管道衙前散将蔡輔謹上

大徳帰京政奉送別詩四首

鴻臚去京三千里　一騎蘿條駿苦飛　執手叮嚀深惜別　龍門早達更須帰

一別去後涙悒悒　心中常憶酔迷迷　看選応是多仙子　直向心頭劃寸枝

一別蘿蘿行千里　来時悠々未有期　一年三百六十日　無日無夜不相思

遊歴天下心自知　齋前惜別不忍啼　自従一辞雲去思　千里相送候来期

【入唐五家伝】頭陀親王入唐略記

貞観三（八六一）年八月九日庚戌、入道高岳親王、入唐せんとして、京を発し、大宰府鴻臚館に入る。

貞観三年三月、親王被許入唐、六月十九日、発自池辺院南行、御宿巨勢寺、別当僧平海率徒衆将迎、平海此親王御弟子、親王甚卑下、不要僧徒之迎候、経歴此寺二十日、于時七大寺長宿和尚朝夕鳩集、七月十一日、出自巨勢寺、指難破津、名僧数十許人、逐従相送、到大和国葛上郡旧国府、爰親王駐馬、群僧徒云、従此応被却廻、即僧徒下馬拝別、皆垂涙云、僧等園傾暮、再展何日、親王答云、彼此好在、随縁相見、其晩頭到難破津、便倩得大宰貢綿帰船二隻、十三日、駕船、八月九日、到著**大宰府鴻臚館**、于時主船司香山弘貞申府、即大弐藤原冬緒朝臣・筑前守藤原朝臣貞庭等、率随身騎兵百余人到来、頂拝存問、于時大唐商人李延孝在前居**鴻臚北館**、大弐明旦帰府、留貞庭朝臣云、求其間、結番遁候、親王我望非如此、今須早去、九月五日、去向壱伎島、島司并講読師等亦来迎囲繞、親王弥厭此事、□□左右自彼渡著小島、此小島名云斑島云々、於是白水郎多在、仍不停、更移肥前国松浦郡之柏島、

（略）

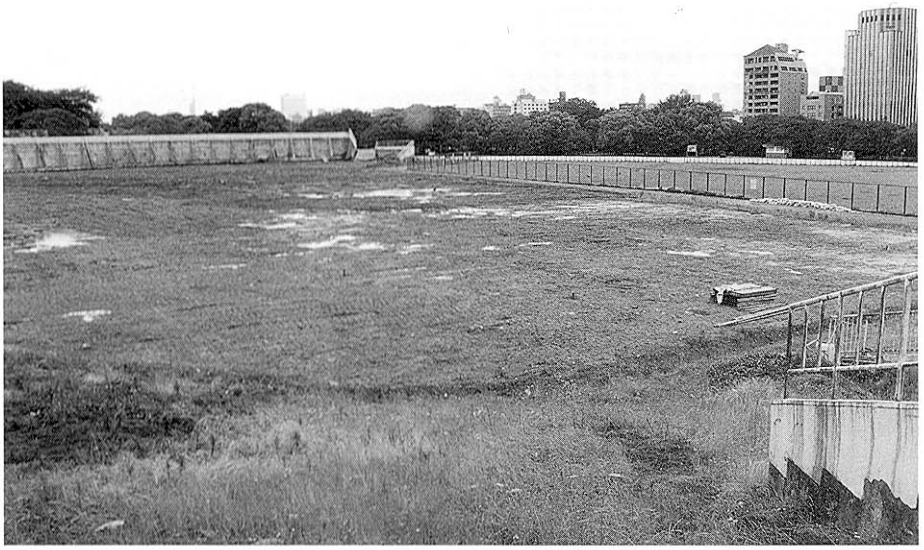
（平安遺文から）

図　　版

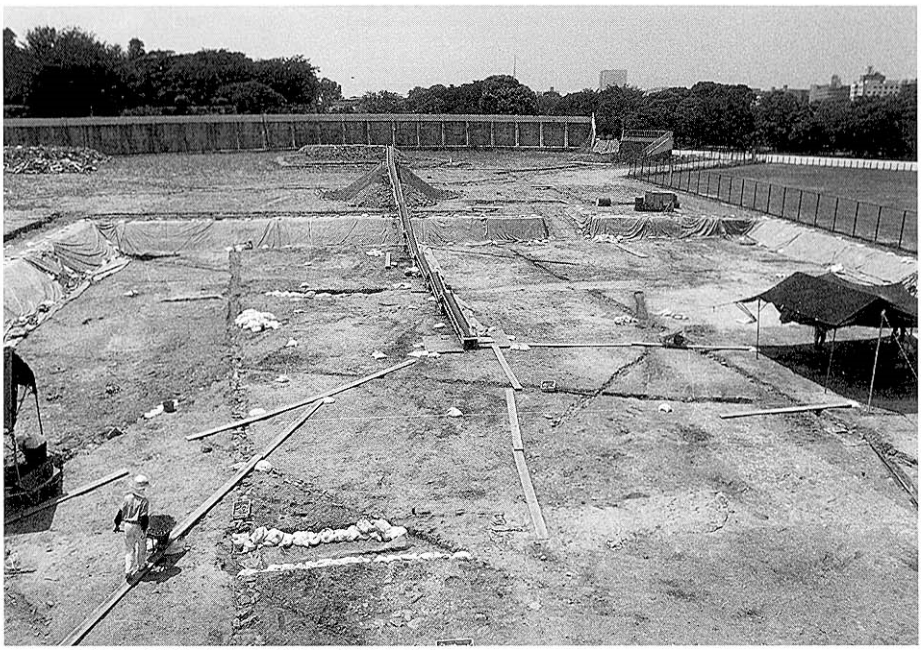
（PLATES）

平成13年度調査区全景（南から）

1．調査前の状況（東から）

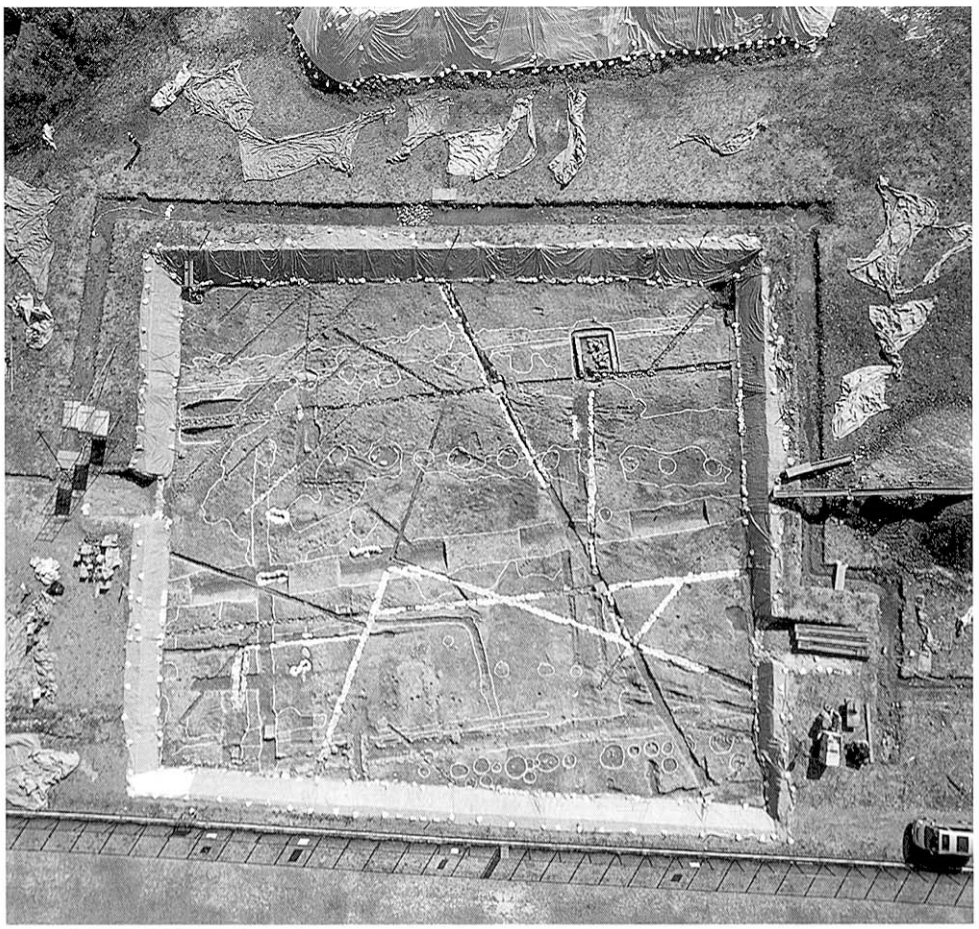


2．調査前の状況、残土撤去後（東から）

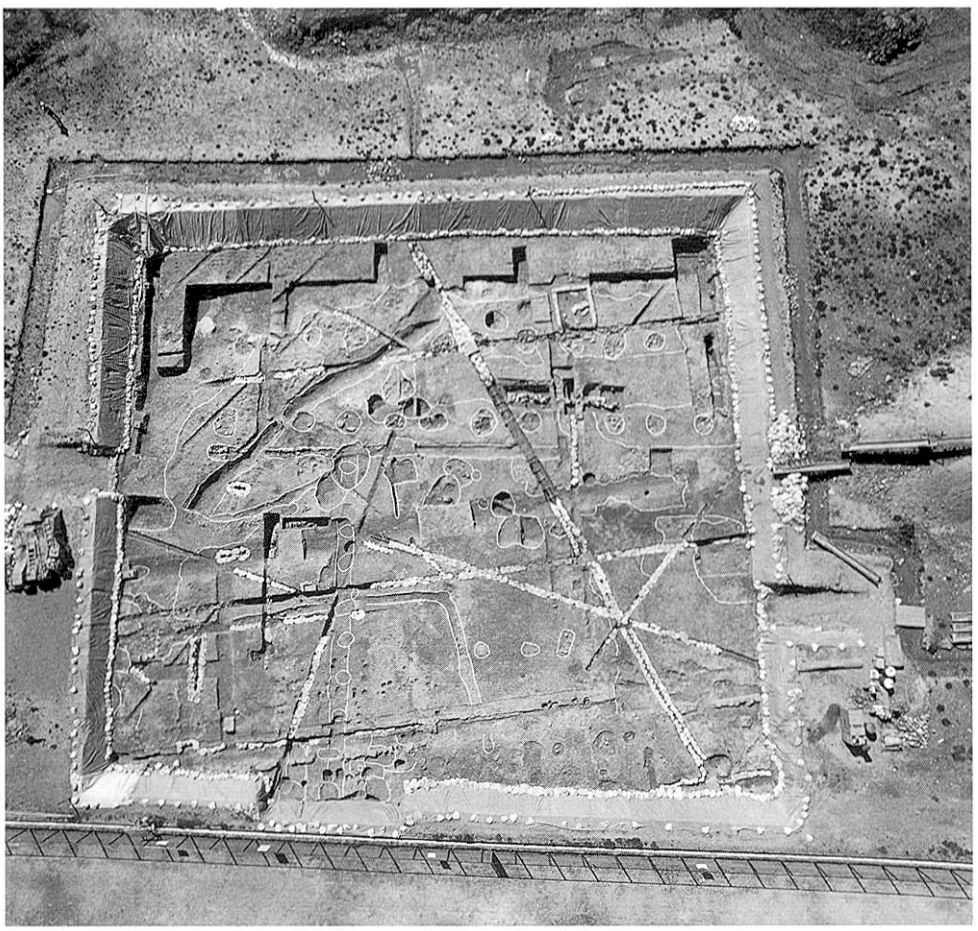


3．表土剥ぎ終了後の状況（東から）

平成13年度調査区



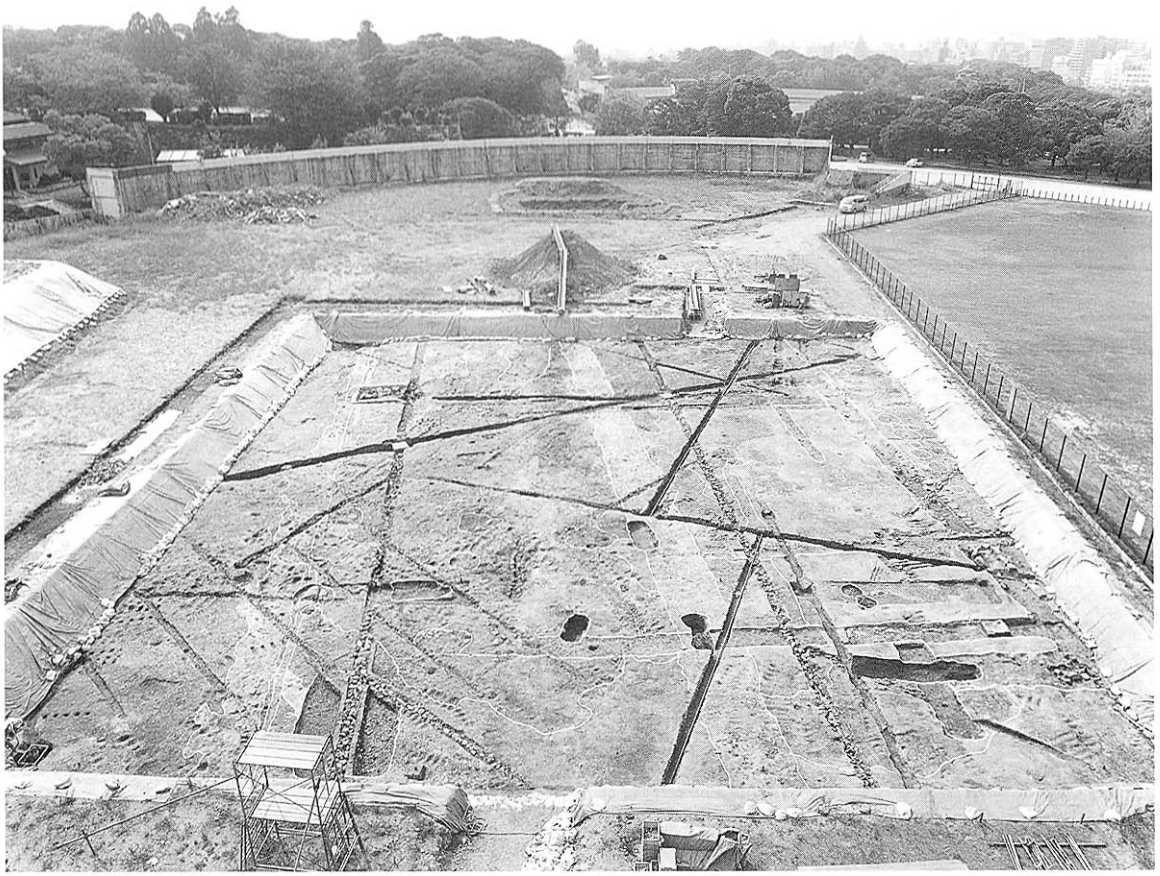
1．上部検出遺構面



2．下部検出遺構面

調査区全景　空中写真

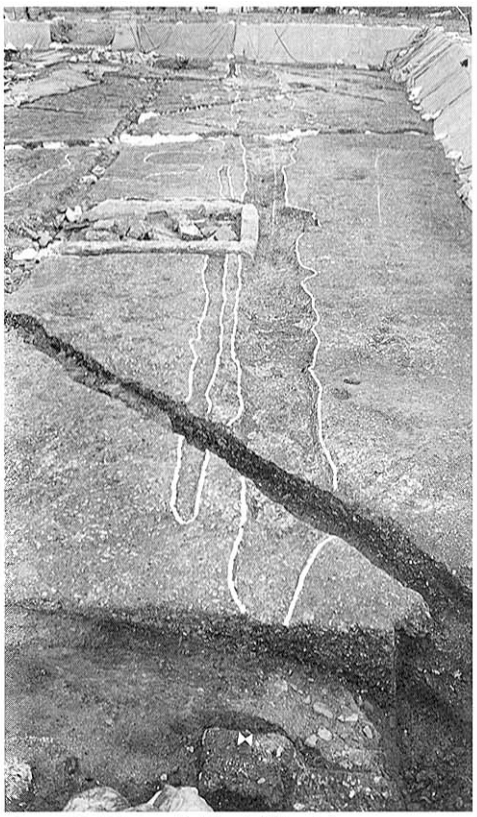
1．上部検出遺構面全景（西から）



2．上部検出遺構面全景（東から）

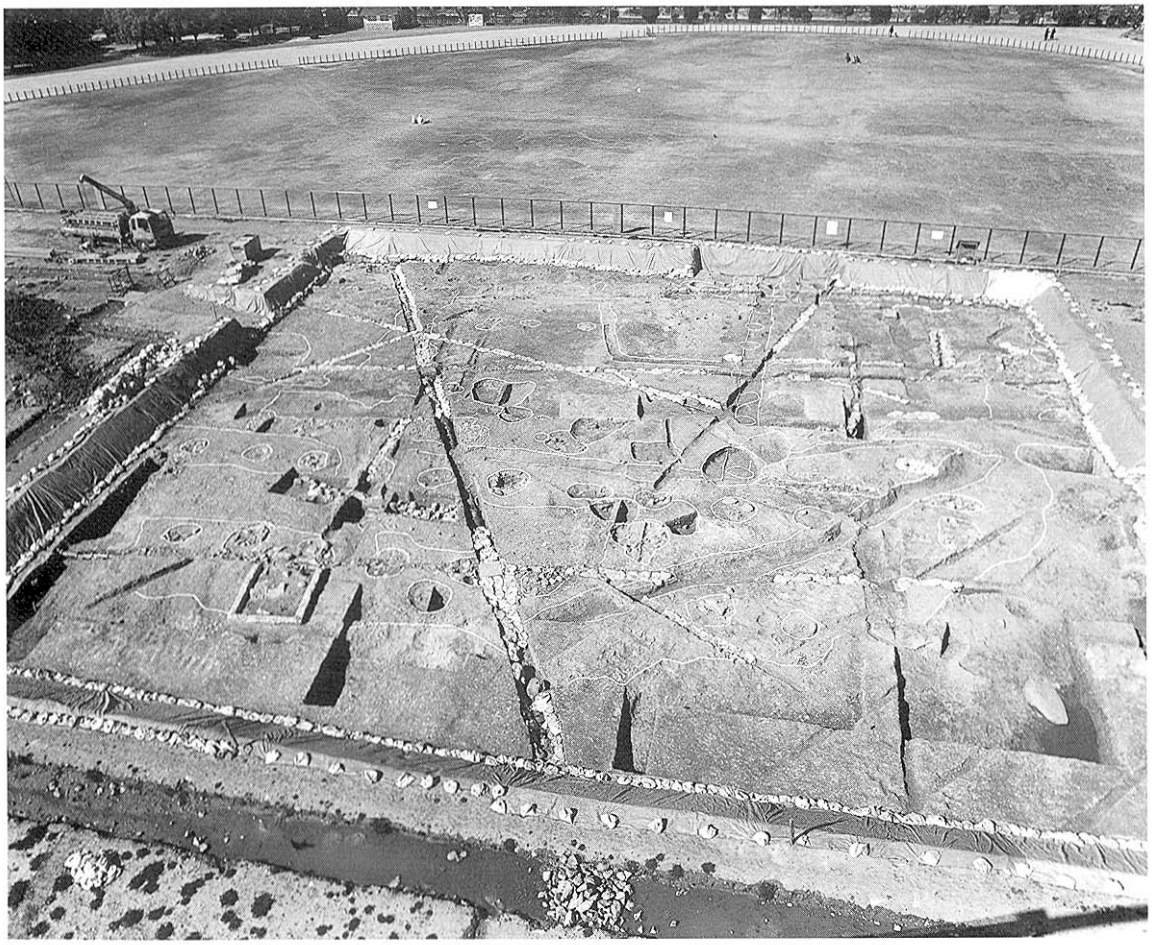
1．SD1219　全景（東から）

3．SD1206　全景（東から）



2．SD1219　全景（西から）

4．SD1206　土層断面（西から）



1．平成13年度調査区下部検出遺構全景（南から）

2．平成13年度調査区下部検出遺構全景（東から）

3．SD1230　土層断面（南から）

1．SM1208　最上面水口遺構遺物出土状況(東から)

4．SE1243　全景（東から）

2．SD1222　遺物出土状況（南東から）

1．遺物取り上げ後全景
（南から）

2．遺物出土状況（東から）

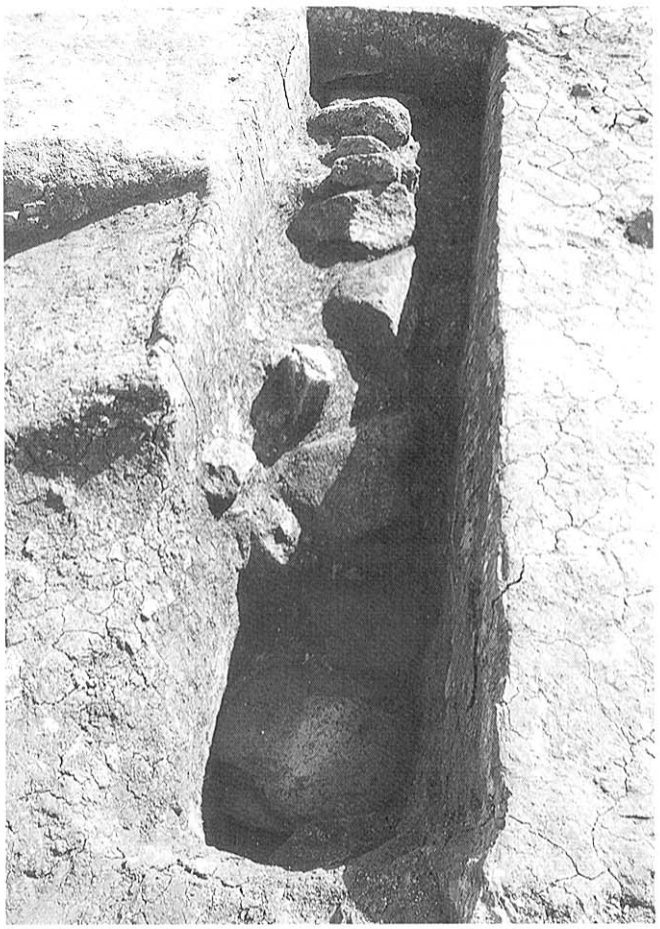
3．須恵器甕出土状況（西から）

4．遺物出土状況部分（南から）

SK1261

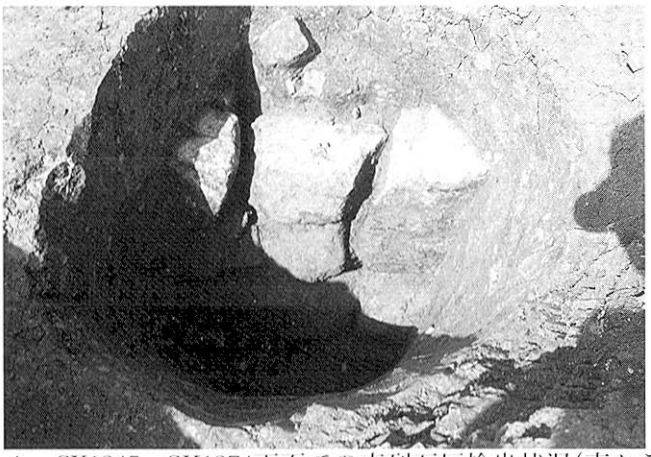
1．石垣全景（南から）

2．東南隅石積み状況（南から）

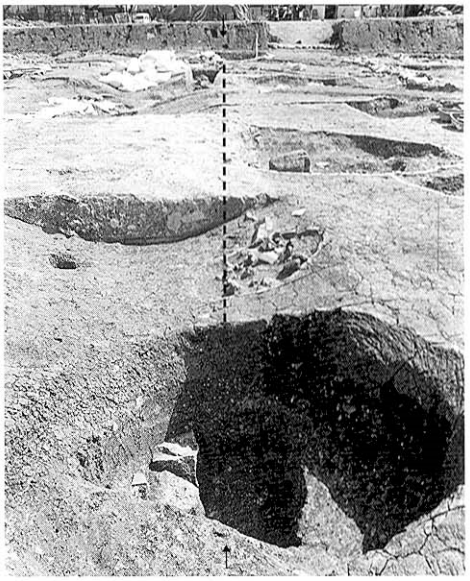


3．石垣南列検出状況（西から）

SX1245



1．SX1245　SK1274下面での南列石垣検出状況(南から)

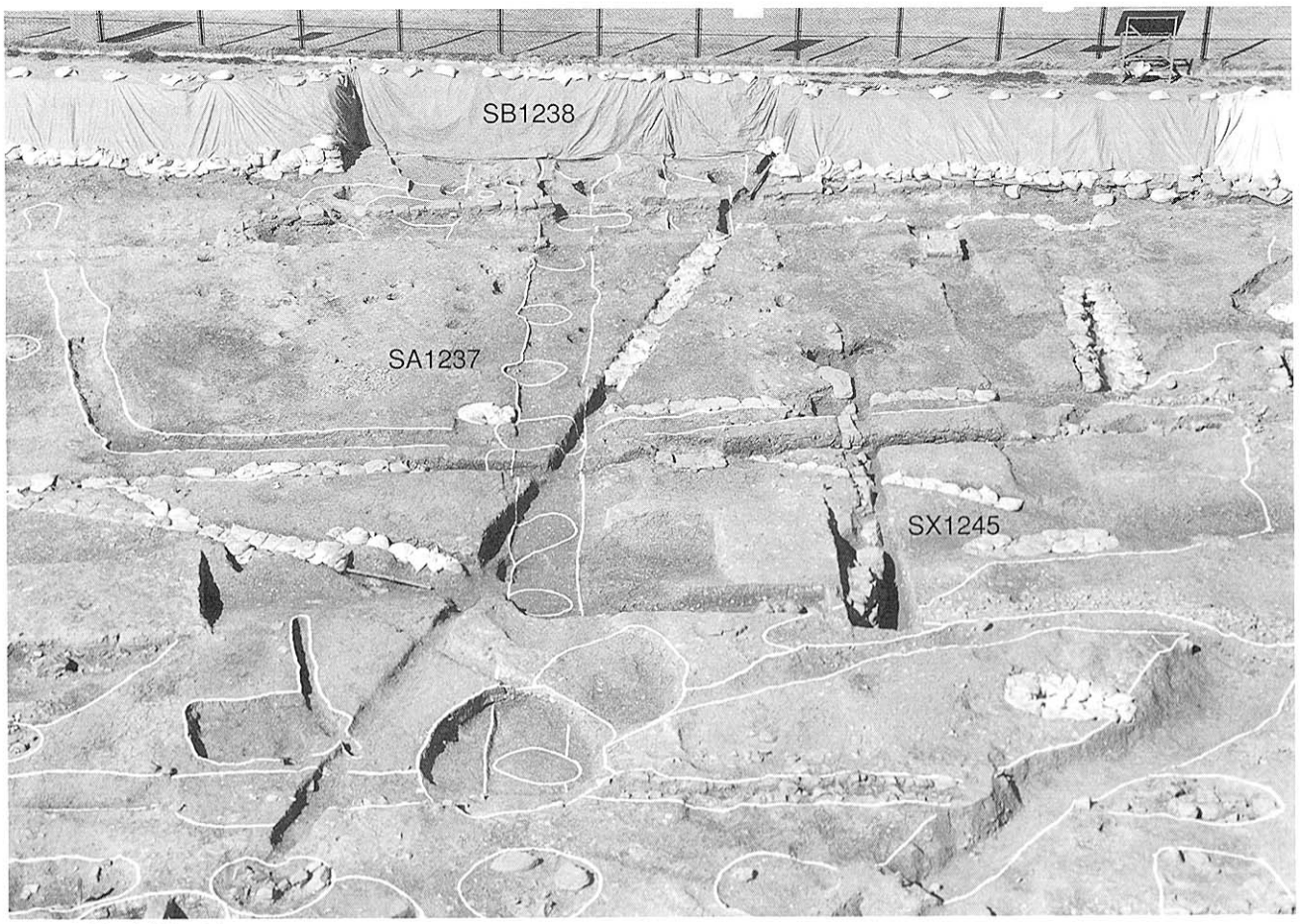


2．SX1245　石垣南列ライン（西から）

3．SX1245　SD1218での南列石垣検出状況（北から）

4．SX1278　石積み全景（西から）

5．SX1278　石積み全景(東から)



1．全景（南から）

2．全景（北から）

SA1237、SB1238

1．SX1278南での検出状況（東から）

2．SX1278南の土層断面（南東から）

3．SX1278南での検出状況（南西から）

7．SB1238　脇間掘方と柱抜き跡（南から）

4．西端土層確認トレンチでの検出状況（西から）

5．西端土層確認トレンチでの検出状況（東から）

6．SD1218土層断面での検出状況（西から）

SA1237　南列検出状況

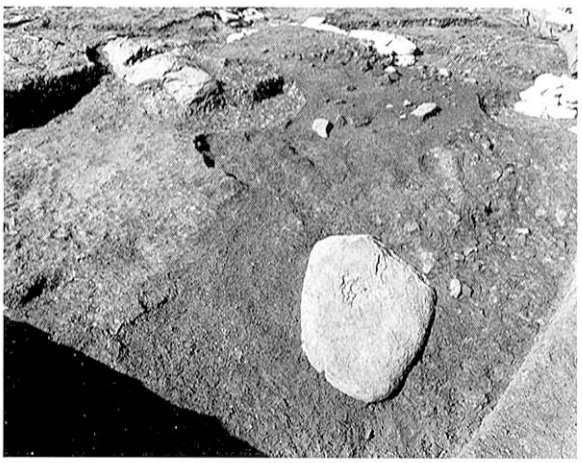
1．遺構全景　調査完了後（東から）

2．遺構全景　人の位置が柱位置（東から）

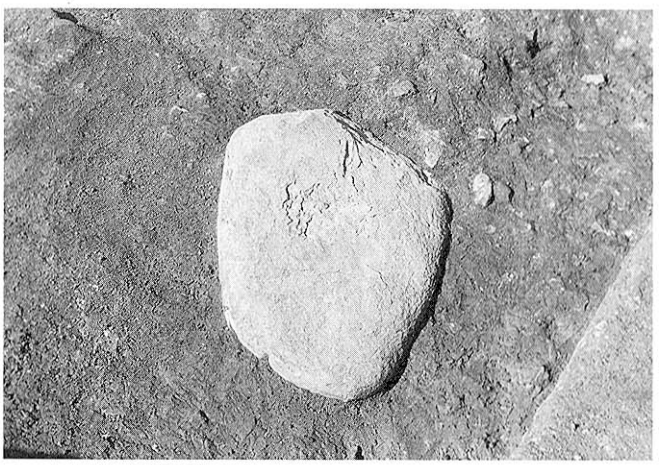
SB1228

1．SD1216　雨落ち溝全景（東から）

2．SD1216　雨落ち溝部分（東から）

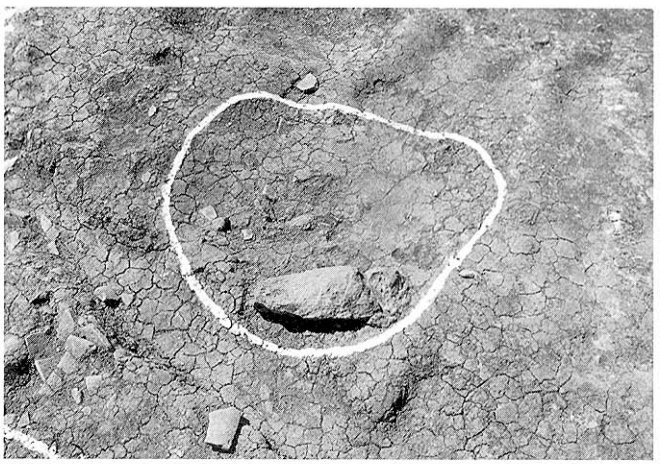


3．SP02と01（南東から）



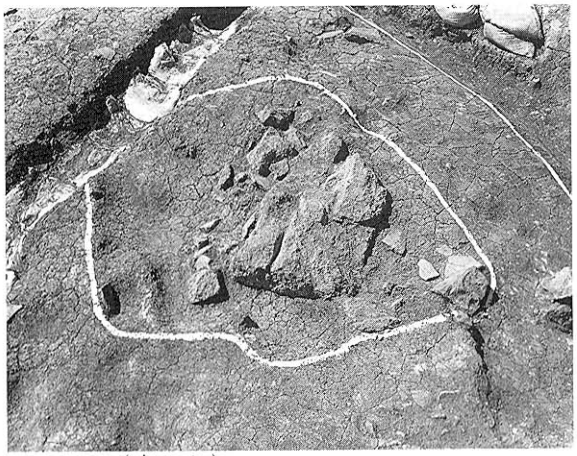
4．SP02（南東から）

5．SP01（南東から）

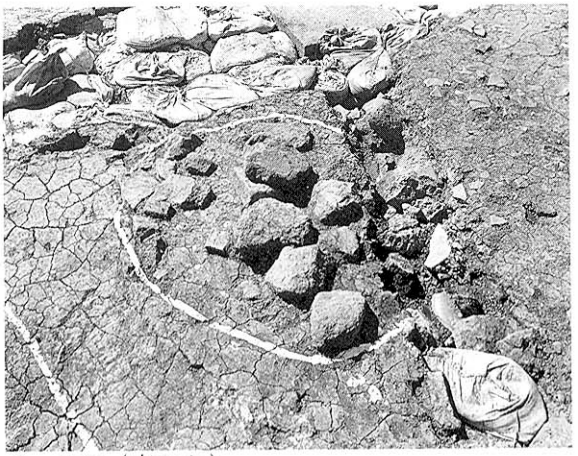


6．SP0（東から）

SB1228　礎石および礎石根石検出状況

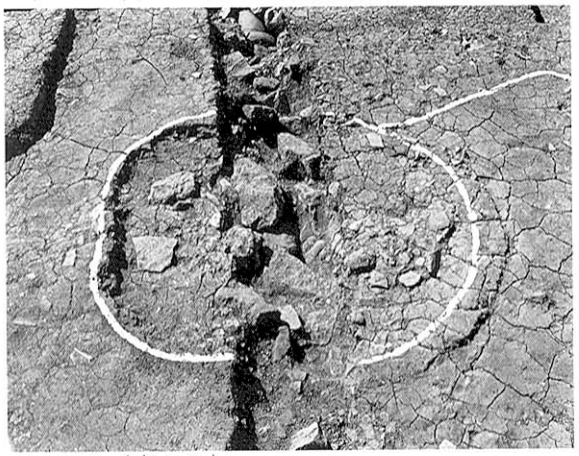


1．SP1（東から）

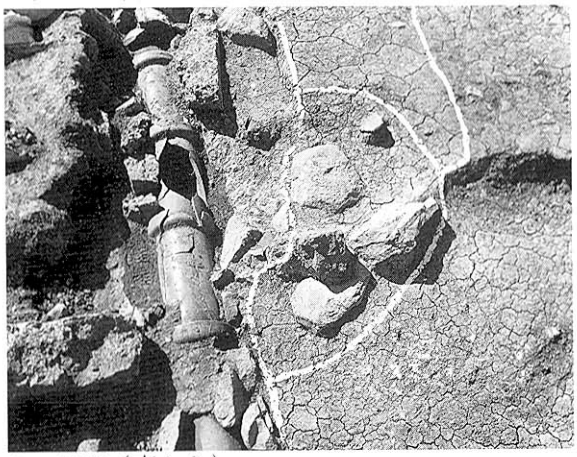


2．SP3（東から）

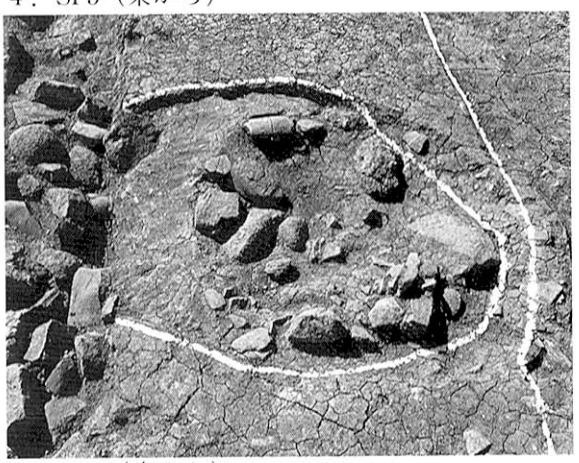
3．SP4（東から）



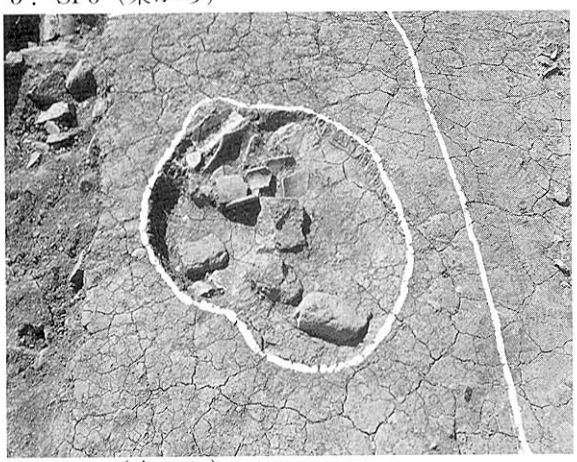
4．SP5（東から）



5．SP6（東から）

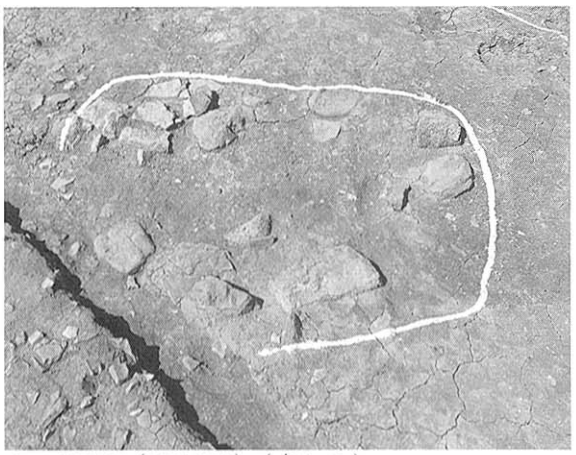


6．SP7（東から）

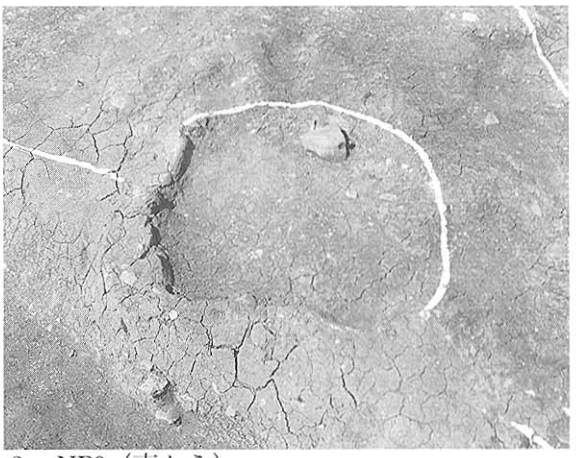


7．SP8（東から）

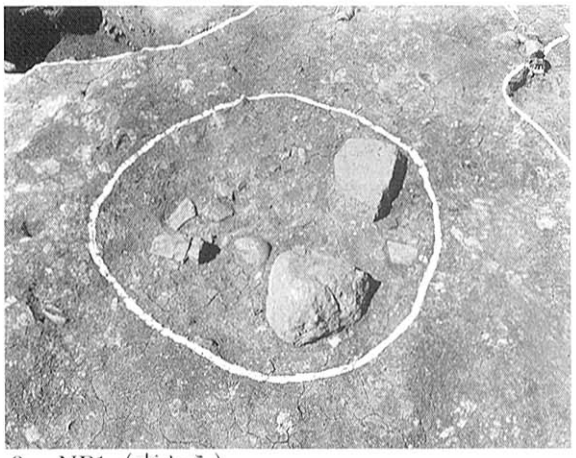
SB1228　礎石根石検出状況



1．NP02（SK1281）（東から）

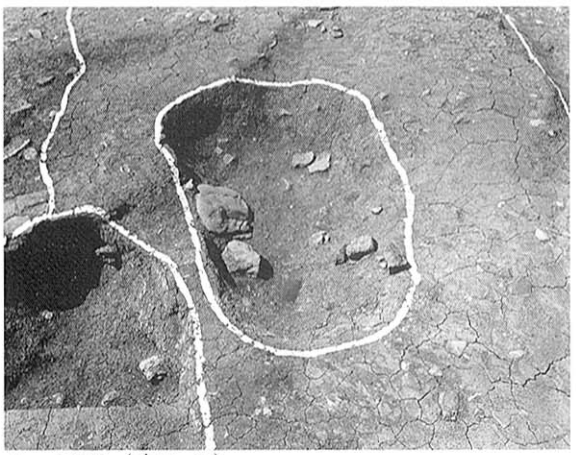


2．NP0（東から）

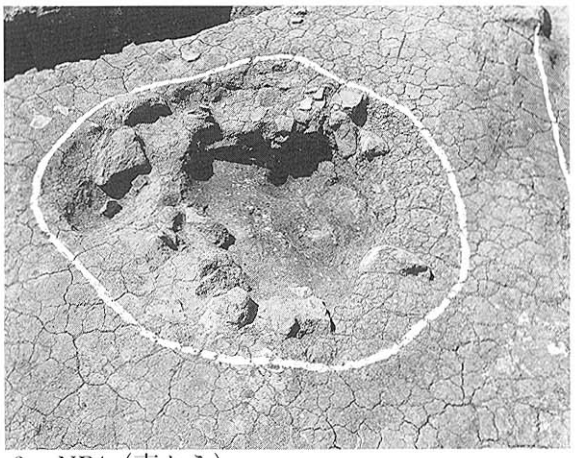


3．NP1（東から）

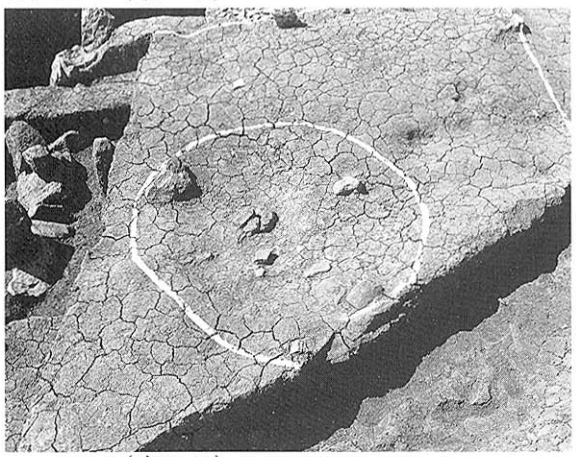
4．NP2（東から）



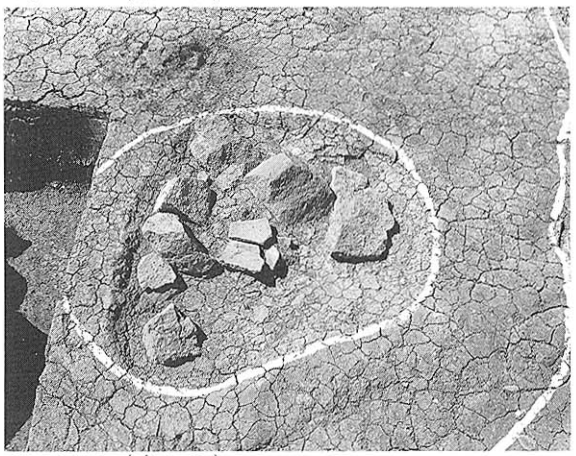
5．NP3（東から）



6．NP4（東から）

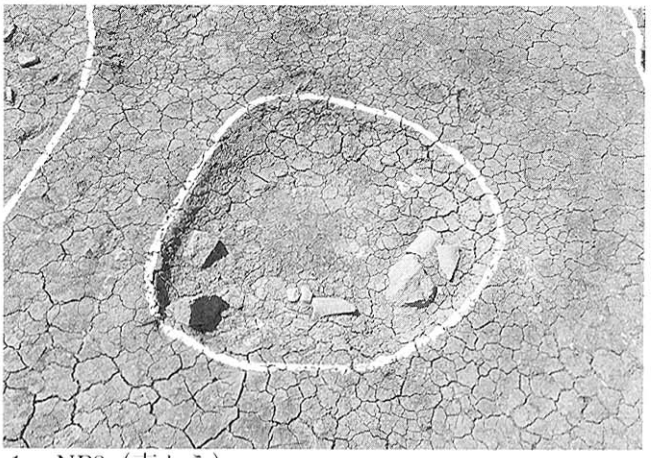


7．NP5（東から）

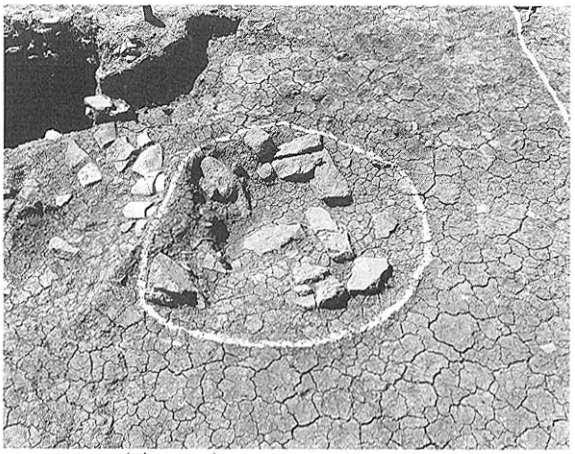


8．NP7（東から）

SB1228　礎石根石検出状況



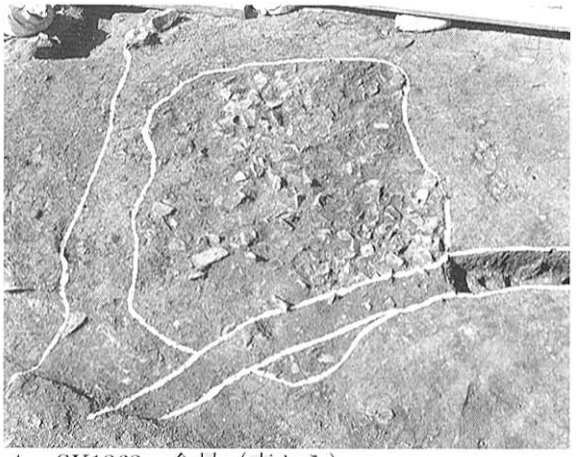
1．NP8（東から）



2．NP9（東から）

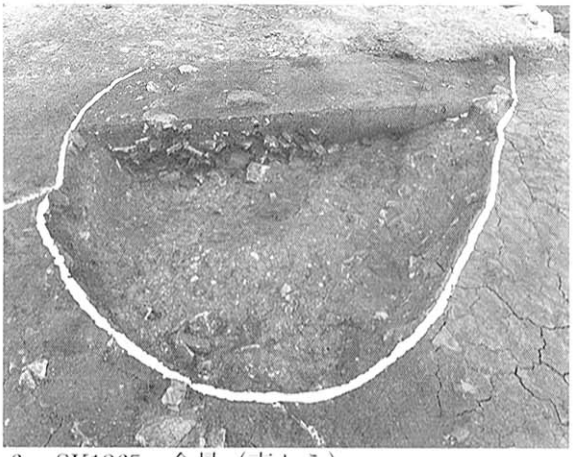
SB1228　礎石根石検出状況

3．SK1255　全景（南から）



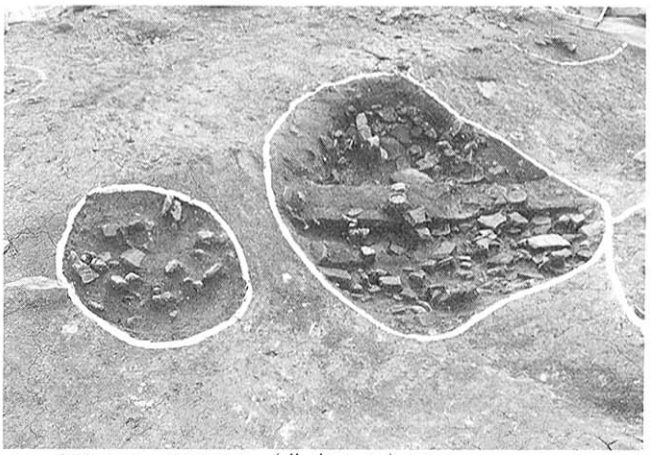
4．SK1262　全景（東から）

5．SK1264　全景（南から）



6．SK1265　全景（南から）

7．SK1267　全景（南から）



8．SK1274、SK1275（北東から）

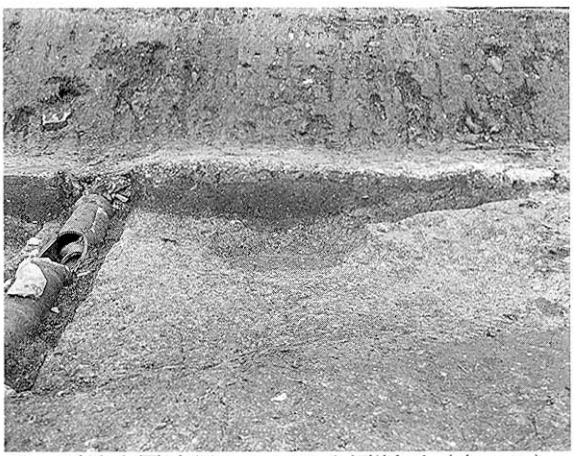
1．鏃形金製品出土状況（東から）

2．水晶出土状況（北から）

3．SK1262長沙窯青緑釉陶枕出土状況(南西から)

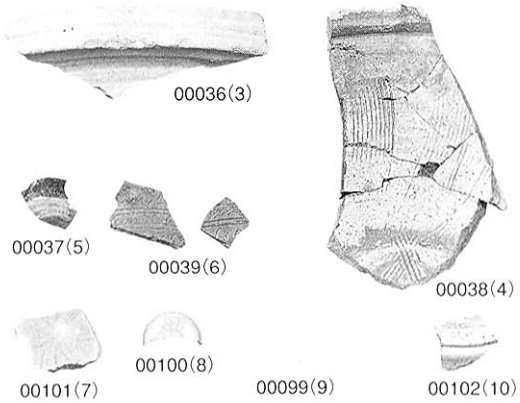
4．整地層　長沙窯青緑釉陶枕出土状況(東から)

5．西端土層確認トレンチ土層断面（東南から）



6．西端土層確認トレンチ土層断面（東から）

7．西端土層確認トレンチ土層断面（東南から）



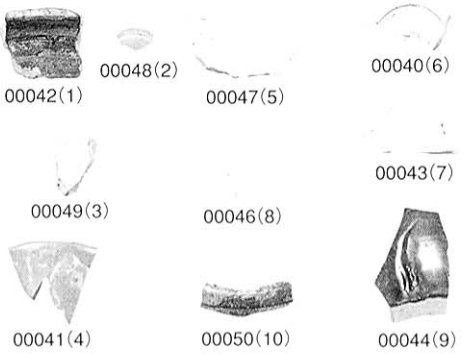


Fig.15

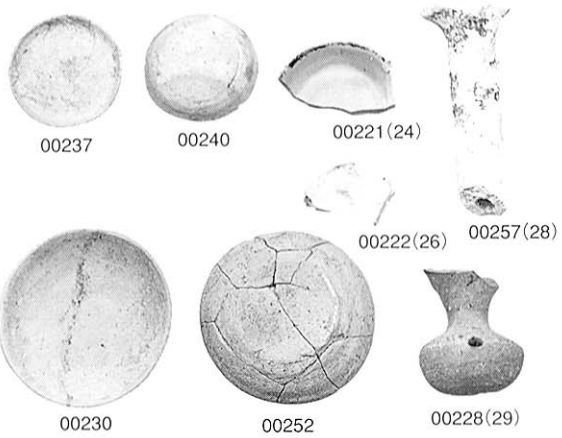


Fig.18

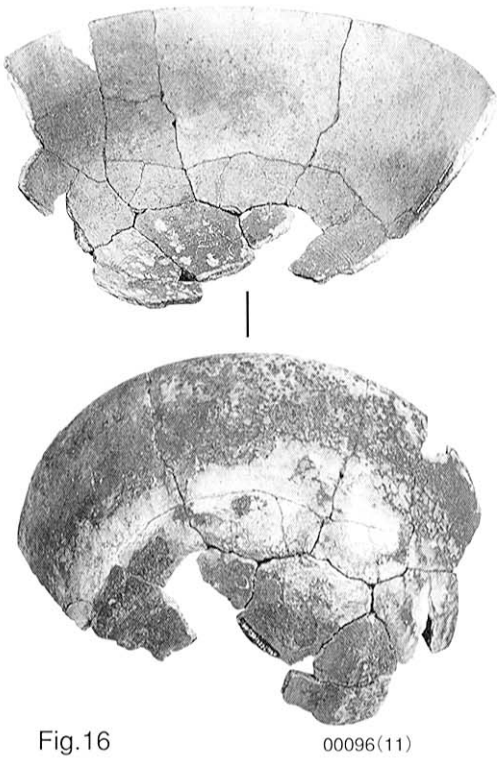


Fig.16

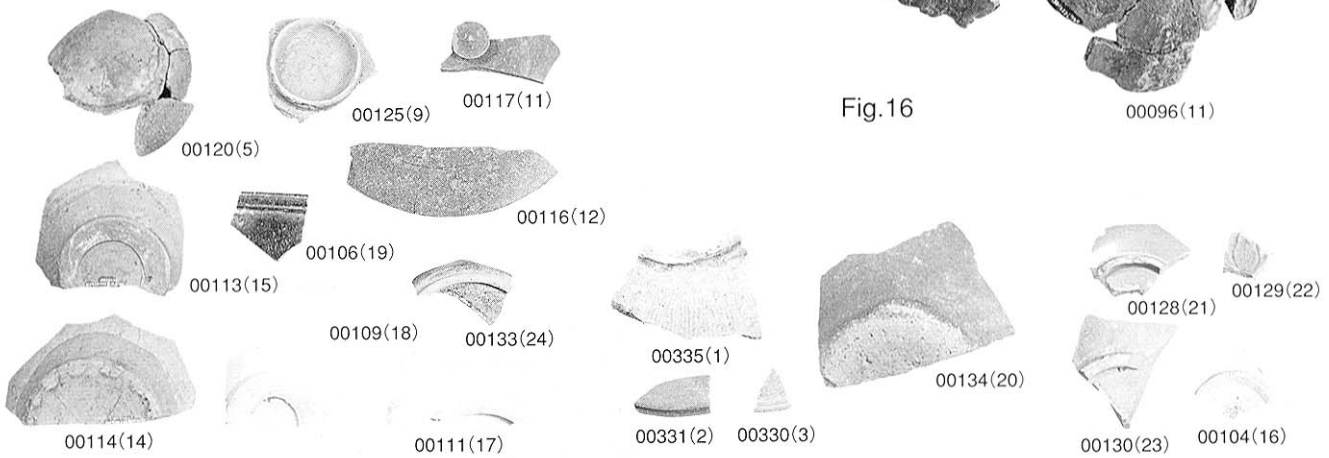


Fig.30

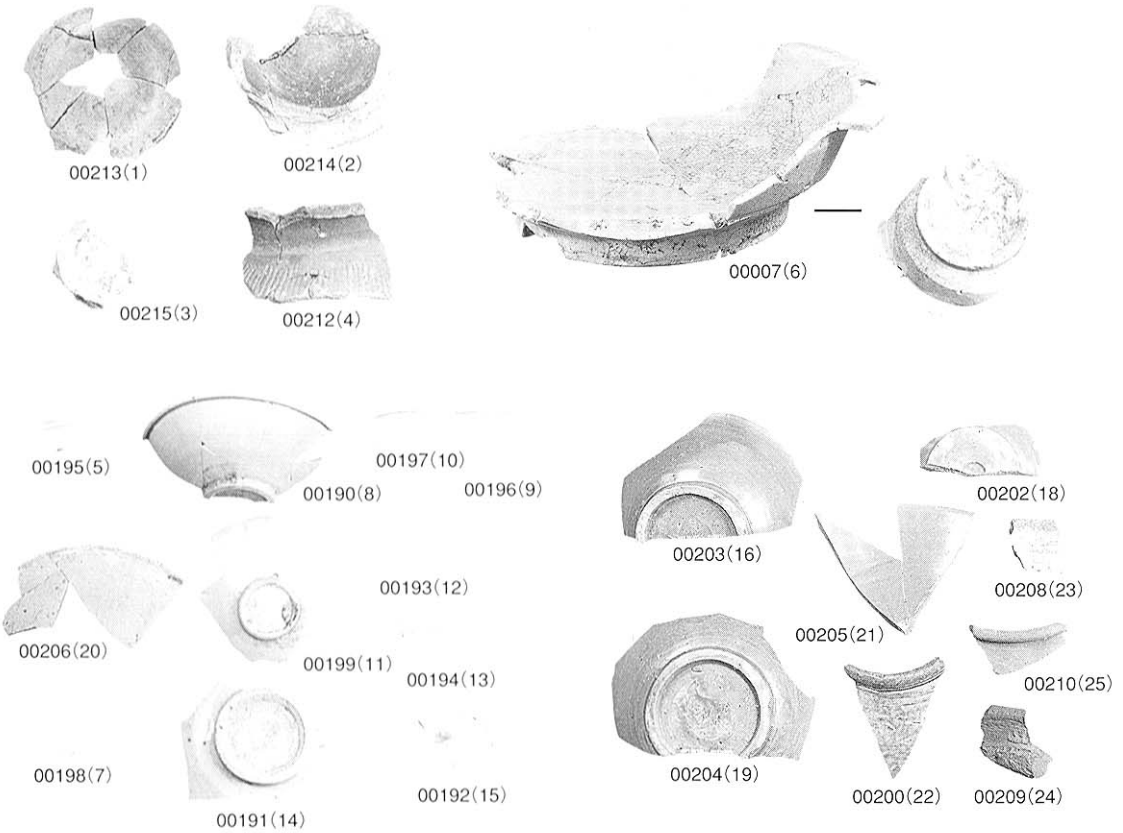
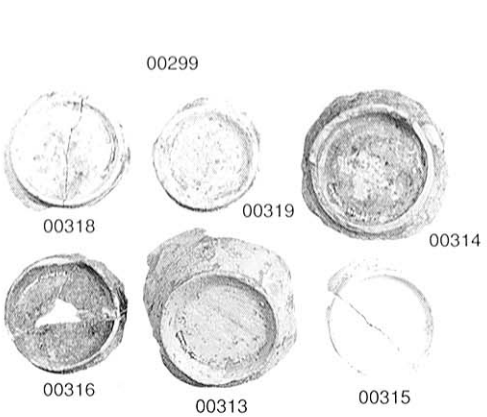


Fig.32



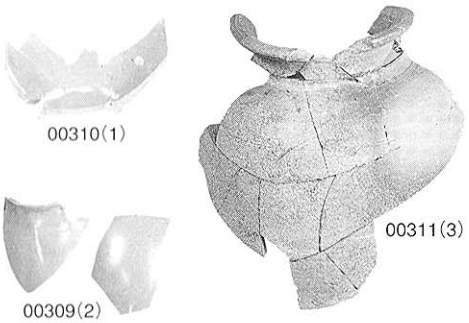


Fig.34

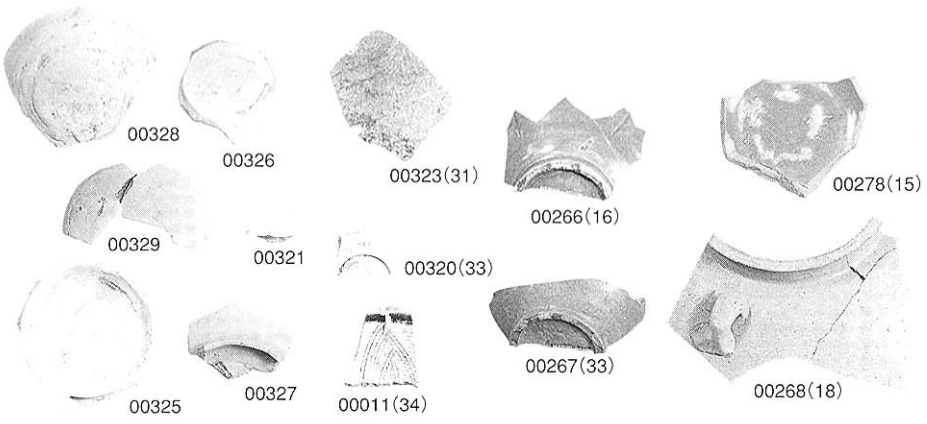


Fig.35

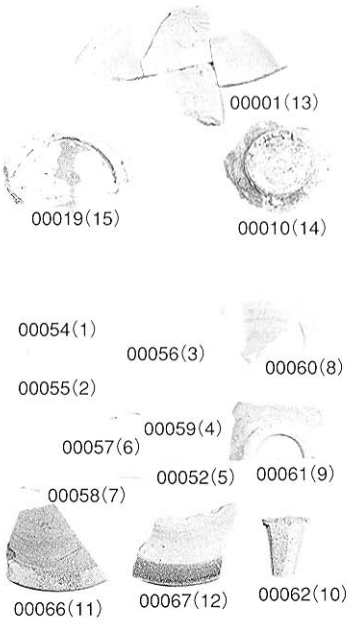


Fig.36

鴻臚館跡 13

—平成13年度発掘調査報告書—

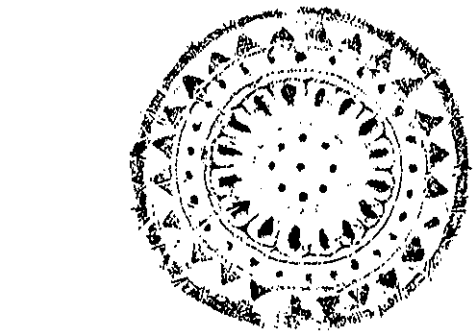
福岡市埋蔵文化財調査報告書第745集

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８－１
平成15年３月31日

印　刷　正光印刷株式会社
福岡市西区周船寺3丁目28－1

KŌROKAN
13

Excavation and Studies of
Kōrokan Ruins
in Fukuoka



March 2003
THE FUKUOKA CITY BOARD OF EDUCATION
JAPAN